猟闇師　～ 赫の一族 ～

雷紋寺　音弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猟闇師　～　赫の一族　～

【Ｎコード】
Ｎ１１９７Ｏ

【作者名】
雷紋寺　音弥

【あらすじ】
四国地方に古来より伝わる呪術師の家系、犬神筋。
犬神筋であり退魔師の祖父を持つ少年、犬崎紅は、学校の不良の呼び出しに応じて旧校舎の肝試しに出向くことになる。
その日を境に、徐々に村の中で起こる日常の崩壊。
惨劇の裏で牙を研ぐのは、祟り神と化してしまった犬神なのか！？
猟闇師シリーズ第四弾。
最強の外法使い、犬崎紅の悲しき過去が明らかとなる！！

～ 逢魔ヶ刻　帰郷 ～（前書き）

怪物と闘う者は、その過程で自分自身も怪物になることがないよう、気をつけねばならない。
深淵をのぞきこむとき、その深淵もこちらを見つめているのだ。

――――フリードリッヒ・ニーチェ
『ツァラトゥスラはかく語りき』より

〜 逢魔ヶ刻　帰郷 〜

四国地方某所。

四方を山と海に囲まれた、閑静な田舎町にその病院はあった。周りを覆うコンクリートの外壁は、ところどころに大小様々な亀裂が入っているのが見て取れる。それだけでなく、深夜、地元の不良達が訪れて残したと思しき、赤や黄色で描かれた派手な落書きもあった。

病院の入口にある鉄の門は、今は完全に閉じられていた。海から上がって来る潮風によって、その風貌には、既に元の姿の面影はない。赤く錆びついた鉄門は、時折、風に揺られてぎいぎいと鳴いていた。

入相の鐘に誘われて、今日も夜の帳が世界を包む。山も、海も、森も、街も、全てが宵闇の中に沈んでゆく。それは、この朽ち果てた病院とて変わらない。

月明かりの下、かろうじて門の前に取り付けられていた看板が、夜風に揺られて軋んだ音を上げた。

――――――六石山（ろっこくやま）病院。

腐食が激しいものの、辛うじて、かつて建物が病院だった頃の名前を読み取ることはできた。もっとも、それが分かったところで、この病院を訪れる患者がいないことだけは確かだが。

夏の蒸し暑い風が、廃墟と化した病院の上を吹き抜ける。風は雲を呼び、それが闇を照らす月を覆い隠した。

誰もいるはずのない、忘れられた病院。深夜の静寂の中において、その場所だけは、なぜか異様な空気を全身から発していた。時折、建物の中を吹き抜ける風の音が、まるで獣の雄たけびのように聞こえてくる。それこそ、地獄の亡者が地の底から這い上がって来る時に発する、苦痛と憎しみの籠った叫び声にも似た音で。

その日は何故か風が強く、病院の窓ガラスがいつもよりも震えていた。まるで、獲物が訪れたことを歓喜するかのように、ガタガタと激しい音を立てている。

ヒタ、ヒタ、という音と共に、病院の中を動く一つの影があった。今は無人となった院内の廊下を、明らかに誰かが歩いている。足音の主が履いているのは、革靴ではなく草履のようなものだろうか。

ジャリッ、という音と共に、今まで聞こえていた足音が急に止んだ。割れたガラスを踏みつけて、それが廊下のタイルと擦れた音だ。音の主は、そのまま窓ガラスに背を向けて、建物の奥へと続く廊下の先を睨みつけている。

月を覆っていた雲が切れ、その隙間から一筋の月光が射し込んだ。その光は、先ほどから廃病院を歩きまわっていた人物の姿を捕え、青白い光の中にその姿がぼんやりと浮かび上がる。

月明かりの下に現われたのは、全身を黒い衣に包んだ一人の少年だった。その手には、梵字の書かれた布を巻き付けた一振りの刀がある。頭には傘を被り、着ているものは随所にほつれが見えた。

およそ、現代を生きる者の格好とは思えない、山籠りをしている修験者のような身なり。全身を包む黒い色の衣とは対照的に、その肌は雪のように白い。割れた窓から吹き込む風に白金色の髪をなびかせながら、血のように赤い瞳で闇の奥を見据えている。

「さあ、出てこい。その奥にいるのは、分かっている……」

少年が、誰に語りかけるともなく言った。その声に答える者はいなかったが、代わりに生温かい風が窓から吹き込み、今にも砕けそうな窓ガラスを乱暴に叩いた。

ガタガタと、風が窓を揺する音だけが病院内に響き渡る。その音は次第に強くなり、まるで何者かが力に任せてガラスを揺らしているようにも聞こえる。それこそ、目に見えない何かが、何本もの手でガラスを叩いているような感じなのだ。

次の瞬間、激しい音を立てて、少年の後ろにあるガラス窓が一斉に砕け散った。風は吹いているものの、空を流れる雲の様子からして、決して強いものではない。が、それにも関わらず、廃病院の窓ガラスは、そのどれもが無残に砕け散ってしまった。

枠だけになった窓の外から、気持ち悪いほどに湿気を含んだ風が入り込んで来る。そればかりでなく、今度は少年の真上にあった、古びた蛍光灯までもが砕け散った。

粉のようになったガラスの破片が、パラパラと少年の上に降り注ぐ。もっとも、そんなことでは少年は動じない。傘の上に降り積もったガラス片を物ともせずに、ただひたすら、闇の奥を睨みつけていた。

「こけ脅しは終わりか。だったら、今度は俺の方から出向くぞ」

少年の脚が、闇の奥へ向かって踏み出される。それを阻むかのようにして、今度は廊下の奥の方から、どんよりと濁った空気が流れてきた。

埃と湿気の匂いを含んだ気味の悪い風が、少年の肌を舐めるようにして撫でた。頭の傘を飛ばされないように押さえるものの、その赤い瞳は、未だ闇の奥を睨みつけたままだ。

廃墟と化した建物の中を、不気味な音を立てて風が吹き抜ける。その音は、果たして本当に風のすり抜けるだけの音なのだろうか。まるで、この世に未練を残して亡くなった者達の、苦痛に満ちたうめき声のように聞こえないでもない。

だが、そんな音に耳を貸すことさえもなく、少年は暗闇の奥へと足を踏み入れた。一歩、また一歩と足を踏み出す度に、彼の周りを包む闇もまた深くなる。

距離にして、どれくらい歩いたのだろうか。

いつしか少年は、建物の地下にある一つの部屋の前に辿り着いていた。廊下を照らす明かりは一切無かったものの、少年の赤い瞳には、闇の淵に沈んだ建物の様子がしっかりと映し出されていた。

昼間、太陽の光の下では、少年の瞳はその力を発揮できない。生まれつき、身体の色素が薄い彼にとっては、日中の光は刺激が強すぎるのだ。

だが、その代わり、彼の瞳は夜の闇の中において、その力を存分に発揮した。例え明かりがまったく無くとも、彼には辺りの光景が手に取るように分かる。それは目で見るというよりは、むしろ頭で感じ取るという感覚に近かった。

朽ち果てた院内にある大きな扉を、少年は乱暴に押し開けた。開け放たれた扉の向こう側からは、今まで部屋に閉じ込められていたであろう、陰湿な空気が溢れ出て来る。

霊安室。不幸にも病院で亡くなった患者が、その身元を引き取りに来てもらうまで安置される場所。様々な死者の想いが蓄積しているであろう場所は、その匂いに引かれ、これまた様々な陰の気を持った者が集まるのである。

少年が部屋に入ったその時、彼は天井の方から一際強い力を感じた。その、どす黒い気の塊は、なにやら粘性の高い液体のように、天井からずるりと下へ落ちる。どろどろとした不定形の塊は、やがて一つにまとまり、人の姿を形取り始めた。

白髪混じりの髪の毛に、皺の刻まれた血の気のない顔。だらしなく開いた口からは、涎のような物が常に滴り落ちている。眼球はなく、瞳があったであろう場所には、ぽっかりと黒い穴が空いているだけだ。

目の前に現われた男がこの世の存在でないことは、少年の目には明らかだった。全身から発している腐臭のような匂いが、男が向こう側の世界の住人であることを否応なしに示している。

「さっきのこけ脅しは貴様のものか……。なんの未練があって、貴様はこの世界に留まり続ける……」

少年が男に向かって言った。何の同情も憐れみも感じられない、淡々とした口調だ。

「あ……あぁぁっ……あっ……」

男がその口内から、腐った水のような匂いのする息を吐き出しながら言った。全身を小刻みに震わせるその姿は、怒っているようにも怯えているようにも見える。

「もう一度聞くぞ。貴様の未練はなんだ。事と次第では……俺は貴様を、無に帰さねばならなくなるんだがな……」

少年が、再び男に問う。男はそれに答えない。無言の応酬が続いた後、最初に動いたのは男の方だった。

力なく、だらりと下に垂れさがった両腕。中の物を失い穴となった瞳が、真っ直ぐに少年の姿を捉える。黄色く汚れた歯をむき出しにし、男は少年の首筋目掛けて飛びかかった。

「うぅぅぅ……あぁぁぁぁっ！！」

既に、言葉さえも忘れてしまったのだろうか。かつては人であったであろう男は、今や貪欲に他人の魂を求める血に飢えた獣でしかなかった。

男の牙が、爪が、目の前にいる少年を食らい尽くさんと迫る。が、それでも少年は微動だにせず、赤い瞳で男を睨みつけていた。

「やれ、黒影（こくえい）……」

少年が、冷徹に切り捨てるような口調で呟いた。その声に呼応するかのようにして、彼の足元から漆黒の影が伸びる。一切の光がない霊安室の中において、その色は辺りを包む闇よりも更に深い。

伸びた影が、男の身体を遮るようにして立ち塞がった。どろどろと、不定形に揺らめきながら、影は中央に位置する金色の目玉で男を睨みつける。そのまま全身をかき回すようにして、影がぐにゃりと形を変えた。

少年の身体から離れた影が、一匹の巨大な犬の姿に変化する。それを見た男が、思わず動きを止めて立ち止った。

「う……うぅ……」

先ほどの、貪欲に血を求める異形の姿は既にない。影が形を変えて生まれた獣の前に、男はすっかり戦意を喪失しているようだった。

一歩、また一歩と、男が部屋の隅に後ずさる。そんな男の姿に冷めた表情を向けたまま、少年は獣に何かを命じた。

虎ほどもある巨大な獣の口が、全てを飲み込まんとするようにして大きく開く。その口の奥から、青白い炎のようなものが、ちろちろと燃えているのが見て取れた。

深夜の廃病院に、闇の獣の雄叫びが響く。先ほど、少年がこの病院を訪れた時、窓を叩いていた風の音の比ではない。それこそ、地獄の底から這い上がって来る魔物が、獲物を求めて高らかに吠えているかのような音だ。

部屋の空気が、一瞬にして変わった。陰鬱で暗い、湿りきった風は既にない。あるのはただ、全てを焼き尽くさんと迫る地獄の業火。冷たく、それでいて熱い、相反する力を合わせ持った青白い炎。

「うぅぅあぁぁぁぁっ……！！」

獣の口から放たれた炎が、男の身体を焼き尽くす。闇を照らす青白い炎は、激しく、そして冷徹に、男の身体を侵食してゆく。そして、その炎が消えると共に、男の身体も煙のように消滅した。

「さて……。とりあえずは片付いたが……」

辺りの様子を見まわしつつ、少年は刀の柄に手をかけた。彼が呼びだした黒い獣もまた、その隣で低い唸り声を上げている。まるで、闇に潜む異形の者は、未だ滅びていないとでも言いたげに。

果たして、その予想は正しく、今度は壁の中から新たに二体の影が現れた。先ほどの男と同じように、影は少年の前で人の姿へと形を変える。今度は黒髪を足元まで垂らした女と、床を這いずるようにして迫る老婆であった。

「やれやれ……。この分だと、どうやらかなりの数が巣食っているらしいな」

恨みに満ちた表情で、二体の異業なる者がこちらへ迫る。それを見た少年は、半ばうんざりするような顔をしながら、吐き捨てるようにそう言った。

ゴキブリは、一匹の姿を見かけたら、その家に百匹は潜んでいると言ってよい。こんな時に、何かの本で読んだ事のある一説を思い

出した。相手は害虫ではなく、むしろ常世の住人と言った方が正しいのだが、人に害を成す存在という点では変わりない。

覚悟を決めたのか、少年も刀を抜き放って異形の前に立った。白銀の刃が鞘から抜かれると同時に、その刀身から異様なほど黒い気が一斉に放たれる。

貪欲に、生者も死者も問わず、ただひたすらに魂を求める暗黒の気。ミミズか、それとも蛇のようにして揺らめくそれは、無数の触手が獲物を欲して踊り狂っている様にも等しい。

「行くぞ、黒影。今日の仕事は、久方ぶりの大掃除だ」

少年の言葉に、黒い獣が低く唸って答えた。彼らは同時に大地を蹴ると、それぞれの持つ鋭い爪と牙を、異形なる者達に向けて振り下ろした。

※　※　※　※　※　※　※

少年が病院を出たのは、丑三つ時を少しすぎた頃のことだった。

先刻まで風に揺れていた病院からは、既に何の音も聞こえない。建物を覆っていた禍々しい空気さえも失われ、そこにあるのは、ただ朽ち果てたコンクリートの塊だ。

いつしか、月を覆っていた雲も姿を消していた。淡い月明かりの下に佇む廃病院は、その中で起きていた喧騒が嘘のように静まり返っている。辺りから聞こえて来るのは、宵の闇の中で合唱する虫た

ちの声だけだった。

「おや、終わったのかい。今日は、随分と早かったねぇ……」

少年が病院の門をくぐったところで、彼の横から唐突に声がした。

振り向くと、そこにいたのは一人の老婆。腰は曲がり、常に杖を持たねば歩けないようだったが、その瞳に宿している力は相当なものだ。生への気力という点だけで見ても、並みの老人とは一線を画するものがある。

「婆さん、来てたのか？」

少年が、老婆の方に視線だけを向けて言った。そのまま夜道を歩き出すと、老婆も彼に足並みを揃えて歩を進める。

杖に頼らねば歩けないにも関わらず、老婆の足の速さは少年のそれに匹敵した。同じ歳の人間のものと比べても、少年の歩く速度は決して遅くないものだったにも関わらず。

「ところで……今日の仕事はどうじゃった、紅。五年前、臙良（えんりょう）が祓った時には、五十もの御霊が彷徨っていたらしいがの」

「いや、そこまでは多くなかった。俺と黒影が倒した連中は、ざっと数えても十七か十八ってところだ。臙良の爺さんが祓ってから、十年も経っていないことが幸いしたな」

老婆の問いに、その少年、犬崎紅（けんざきこう）は、淡々とした口調で己の見解を述べた。

ちなみに、彼らの話に出てきた臙良というのは、今は現役を退いた紅の祖父である。彼は優秀な外法使いであると同時に、紅の隣にいる老婆、犬崎多恵（けんざきたえ）の夫でもあった。

犬神筋。この四国地方に古くから存在する呪術師の家系であり、古来より忌み嫌われてきた存在。だが、その強大な闇の力は、時として人界を護るための剣となる。

紅を初めとした犬崎の家も、そうした者の血を引く家系の一つだった。彼らの仕事は、法事や葬式などといった、表側の人間が扱うものではない。同じ向こう側の世界に通ずる者でも、寺の住職や神社の神主とは全く別の存在なのだ。

闇を用いて闇を祓う、赫（あか）の一族。いつしか人々は彼らのことを、畏敬の念を込めてそう呼んだ。そして、その血脈は、今もこの現代に受け継がれている。例え、歴史の表舞台に姿を見せることはなくとも、この世に闇がある限り、彼らもまた存在し続けるのだ。

今回、紅が訪れていたのは、地元でも有名な心霊スポットになっていた廃病院だった。廃墟となってから既に二十年以上の年月が経ち、倒壊の危険性から立ち入りが禁じられていた場所だ。

だが、物好きな人間というものは、どんな場所にもいるものである。

病院が心霊スポットとして名を馳せると同時に、肝試しと称して不法な侵入をする者達も後を絶たなかった。探検気分で訪れるような学生もいたが、中には度胸試しの意味合いを込め、建物を破壊したり中の物を持ちかえったりする輩もいた。

そんな折、夏休みを利用して実家へ帰省した紅の下に入って来たのは、例の病院に侵入した人間が発狂したという事件だった。

犠牲者は、地元の警察からも目をつけられていた、札つきの不良グループの一人である。なんでも、肝試しの一環として病院に不法侵入し、そのまま行方不明になってしまったらしい。そして、次に発見された時には、彼は廃人同然の姿となっていた。

程なくして、紅の下には廃病院の怪異の原因を探って欲しいという依頼が舞い込んだ。仕事を引き受けた彼は、単身深夜の廃病院に潜入し、その原因を根元から断ったというわけである。

実は、この六石山病院では、以前にも同様の事件が起きていた。五年前、まだ紅が小学生だった頃、それを解決したのが祖父である臙良だ。彼によって、廃病院に巣食う闇は完全に滅せられ、事件は解決したかに思われた。

しかし、五年という歳月は、朽ち果てた病院に新たな闇を呼び込むのに十分な時間だった。臙良が事件を解決した後も、六石山病院は、未だ心霊スポットとして名を馳せている。

この世界には、陰の気が流れ込みやすい土地というものが存在する。かつては人の手が入っていた場所でも、長い年月の間に朽ち果ててしまえば話は別だ。

そういった場所には必然的に淀んだ気が溜まり、その気に誘われるようにして、迷える御霊が集まって来る。そして、その場に溜まった穢れた気の影響を受け、集いし御霊もまた禍霊（まがたま）となる。最後は己が人であったことさえも忘れ、ただ本能の赴くままに、他者の命を啜るだけの存在と成り果てるのだ。

今回の事件は、そんな禍霊の巣に足を踏み入れた者が見舞われた惨事だ。土地の浄化が行われない限り、そして、その場所を訪れる者がいる限り、向こう側の世界の住人の犠牲になる者が出るのも、また必然。

「なあ、婆さん。今回の報酬だが……どれくらい入った？」

淡い月明かりの照らす夜道を、紅が歩きながら尋ねた。

「土地の持ち主からは、百万ほど貰っとるよ。足りなければ、後から追加で請求するかえ？」

「百万か……。まあ、妥当な金額だな。しかし……それだけの金が払えるなら、いっそのこと病院を取り壊して更地にでもしてしまった方が、後腐れがないような気がするが……」

「本当は、それが一番ええ。もっとも、土地の持ち主からすれば、五年毎に百万の支払いで大掃除が済むなら、そちらの方が割に合っとるみたいじゃな」

「なるほど。建物を取り壊すくらいなら、俺のような者に厄祓いをさせた方が安上がりか……」

他人の安全よりも自分の金。そんな汚い人間の一面を垣間見たような気がして、紅は、それ以上は何も言わずに口をつぐんだ。

今は束の間の平穏が訪れている六石山病院も、いずれは再び悪鬼の巣窟となるだろう。心霊スポットとしての名が残り続ける限り、廃病院に真の平穏は訪れない。

穢れた土地が存在する限り続く、終わりなきいたちごっこ。この世に闇が存在する限り、赫の一族の使命も終わらない。

宵の風が、少年と老婆の横を吹き抜ける。夜明けまでは数時間といったところだったが、自分達にとっての真の夜明けは、未だ先の見えぬ闇の中にある気がしてならなかった。

※　※　※　※　※　※　※

翌朝、犬崎紅は、日が昇ると共に家を出た。満足な睡眠を得たとは言い難かったが、不思議と頭だけは冴えていた。

彼が向かったのは、村内にある墓地だった。寺の住職に形だけの挨拶を済ませ、紅は独り墓場の中を歩いてゆく。途中、どこぞの墓に供えられた線香の匂いが鼻を刺激したが、それにも構わず紅は歩を進めた。

墓地の中の、奥まった場所に佇む一つの墓石。決して新しいものではないが、念入りに手入れが成されている。紅はその前に立つと、持ってきた線香と花を供えて両手を合わせた。

――――野々村家の墓。

丁寧に磨かれた墓石には、ただそれだけが刻まれている。その下に眠る少女のことを思い出しながら、紅は軽い溜息をついて目を開

けた。

「すまないな……。あの時、俺にもっと力があれば……俺が、闇の中に蠢く者の存在に気づいていたなら……お前を、こんな目に合わさずに済んだのかもしれない……」

燃えるように赤い瞳に、重たい影が射していた。いつもの彼が見せている、どこか遠くを見ているような儚い眼差し。それに加え、今日は一段と重い何かが、その瞳の中に渦巻いている。

後悔など、したところで何も変わらない。そう、頭では分かっているつもりでも、やはり割り切れないものは存在する。自分が墓所を訪れたのも、そんな理由から来るものだ。

墓石の下にいる人物に、紅は別れの言葉を告げなかった。そのまま踵を返して歩き出すと、足早に墓地を後にする。

今日、この場所に来たのは、なにも過去の行いに対して謝罪を求めに来たわけではない。むしろ、自分の罪を忘れないようにするために、あえて辛い思い出の場所を訪れたのだ。

墓地のある寺を後にした紅は、今度はその足で山へと向かう。県道を上り、林道を抜け、藪を掻き分けるようにして先を急いだ。

もう長いこと使われていなかったであろう、林の中を貫く一本の道。そこを抜けると、程なくして開けた場所が顔を出す。さして広くはない場所だったが、その中央には大きな洞窟が口を開けて待っていた。

木製の枠や柱の目立つ、人為的に作られたと思しき横穴。恐らく、

戦時中に掘られた防空壕の名残だろう。その周りには、赤い小さな実をつけた植物が生えている。茎の先端から枝分かれするように出た多数の穂が、早朝の風に揺られていた。

秋にはまだ少し早いためか、実の数は決して多くはない。だが、それでも紅は数本の茎を摘み取ると、そのまま洞窟の中に広がる闇へと目を向けた。

洞窟の口に吸い込まれるようにして、紅はその中に足を踏み入れる。中は薄暗く湿っていたが、夏場である今は、むしろ過ごしやすい。

壕の中にある木製の柱に刻まれた、小さな傷と大きな傷。泥と埃で汚れながらも、未だに原型を保ったままのちゃぶ台。そして、その上に転がる端の少し欠けた茶碗。およそ場違いな物ではあったが、明らかに誰かの生活したような跡が残っていた。

「あの時のままだな……何もかも……」

薄汚れた茶碗を拾い、紅はそれを愛でるようにして呟く。その瞳には、先ほど墓所を訪れた時のそれ以上に、深く濃い悲しみが広がっていた。

＞i12339—1245＜

～ 逢魔ヶ刻　帰郷 ～（後書き）

本作品は一部に暴力的な表現を含みますが、これは作中の暴力行為その他を推奨するものではありません。

また、一部の人間が差別的な考え方に囚われて非道な行いを働いたり、それらの人間が法ではなく、個人の意思や超常的な存在によって裁かれる描写が存在します。

これらの描写に対して政治的道徳観、及び宗教観から不快な思いをされる可能性がある方は、これより先の内容を読むことを控えるようお勧めいたします。

〜 壱ノ刻　夢幻 〜

四国地方の山間部に存在するその村は、四方を森に囲まれた、典型的な農村だった。九月を迎えているにも関わらず、村の周りを囲むようにして生えている木々は、未だ濃い緑色を保っている。

K県土師見(はじみ)村。主に林業を中心とした、一見してどこにでもあるような山間部の村だ。麓の街との関わり合いもそれなりにあり、一目見ただけでは、単なる田舎の村の一つに過ぎないように思われる。

だが、この地域に古くから住まう人間は、この村のことを畏敬の念を込めて見ることを忘れなかった。村の名前の由来も含め、その村に住んでいる者達が、どのような人間の血を引いていたかを知っていたからである。

村の名前にも使われている土師という言葉。これは奈良の古代豪族である、土師氏の名前に由来する。日本神話に登場する男神、天穂日命(めのほひ)の末裔である野見宿禰(のみのすくね)が、埴輪を発明した功績を垂仁天皇に称えられて与えられた性だ。

後に、桓武天皇の時代になると、土師氏は姓(かばね)を与えられ、大江、菅原、秋篠といった一族へと分かれていった。が、当時の貴族の中には彼らの存在を疎ましく思い、巧妙な策略を張り巡らせて失脚させようと企む者達も多かった。

氏と姓を与えられたとはいえ、土師氏は所詮、埴輪職人を祖とする一族。より簡単に説明するならば、葬儀道具を作ることを生業としていた一族である。当時、都の政治の中心にあった藤原氏などの貴族からすれば、土師氏の末裔の存在は、正に目の上の瘤と言って

も差支えないものだった。

そういった諸々の理由から、土師氏の末裔は、徐々に朝廷内での権力を奪われていった。かの有名な菅原道真が太宰府に流され、その死後、雷神として京の都に舞い戻った祟り話などは、一度は耳にしたことのある者もいるだろう。

土師見村が、いつ頃に村として成立したのかは分からない。しかし、その土地につけられた名前から、村の開祖が土師氏の末裔を中心としていたのは間違いない。

恐らく、朝廷内で力を失った一族の末裔が、当時としては流刑地でしかなかった四国に流れつき、村を興したのではあるまいか。その証拠として、彼らの葬儀道具職人としての血脈は、今もなお色濃く村に残っているのだ。

例えば、村の周りに植えられた多数の樹木。秋になっても色を変えないその木々は、杉や檜といった一般的な林業で用いられるものではない。

土師見村の林業を支えているのは、樅（もみ）だった。クリスマスツリーに用いられることで有名な木だが、そのために育てられているわけではない。

古来より日本では、樅の木は棺桶や卒塔婆の材料として用いられてきた。土師見村の樅も、古くから葬儀道具を作るために使用されることが多かった。豪族を古墳に埋葬していた時代より、彼らは常に向こう側の世界と関わる職人として、今日まで生計を立ててきたのである。

現世(うつしよ)と常世(とこよ)を繋ぐ職人の村として、古来より周囲の村々から畏怖されてきた土師見村。だが、そんな土師見村であっても、現代社会における様々な問題から逃れられるわけではない。

近年、土師見村でも、離農や過疎の進行が深刻な影を落としていた。職人たちの後を継ぐ者がいなくなるのも問題だったが、それ以上に、子どもの数が減っていることは致命的だ。

昔は村内に複数あった中学校も、今では土師見第三中学をただ一つ残すのみ。第一と第二の名を冠した学校は既になく、今では廃校となった校舎だけが、打ち捨てられたかのようにして村内に佇んでいるだけである。

早朝の、まだ東の空がようやく白み始めた時刻。犬崎紅は、家の裏庭に生えた木の横で、独り刀を構えたまま風を感じていた。

彼の手に握られているのは、紛れもない本物の日本刀である。ずっしりとした鋼の重さは、練習用の木刀などとはまるで違う。ようやく顔を出し始めた太陽の光が、その刀身に反射して白く輝いていた。

普通であれば、持つだけでも一苦労である鋼の刃。だが、紅はそれを正面に構えたまま、決して動くことなく風の流れを追っている。腕を降ろすことも、肩を震わせることもせず、ただひたすらに風を待った。

その日は、風の強い初秋の日であった。真夏の蒸すような風から一変し、どこか涼しげな風が頬を撫でる。それは木々の梢を通り抜け、さらさらという音を立てて葉を揺らした。

一際強い風が吹いたところで、紅は今まで閉じていた目をカッと見開いて正面を見据える。燃えるように赤い瞳が、舞い落ちる数枚の木の葉を捉えた。

次の瞬間、風を切る鋭い音と共に、紅の手に握られた刃が空を斬った。一見して、ただ刀を闇雲に振りまわしているようにしか見えないが、紅の瞳には斬るべき相手の姿がはっきりと写っていた。

「ふぅ……」

軽い溜息と共に、手にした刀を鞘に納める紅。極限まで精神を研ぎ澄ましていた代償からか、その顔には若干の疲れも見える。そして、そんな彼の足元には、真っ二つに切断された枯葉の姿があった。

枯葉居合斬り。風に舞い散る木の葉を、地に落ちる前に刀で切断するという技である。言葉で説明するのは簡単だが、実際に行うとなると、その難易度は極めて高い。

十分に水分を含んだ青い葉とは異なり、枯葉を抜付水平で斬るのは至難の業だ。少しでも斬る角度がずれれば、葉が刀に引っかかるか、刃から生じた風圧によってなびいてしまう。

ましてや、不規則に方向を変え、落下速度も個々に異なる葉を斬るとなれば、居合の達人であっても難しい。風に舞う枯葉を斬るというのは、それだけも極めて高度な技術を要するのだ。

だが、そんな高度な技を成し遂げたにも関わらず、紅の表情は複雑だった。

彼が斬るのに成功した枯葉は、自身の足元にある二枚のみ。一方、

梢から舞い落ちた葉は、合わせて五枚ほどあった。成功二枚、失敗三枚。成績としては、負け越しである。

「さすがよのう、紅。その歳で、同時に二枚の枯葉を斬り落とすとは……」

気がつくと、紅の後ろには一人の老婆が立っていた。

犬崎多恵。紅の祖母にして、地元では有名な拝み屋でもある。犬崎の家に嫁ぐ形で入って来た女性であり、その瞳は紅とは違って普通に黒い。

「茶化すのは止めてくれ、婆さん。本当は全部斬りたかったんだが、三枚も仕損じてしまった。俺にはまだ、爺さんのように上手くはできないさ」

「何を言っておる。臙良のあれは、並み居る達人の中でも別格の域じゃぞ。修業を始めて十年も経っておらんお前に、そう易々と真似できるものではないわ」

「それでも、俺の結果が負け越しなことには違いない。ここ最近、どうにも技が上達していない気がするな……」

そう言って、紅は踵を返しながら、刀を片手に共に裏庭を後にした。多恵は紅の結果に満足していたようだが、そんな言葉も紅には気休めにさえならない。

紅の祖父である犬崎臙良。その実力は、孫である紅自身が一番良く知っている。既に六十を越えているにも関わらず、その刀さばきは一向に衰えを見せることがない。現に、今しがた紅の見せた枯葉

居合斬りに関しても、容易く五枚の葉を切り落とすだけの実力を持っているのだ。

自分は未だ、祖父の足元にも及ばない。その事実を噛みしめたまま、紅は家の中へと戻って行った。

犬崎邸は、この土師見村の中でも古くから残る旧家の一つである。もっとも、所詮は田舎の村にある古い造りの屋敷。使用人の類を雇っているわけでもなく、今ではその部屋の殆どを持て余している状態だった。

紅が屋敷の中に戻ると、既に朝食の準備が成されていた。紅が戻るのを待っていたのか、そこには一人の老人の姿もある。

犬崎臙良。紅の祖父にして、彼に剣術を初めとした様々な指導を行っている人物である。その瞳は紅と同じように赤く、白金色の髪には、更に色の抜けたような白髪も交じっていた。当然、その肌は雪のように白く、知らない者からすれば、何かの病気を患っているのではないかと思われただろう。

先天的白子障。犬崎の一族には、決まってこの疾患を持つ者が産まれることが常だった。その代わりとして、一族には代々、不思議な力が受け継がれているのも常ではある。そんな犬崎家の人間のことを、人々は時に畏敬の念を込め、赫の一族とも呼んでいた。

祖父である臙良に一礼し、紅もそのまま食卓に着く。程なくして遅れてきた多恵も加わり、犬崎家の静かな朝食が始まった。紅と臙良、それに多恵の三人しかいない、少々寂しさの漂う光景である。

紅の両親は、今はどちらもこの家にいなかった。彼の母は紅を産

んだ直後に他界し、父に関しては消息さえも不明だ。

しかし、そのことに関しては、紅は少しも不幸だとは思っていなかった。もとより、祖父母によって育てられてきた自分のこと。両親がいないことが普通であった紅にとっては、臙良と多恵がその代わりだった。時に厳しく躾けられ、鍛えられることもあったが、今でもその考えは変わらない。

「今朝の結果はどうじゃった、紅？」

焼いた魚の身をほぐしながら、臙良が尋ねた。稽古の時は修羅の如き形相になる彼だが、それ以外では素朴で温和な老人の顔しか見せていない。

「五枚の葉の内、二枚しか斬れなかった。残念だが、爺さんの望むような結果は出せちゃいない」

「まあ、そう慌てることはない。お前が立派に成人する頃には、わしを越える剣の使い手になっておろうて」

「その前に、俺は爺さんの身体の方が心配だがな。頼むから、婆さんを残して先に逝ったりしないでくれよ」

「なにを言うか！　わしは、まだまだ現役の退魔師じゃぞ！！」

そう、口では言っているものの、臙良の顔は笑っていた。

紅の母であり、臙良の娘である犬崎美紅（けんざきみく）。彼女が亡くなった今、犬崎の血を引く者は、紅のみである。その紅が、自分の後を継ぐことを前向きに考えてくれていること。それが、臙良にとっては何よ

りも嬉しかった。

例え、その結果として、紅が現世に巣食う様々な闇と向き合うことになろうとも。逃れられぬ血の宿命によって、闇と関わり続けねばならなくなったとしても。

闇を用いて闇を祓う。それが、犬崎家を初めとした、赫の一族の生業である。幼い頃から非凡な才能を見せていた紅に、臙良は強い期待の念を抱いていた。

※　※　※　※　※　※　※

平穏な時というものは、いつまでも続くわけではない。

朝食を終えた紅は、いつも通りの身支度をして足早に家を出た。少しくたびれた感じのある学生鞄を片手に、学校に続く道を歩く。

いかに優れた剣の腕前を持っているとはいえ、紅はまだ現役の中学生だ。祖父の教えも大切だったが、学校をさぼるわけにもいかない。もっとも、今の紅にとっては、学校など何の面白味もない空間でしかなかったが。

「おはよう、紅君」

段々畑の横にある道を抜けたところで、紅は後ろから自分の名を呼ばれ、振り向いた。

「なんだ、朱音か。また、こんなところで待ち伏せしていたのか…

…？」

紅の振り向いた先にいた者。それは、彼も良く知る一人の少女だった。

少女の髪は、紅と同様に色の抜けた白金色をしている。その瞳が赤く、脱色されたかのように白い肌も同じだ。ただし、祖父の教えによって日々鍛錬を怠っていない紅とは違い、その身体は病的なまでに細く、か弱く見えた。

「いいかげん、一人で学校へ行くことを覚えたらどうだ。俺に付き合っていると、下手をすれば遅刻するぞ」

「そんなの気にしないよ。紅君が一緒に怒られてくれるんなら、私は怖くないもん」

「勘弁してくれ……。お前はよくても、俺は朝っぱらから人目を引くような行動は避けたいんだ」

自身の目の前で屈託のない笑顔を浮かべる少女に対し、紅は半ば呆れたような口調で言った。

狗蓼朱音（くりょうあかね）。紅の遠い親戚に当たる少女で、彼の幼馴染である。その容姿からも分かる通り、彼女もまた、紅と同様に赫の一族の血を引いていた。今では名字を違えているが、犬崎も狗蓼も、元は一つの一族であったらしい。

ただ、紅とは違い、朱音は赫の一族としての力を行使するための修業を受けていなかった。なんでも、彼女の母が一族としての力を忌み嫌っていたらしく、娘には後を継がせたくないという思いがあ

ったらしい。そのため、朱音は心身を鍛えることもなく、単に身体の弱い一人の少女として暮らしている。

そんな朱音が、幼い頃から殊更気に入っているのが紅だった。歳が一つしか違わないこともあり、昔は二人でよく遊んだものだ。その関係は紅が中学に上がってからも変わらず、今でもこうして共に通学する仲である。

「それにしても……」

秋晴れの青空を眺めながら、紅が呟いた。

「お前、この前の体育の授業の時、体調不良で倒れたんだって？」

「うん……。あの日は、皆でバスケットボールをしていたんだけど……チームを作るのにメンバーが足りなくなっちゃって。先生も、屋外でないのだから参加しなさいって言って、仕方なくね……」

「だからって、無理に参加する必要はないだろう。お前の身体が弱いことぐらい、周りだって分かっているだろうに……」

そう言いながら、紅は朱音の顔色を確かめるようにして彼女を見る。

先天的なアルビノである紅や朱音は、生まれつき虚弱な体質の持ち主である。日中は太陽の下を歩くことも酷であり、ましてや炎天下での運動などもっての外だ。日頃から鍛えている紅ならばともかく、何の訓練も受けていない朱音にとっては、屋内の激しい運動でさえ健康を害することがある。

当然、学校の教師やクラスメイト達も、紅や朱音の身体については知っているはずだった。それにも関わらず、屋内とはいえ体育の授業に参加させるとは何事か。

今度、学校側に改めて文句を言ってやろう。紅がそんなことを考えた時、二人の前に、見慣れた門が姿を現した。

土師見第三中学校。土師見村に唯一残る、最後の公立中学である。さすがに木造ではないものの、過疎の影響から、その生徒数は年々減っているとも言われていた。

下駄箱で靴を履き変え、朱音と別れて教室に向かう。これから始まる学校での一日は、紅にとっては退屈極まりないものだ。

窓から射し込む朝日を受けながら、紅は頬杖をついたままぼんやりと外の景色を眺めた。

体質の関係もあるのだろうが、どうにも明るい時刻は力が出ない。その上、自宅から学校まで小一時間程もかかったことも相俟って、早くも気だるい空気が紅の全身を覆っていた。明け方近くに枯葉を斬っていた際の目は既になく、赤い瞳は焦点の定まらないまま揺れている。

今日は、このまま一限の授業を寝て過ごそうか。そう思った次の瞬間には、紅は顔を机に伏せて眠りに落ちていた。

学校に着くなり、授業そっちのけで爆睡する。普通であれば、朝の学級活動の時間に担任から叩き起こされるであろう行為。が、そんなことは間違ってもされないという、確かな自信が紅にはあった。

犬崎の家は、この土師見村においても特殊な存在である。葬式道具を作る職人の多い土師見村の村民でさえも、犬崎家には特別な感情を抱いていた。

――――あの家は、犬神筋の家だから……。

物心ついた時から、紅が耳にしてきた言葉である。村民達は、それを何かの合言葉のように用い、事ある毎に紅を避けた。彼らが紅の家を訪れるのは、当時から拝み屋として名を馳せていた、祖母の力を借りる時だけだ。

土師見村の中でも、拝み屋として特に強い力を持っているとされる紅の祖母。しかし、村民が犬崎の家を畏怖するのは、彼女の力のせいではない。

犬崎家が畏怖の対象となっているのは、むしろ祖父の臙良の存在が大きかった。彼を初めとした赫の一族のことを、この地域で知らない者はいない。

犬神筋。憑き物の一種でもある、犬神という動物霊を使役する術者の家系である。その力は占いや退魔に留まらず、場合によっては特定の相手を呪い殺すことも可能だとされる。

味方につければ頼もしいが、敵に回せば、これほど恐ろしい相手はいない。そんな畏敬と恐怖の念は、当然のことながら紅にも向けられていた。それは、彼の親戚でもある朱音も同様だ。

幼い頃より、家族と親戚以外には親しい者は殆どいない。犬崎紅

にとっては、それが常であり当然のことでもあった。別に、一匹狼を気取っているわけではなかったが、彼と必要以上に関わろうとする人間は少なかった。

朝の陽気にまどろみながら、紅はふと、昔に聞いたことのある言葉を思い出した。

――――孤影。

心許せる仲間も殆どおらず、ただ独り、影を背負うようにして生きている様を表す言葉である。硬派な一匹狼というよりも、学校での自分にはこちらの言葉の方が似合うと紅は思った。

だが、そんな暮らしではあったものの、別に紅はこれといって不満があったわけでもなかった。

両親は既にいなかったが、自分には厳しくも優しい祖父母がいる。話し相手としても、親戚の朱音がいれば十分だ。それに、自分は元より、どちらかと言えば静かな環境を好む傾向にある。

数少ない家族と親戚に囲まれた、少し寂しくはあるが、それでも平穏な生活。こんな暮らしがこれからも続くことを願いながら、紅の意識は夢の中へと沈んでいった。

※　※　※　※　※　※　※

秋になったとはいえ、まだ九月に入ったばかりである。残暑は相変わらず厳しく、昼近くにもなると、途端に空気が熱気を帯びた物に変わって来る。

土師見第三中学の屋上で、田所隆二（たどころりゅうじ）は仲間と共に意味もなく集まっていた。

彼らの足元には、今しがたまで吸っていた煙草の吸殻が散乱している。彼を含めた五人の少年たちは、その誰もが気だるそうな表情を浮かべていた。壁に寄りかかる者、腰を落としたまま意味もなく目つきだけは鋭くしている者、そして、その場に寝転ぶ者と様々である。

彼らの足元に転がる吸殻からも分かるように、田所達は村内でも札付きの不良であった。まだ中学生であるにも関わらず、飲酒や喫煙は当たり前。万引きやカツアゲも日常茶飯事であり、何か気に入らないことがあれば、直ぐに恫喝や暴力に訴え出る。

さすがに、麻薬やシンナーの類に手を出していることはないものの、彼らの存在は校内でも問題視されていた。現に今も、こうして授業をサボった上で、屋上で煙草を吸っていたのだから。

「ったく……。夏休みってのは、どうしてこうも短けえんだよ。どうせなら、九月の終わりまで休みってことにすればいいのによ」

「それを言うなら、いっそのこと、学校なんか無くなっちまった方がマシだぜ。ウザい先公や湿気た面したクラスの馬鹿どもなんざ、俺は頼まれても会いたくないね」

少年たちは、各々で好き勝手に悪態をついている。自分のことを

棚に上げ、周りを意味もなく軽蔑する。典型的な、不良の考え方である。

だが、そんな中において、田所だけは違っていた。一言目には「ウゼェ」、二言目には「ダリィ」しか口にしない仲間達とは違い、彼の目は常に、何かに飢えた獣のようにぎらついていた。

過疎の進む、田舎での暮らし。田所にとっては、それそのものが不満の根源だったのかもしれない。娯楽も少なく、ストレスを発散するための機会にも恵まれていない。そして、田所はそんな現実をただ嘆き、漠然とした日常を送るつもりもなかった。

今はしがない田舎の村の中学生だが、今に街に出て、自分の名を知らしめてやる。そのためには、まずはこの学校を、自分の力で締める必要がある。

所詮は過疎の進む田舎の村に残された学校。入学した当初は、締めるのに数カ月もかからないと考えていた。現に、田所は一年にしてその悪名を学校中に轟かせ、二年に進級する際には、上級生でもその名を知らない者はいなかった。

そんな田所ではあったが、彼が二年になった時、思わぬ障害が現れた。

「犬崎……紅……」

未だ先から煙を出して燻っている煙草を、屋上のコンクリートに押しつけながら田所は呟く。

彼が二年に上がったその年に、この土師見第三中学に入学してき

たのが犬崎紅である。赤い瞳と白い肌、そして白金色の髪の毛は、否が応でも周りの目を引いた。しかし、彼の容姿に関しては、田所は何ら問題とはしていなかった。

田所にとって問題だったのは、この村に古くから伝わる奇妙な言い伝えだった。

――――赫の一族には手を出すな。

物心ついた時から、周りの大人から耳にタコができるほど聞かされてきた話だ。

赤い瞳と白い肌を持つ、この土師見村に古くから住まう犬神筋の家系。今では主に拝み屋としての仕事をしているようだが、その昔は、呪術によって人を呪い殺すようなことも生業としていたらしい。

田所自身、呪いだの祟りだのと言った話は信じていなかった。そのため、一度は犬崎紅に喧嘩を仕掛けようとしたこともある。下らない因習が元で一学年下の人間に手が出せないなど、自分のプライドが許さなかった。

もっとも、その際には学校中の教師が総出で田所を止め、家に帰ると父親に酷く殴られた。いつも口論の絶えない関係ではあったが、あそこまで激昂する父を見たのは、後にも先にもあの時が初めてだ。

犬崎紅がいる限り、田所はこの村はおろか、中学校一つさえも締めることができない。現に、三年となった今でさえ、自分よりも犬崎紅に畏怖の眼差しを向ける者がいる。

「面白くねぇ……」

そう言うと、田所はスッとその場で立ち上がり、屋上から煙草の吸殻を放り投げた。

「田所さん！　どこ行くんですか！？」

後ろから、後輩たちが慌てた様子で田所を追う。説明するのが面倒臭いのか、田所は何も言わずに扉を開けて、屋上から下へと続く階段を降りた。

呪いや祟りなど、そんなものは年寄りの馬鹿げた妄想に過ぎない。

（何が赫の一族だ……。犬崎紅……。てめえの化けの皮は、俺がきっちりと剥いでやるぜ……）

学校は、既に昼休みを迎える時刻になっていた。四限の終了を告げる鐘の音と共に、田所達は三階にある、二年の教室へと向かって行った。

※　※　※　※　※　※　※　※

犬崎紅は、夢を見ていた。

夢の中で、彼はまだ幼い少年だった。どうやら山の中で遊んでいるようで、辺りは胸の高さほどまで生い茂った、緑色の熊笹に囲まれている。その隣には、これまた首から下が藪に埋まりそうになっ

ている、幼き日の朱音の姿もあった。

手にした棒で藪を掻き分け、紅は林道を進んで行った。途中、朱音がはぐれないように気を使いながら、開いている方の手で彼女の手を引いてゆく。

程なくして、二人は深い藪を抜けた場所に出た。そこは小さな広場のような場所で、正面には大きな洞窟が、ぽっかりと口を開けている。

「はぁ……。日が当らないのはいいけど……やっぱり、ここに来るまでが大変なんだよなぁ……」

額の汗を拭いながら、紅は隣にいる朱音を見て言った。

「なあ、大丈夫か、朱音。どこか、怪我しているなんてことはないだろうな」

「そんなの、全然平気だよ、紅君！　私だって、ちょっとは大きくなってるんだもん！！」

朱音が紅の顔を見上げるようにして笑う。二人とも、身体のあちこちに草が付き、服も少々汚れていた。

胸元に付いた草を払い落とし、紅と朱音は洞窟の中へと向かう。外の蒸し暑い空気とは違い、ひんやりとした冷たい風が頬を撫でた。

彼らのいる洞窟は、自然に生まれたものではなかった。戦時中、防空壕として掘られた横穴が、今でも昔のまま残っているものだ。その証拠に、天井や壁には木製の支柱が張り巡らされ、壕の崩落を

防いでいる。また、生い茂る植物に隠されて分かりにくかったが、壕の入口にも木の枠がはめられていた。

壕の中にあるちゃぶ台の前に座り、紅は肩から提げていた水筒を置いた。内蓋と外蓋の二つをコップ代わりにして、その中に麦茶を注いでゆく。

「とりあえず、お茶でも飲もうか。朱音は小さい方でいい？」

「うん。ありがとう、紅君」

内蓋に注いだ方のお茶を渡されると、朱音はそれを一口で飲み干した。

日陰を歩いてきたとはいえ、今はまだ夏の暑い盛りだ。直射日光を嫌い、こと身体も弱い朱音にとっては、軽い山登りでも重労働となる。現に、この防空壕に来るまでにも、幾度となく休憩をはさんできた。

生まれつき身体の色素を持たず、朱音に至っては激しい運動もできない体質。しかし、そんな彼らにとって、この防空壕は絶好の秘密基地であるとも言えた。何しろ、日中の焼けつくような日差しからは身を隠せ、更には誰にも邪魔されることなく、思う存分に自然を満喫できたのだから。

（しっかし……こんな昼間っから穴の中にいるのなんて、俺達とウサギかアナグマくらいのもんだろうな）

三月生まれのウサギは死に安い。以前、何かの本で読んだ話が、ふと紅の頭をよぎった。

草木の芽が出始める季節に生まれたウサギは、白い毛と赤い目を持った子であることが多いとされる。どこまで信憑性のある話なのかは知らないが、白ウサギが弱々しく見えるというのは、幼い紅にもなんとなく分かった。

ちなみに、朱音の生まれたのも三月である。その上、酷いアレルギー持ちで、肉の類はまともに口にすることもできない。

自分よりも更に弱い身体と野菜中心の食生活。そして、これは紅も同じであるが、雪のように白い肌と血のように赤い瞳。横目に見た朱音の顔が、紅には一瞬だけ白いウサギと重なって見えた。

「どうしたの、紅君？」

「いや、なんでもないよ。ただ、朱音のこと見てたら、なんかウサギみたいだなって思ったんだ」

鼻の頭をかきながら、紅は少し照れくさそうにして答えた。そんな彼の気を知ってか知らずか、朱音は不思議そうな顔をしたまま紅を見ている。

それから二人はしばらくの間、互いに他愛もない会話をして時間を過ごした。紅が祖父に教わっている剣術や退魔術の話をすると、朱音は喜んでそれに耳を貸した。

紅の家とは違い、朱音の家は既に赫の一族としての仕事を請け負っていなかった。彼女の母は村の郵便局で事務員をしている普通の女性であり、紅の祖父母のように不思議な力を行使できるわけではない。

そんなこともあり、朱音にとって紅の話は、まさに未知なる異世界のおとぎ話を聞かされているようだった。修業の内容は人に漏らさぬよう口止めされていたが、朱音が喜ぶので、紅は彼女にだけは話をしていた。無論、しっかりと口止めを約束させた上での話であるが。

「さて……。それじゃあ、俺はちょっとその辺を散策してくるぜ。分かっているとは思うけど……勝手に一人で遠くまで行くなよな」

「うん、大丈夫。私、紅君が帰って来るのを、ここで待ってるから」

紅の言葉に、大きく頷いて朱音が答える。赤い瞳を精一杯に見開いて、何の穢れも知らない無垢な笑顔をこちらに向けて。

水筒の蓋を閉め、紅はそれを再び肩にかけて立ち上がった。そして、壕の奥にある、何やら色々なガラクタが積まれている場所に目を移す。

そこにあったのは、紅や朱音が持ち込んだと思しき様々な道具だった。虫かごや釣竿などに加え、端の欠けた茶碗なども転がっている。紅はその中から、少し泥で汚れた虫かごと、小さな革袋を取り出した。

虫かごに付いている紐を肩にかけ、革袋を腰に下げる。少しだけ穴の開いた捕虫網を手に、忘れ物がないか確認する。どれも粗末な作りだったが、採集用の道具としては、これでも十分だ。

壕の外に出た紅は、辺りの様子を見回すと、そのまま手近な木と木と間から藪の中へと入って行った。傍から見れば違いの分からな

い森の中も、紅にとっては庭のようなものだ。故に、どこにどんな木があり、どんな生き物が住んでいるのか、地図など無くとも分かってしまう。

程なくして、紅は一本の大きな木の前に辿り着いた。これは、昔からこの山にある、大きなクヌギの木である。秋にはたくさんのドングリを地面に落としてくれるが、今はまだ、それも青い実の姿で梢にすがりついている。

実の成る季節には少し早かったが、紅がこの場所に来たのには理由があった。

夏場にもなると、クヌギの木はその幹から沢山の樹液が溢れ出す。当然、それを狙って様々な昆虫が木に訪れる。

樹液に集まる虫の代名詞と言えばカブトムシやクワガタだったが、彼らが行動するのは夜中から明け方にかけてだった。紅の狙いも、当然のことながら、そんな厳つい風貌の甲虫ではない。

樹液の出ている場所を見つけ、紅は捕虫網を持ってそっと近づいた。そこにいたのは、紫色の美しい羽を持った一匹の蝶。コガネムシやカナブンに混ざって、一心不乱に樹液を吸っている。

相手はまだ、こちらの接近に気づいてはいない。そう思った紅は、手にした捕虫網を一気に振り下ろした。白い朝靄のような蚊帳が虫たちに被さり、蝶は慌ててその場を飛び立つ。

「やった……」

網の中で暴れる蝶の羽を、紅はそっと指で摘まんだ。羽を痛めな

いように、慎重に力を加減して、そのまま虫かごの中に放り込む。

紅が虫を捕えるのは、決して彼の趣味などではなかった。彼が虫を捕まえるのは、壕で自分のことを待っている朱音のために他ならない。

自分と違い病弱な朱音は、当然のことながら野山を自由に駆け回ることができない。あの壕に行くことでさえ、紅の付き添いがあって初めてできることだ。

だが、そんな身体だからこそ、朱音は紅以上に様々な自然を求めた。花を愛で、蝶の美しさに感動し、森に流れる風の変化をも微妙に感じ取っているようだった。

「今日は、とりあえずこれでいいか。後は、朱音に少しでも土産が欲しいところだけど……」

そう言って、紅は再び辺りを見回した。もっとも、ここは山の中。そう簡単に、土産になるようなものは転がっていない。

「仕方ない。また、あれを採って帰るか……」

近くに生えていた葛の葉の一つを摘み取ると、紅は再び藪の中を捕虫網の柄で掻き分けて行った。

※　※　※　※　※　※　※　※

紅が壕の中に戻って来たとき、そこでは朱音が何やら用意してい

る真っ最中だった。壕の真ん中に置かれたちゃぶ台の上には、欠けた茶碗が二つ乗っている。

「あっ、紅君！！」

今まで、どこかぼんやりとしていた朱音の顔に、突然光が射す。壕の入口に戻って来た紅の手を引き、半ば強引に連れ込むような形で、ちゃぶ台の前に座らせた。

「ねえ、これ見て！　私、お赤飯作ったんだよ！！」

そう言う朱音の手元には、確かに赤い物が盛られた茶碗があった。もっとも、その中にある物が本物の赤飯などでないことは、紅も一目見て分かっていたが。

「これ……壕の入口に生えていた草の実じゃないか」

「うん、そうだよ。赤くて綺麗だったし、大きさも調度、お米くらいだったから」

「それで赤飯か。考えたな、朱音」

紅が、朱音の頭に手を乗せて撫でた。歳は一つしか違わないものの、朱音と紅の背丈は頭一つ分程もの差がある。こうしていると、朱音のことが歳の離れた妹のように見えなくもない。

「ねえ、紅君。今日は、何を採ってきてくれたの？」

朱音が紅の顔を覗き込むようにして言った。それを聞いて、紅は何かを思い出したかのようにして、腰につけた革袋を取り出す。

袋の中から出てきたのは、葛の葉に包まれた桑の実だった。赤黒く熟した果実は野イチゴのような味がして、潰してジャムにされることもある。

「今日は、ちゃんと湧き水で洗っておいたからな。偽物の赤飯じゃ、さすがに食べるわけにもいかないだろ？」

桑の実はそのままでも食べられるが、残念なことに、これが好きなのは人間だけではない。蛾の幼虫も好んで食べることから、彼らが実を食い荒らした後、その体毛が付着していることが常である。一度、それを知らずに口に入れ、紅と朱音は後で酷い目に合ったことがあるのだ。

しかし、そんな記憶も、いざ木の実を口に放り込むとすぐに消え失せた。口の中に甘酸っぱい味と香りが広がり、二人の舌を刺激する。

「そういえば、今日はこんなやつも捕まえてきたんだ。朱音、前に話した時、本物を見たがってたから」

そう言って紅が見せたのは、虫かごに入れられた一匹の蝶だった。紫色の羽をゆっくりと動かし、今は静かに籠の中に納まっている。

オオムラサキ。日本を代表とする蝶で、日中の雑木林で活動する。その美しい羽はオスのみが持つものだが、ここまで綺麗な物は珍しい。人目につかない場所を飛んでいることもあり、朱音が見惚れるのも無理はなかった。

「へえ……凄いんだ。本当に、青い羽してるんだね」

「ああ。でも、見終わったら、ちゃんと離してやるんだぞ。無益な殺生はしちゃいけないって、俺の婆ちゃんが言ってたからな」

「うん。分かったよ、犬崎君」

視線をオオムラサキから紅に移し、にっこりと微笑む朱音。が、紅はそんな朱音の姿に、どこか違和感を覚えて顔をしかめる。

朱音はいつも、紅のことを紅君と呼んだはずだ。しかし、ここにきて、なぜ犬崎君と呼ぶのだろうか。

「ねえ、どうしたの、犬崎君。ねえってば……」

だんだんと、視界がぼやけてきた。慌てて目を擦るも、白い霧に覆われたように、どうにも視界がはっきりとしない。その上、なんだか身体を誰かに揺すられているような気もする。

「犬崎君……犬崎君……」

霞の向こうから呼ぶ声に導かれるようにして、紅の意識はだんだんと薄らいで行った。

※　※　※　※　※　※　※　※

「ねえ、犬崎君ってば！！」

耳元に響く覚えのある声に、紅はハッとして起き上がった。

見ると、ここは見慣れた教室の中である。寝ぼけ眼を擦りながら時計に目をやると、時刻は既に四限の授業が終了したところだった。彼の隣には、これまた見覚えのある少女がおり、紅のことを見降ろすようにして睨んでいる。

「まったく……。新学期早々に朝から昼まで寝るなんて、随分といい御身分ね」

「なんだ、学級委員か。頼むから、俺のことは放っておいてくれ。勉強なんて、家で独りの時にやった方が、俺の生には合ってるんだ」

「そういうわけにも行かないわよ。学級委員として、同じクラスの生徒が朝から爆睡しているのを放置しておくなんて、とてもじゃないけど出来ないわ。それに、もうすぐ給食の時間なんだから、いつまでも寝ていられたら、こっちも迷惑なの」

頭のすぐ横で早口にまくし立てられ、紅は思わず両手で耳を塞いだ。

「勘弁してくれ、野々村。俺は別に、周りと慣れ合いながら食事をするような趣味はない」

「なに言ってんのよ。そんなことだから、いつまで経ってもクラスの中で浮いちゃうんじゃない」

そう言いながら、少女は紅が耳を塞ぐのに使っていた両手を強引に引き剥がす。

野々村萌葱（ののむらもえぎ）。紅のクラスで学級委員を務める少女であり、クラス

内でも数少ない、紅に対して臆することなく話をしてくる人間だった。

実際に、彼女以外の人間は、紅とは殆ど必要以上の会話をしようとはしない。もっとも、周りが静かなことを望む紅にとっては、萌葱の存在でさえ喧騒の一部にしか思えなかったのだが。

「とにかく、今はもう給食だって配り始めてるんだからね。さっさと取りに行かないと、犬崎君の分、無くなるよ」

「ああ、分かったよ。分かったから、そう耳元で騒がないでくれ」

あまりにしつこい萌葱に降参したのか、紅もしぶしぶといった様子で席を立った。だが、そうして彼が給食をもらいに行こうとしたその時、クラスメイトの一人が彼のことを呼び止めた。いつもは話さえろくにしない相手のため、紅の視線も自然と鋭い物になる。

「おい、犬崎。なんか、上級生が、お前のこと呼んでるぜ」

「上級生？　いったい、どこの誰なんだ？」

「それは……自分で行って確認してくれよ……」

伝えるべきことは伝えた。そう言いたげな表情で、その男子は紅の前から去って行った。後に残された紅はしばし考えていたが、やがて仕方ないと言った表情で、そのまま教室から廊下に出た。

この学校で、自分を直々に呼びだすような者とはどんな人間だろうか。別に無視してもよかったが、後で揉め事が増えることの方が、

紅には問題だった。

廊下に出ると、そこには数人の男子生徒が待っていた。真ん中にいるのは三年だが、他には二年も一年もいる。

「あんたか、俺に用があるってのは？」

いつも通りの、ぶっきらぼうな口調で紅が言った。相手が上級生であろうと、紅の辞書に遠慮をするという言葉はない。

「お前の顔を見るのは二度目なんだがな。俺のことを忘れるとは、お前、随分と偉いみたいじゃないか、犬崎」

「悪いが、下らない過去の出来事を、いちいち覚えてはいないんでな」

「てめえ……。まあ、いい。今日は、お前に用があって来たんだからな」

真ん中にいる少年が、苦虫を噛み潰した様な顔をして言った。紅から見てもはっきりと分かるくらい、怒りの感情を押し殺しているというのが見て取れた。

「俺達、今度の週末に肝試しをやることになってな。場所は、ここから少し行った場所にある、土師見第二中学の旧校舎なんだが……。その肝試しに、お前も来てもらいたいんだよ」

「肝試しか。下らないな。そんなもの、あんた達だけで勝手にやればいい」

「まあ、そう言うなよ。二中の旧校舎なんだが、あそこは俺達の間でも『出る』って噂でな。万が一のことを考えて、拝み屋の家の人間でも連れて行った方がいいと思ったんだが……」

「そういうことか。だったら、俺もつき合ってやる」

「話が分かるじゃないか。それじゃあ、今週末の金曜、夜の九時に土師見第二中の前に来い」

含みのある笑みを浮かべながら、リーダー各と思しき少年が言った。何か企んでいることは火を見るより明らかだったが、紅はあえて、相手の話に乗ることにした。

肝試しの付き添いなどは、方便だ。きっと、他に何か考えがあってのことに違いない。見るからに柄の悪そうな連中が相手だけに、本当は闇討ちでも考えているのかもしれない。

だが、仮にそれが事実だとしても、紅は彼らを放っておくつもりはなかった。

土師見第二中学の旧校舎に出る幽霊。その話が本当だとすれば、下手に肝試しなどを行うことは、霊を無駄に刺激することになる。向こう側の世界に通じる者としては、事故は可能な限り未然に防いでおきたいのだ。例え、その被害者が、世間から存在を煙たがられている不良であったとしても。

「あんた、名前は？」

その場を立ち去ろうとする少年達のリーダーに、紅は抑揚のない口調で尋ねた。

「三年の、田所隆二だ。二年のお前も、名前くらいは聞いたことがあるんじゃないか？」

「ああ、あんたが田所か。俺も、少しは話に聞いている。確か……三中の癌って呼ばれている不良だっけか？」

「てめえ……。田所さんに向かってそんな口をきくなんざ、いい根性してんじゃねえかよ……」

紅の言葉に、周りにいた取り巻きが一斉に彼を睨んだ。しかし、田所はそれを軽く制すと、何も言わずに廊下の向こうに去って行った。

学校一の不良から、直々に肝試しへの誘いがある。何か裏があるとは分かっていたが、それでも紅は、彼らの軽率な行動が闇を掘り起こしてしまうことの方が心配だった。

～ 弐ノ刻　策略 ～

その日の学校は、特にこれといった騒ぎもなく平穏無事に終わりを告げた。授業も五限で終了し、今は自宅への帰り路を急いでいる。

給食時に田所から呼びだされた際には面倒事を覚悟した紅だったが、結局は、大きな騒ぎにならずに済んでほっとしている。静やかな暮らしを好む紅にとって、人前で無用な騒動に巻き込まれることは、極力避けたかったのだ。

「それで……結局、その肝試しに一緒に行くことにしたわけ？」

紅の隣を歩く萌葱が言った。

正直なところ、紅は朱音以外の人間と一緒に帰りたくはなかった。自分は構わないが、朱音は紅以外の他人と関わることが苦手な娘だ。それ故に、変な気を使わせたくないと思っていたが、三人とも帰る方向が一緒なのだから仕方がない。

「別に、俺だって好きで行くわけじゃないさ。ただ、二中の旧校舎には、妙な噂があるのも知っているからな」

「変な噂？」

「ああ。とは言っても、殆どは学校の七不思議の域を出ない、下らない噂話だ。ある、一つの話を除いては、なんだが……」

「へえ……。犬崎君って、そういうの信じてる人だったんだ……」

「まあな。婆さんが拝み屋なんてやってるもんだから、一応は……」

それ以上は何も語らず、紅はあえて最後に言葉を濁した。

自分の家が、赫の一族として退魔行を生業としている。そんな話をしたところで、萌葱に信じてもらえるとは思っていない。それに、赫の一族に関する話は、無闇に人前で話してはいけないともされていた。

「それじゃあ、俺はこの辺で帰るぞ。朱音も送って行かなきゃならないしな」

「うん。犬崎君も、また明日ね」

分かれ道に差し掛かり、萌葱は片手を振って紅と別れた。その後ろ姿を目で追いつつも、紅はふと、隣にいる朱音の方へと視線を移した。

学校からここに来るまで、朱音は先ほどから一言もしゃべっていない。やはり、緊張していたのだろうか。そう思って顔を覗き込むと、途端に屈託のない笑顔を向けて来る。例の、赤く清んだ瞳を大きく見開いて。

「どうした、朱音？　やっぱり、気を使わせたか？」

「ううん、平気だよ。それよりも……野々村先輩と話していたこと、本当なの？」

「ああ、本当だ。今週末の金曜の夜、二中の旧校舎を探索するってことになってる」

「そうなんだ……。でも、大丈夫かな……」

「それは、あの不良どもに言ってやるんだな。二中の旧校舎に伝わる怪談なんて、ほとんどが小学生の作り話のようなもんだが……一つだけ、ヤバそうな話を聞いたことはある……」

「ヤバそうな話？　それって、どんな話なの？」

言わなければよかったと思った時には、既に遅かった。

朱音は興味津々といった表情で、紅の顔を覗き込んで来る。紅の話す向こう側の世界の話を、どうも別世界のおとぎ話のように考えているらしい。もっとも、朱音の母は娘が赫の一族の力に触れることを嫌っていたため、怪談話の類を堂々と話すのは複雑な気持ちだったのだが。

「そうだな……。とりあえず、俺の聞いた話だと……」

仕方なしに、紅は言葉を選びながら話を始めた。こうなっては、自分の知る限りの話を一通り話さなければ、朱音を納得させられそうにない。朱音には、後で口止めをしておけば大丈夫なはずだ。

紅が聞いた旧校舎にまつわる怪談は、どれも子どもの創作の域を出ない話だった。

深夜、誰もいない音楽室から聞こえて来るピアノの音。三階の女子トイレの三番目を、夜中の三時に三回ノックすることで現れる少女の霊。美術室にある、モナリザの目が真夜中に光る話。そして、夜の校庭を走る二宮金次郎の像。

どれも、一度くらいは聞いたことのある怪談話である。信憑性の欠片もなく、小学生が読む『怖い話の本』などに収録されていそうな内容だ。中学生にもなって、まさか、こんな話を信じている者はいないだろう。

だが、そういった話に混ざり、土師見第二中学の旧校舎には、一つだけ恐ろしい話が伝わっていた。

――――化学準備室に現われる少女の怨霊。

紅が聞いた時には、確かそのような名で呼ばれていたような気がする。中学校なのだから、化学準備室ではなく理科準備室ではないかとも思うのだが、細かな突っ込みは、この際どうでもよい。

今から四十年ほど前、まだ土師見第二中学の旧校舎が使われていた時代のことである。

その日、一人の女子生徒が、教師に頼まれて理科室の奥にある準備室の棚へ薬品を取りに行った。中学の授業で用いる薬品で、その上、生徒に取りに行かせるような種類の薬である。当然、劇薬の類などではなく、女子生徒は何も考えずに薬品棚のガラス戸を開けた。

薬瓶の並ぶ棚の中から、教師に言われた薬だけを持ち出せばよい。お目当ての薬品は女子生徒の背丈よりも少し高い場所にあったが、手を伸ばして届かない距離ではない。

何のことはない、簡単なお使い。だが、そう思い油断していたこ

とが、後に取り返しのつかないミスを犯すことに繋がった。

棚の奥にある薬瓶を取ろうと手を伸ばした際に、その女子生徒は自分の指を隣に合った薬瓶にひっかけてしまったのだ。倒れた薬瓶の中身は女子生徒の頭から降り注ぎ、次の瞬間、焼けつくような痛みが彼女の顔を襲った。

喉を引き裂かんばかりの悲鳴が響き、肉の焦げるような匂いが準備室に広がる。倒れた薬瓶の中身は、事もあろうか希釈する前の硫酸だったのである。

悲鳴を聞きつけ、教師がかけつけた時には既に遅かった。女子生徒の顔の半分は醜く焼け爛れ、見るも無残な姿になっていたという。

程なくして、病院に運ばれた女子生徒は一命を取り留めた。が、硫酸によって焼け爛れた皮膚は元には戻らず、それは彼女が退院した後も変わらなかった。

元々、その女子生徒は、校内でも一、二を争う程に美しい肌の持ち主だったと言われている。それこそ、白百合に例えられるほどの、典型的な大和撫子だった。

しかし、彼女の顔が崩れてからは、周りの態度もまた変わっていった。今までの出来事が嘘のように、周りは彼女に冷たくなったのだ。そればかりではなく、中には汚い物でも見るかのようにして、明らさまに侮蔑と嫌悪の視線をぶつけて来る者もいた。

なぜ自分だけが、これほどまでに酷い目に合わねばならないのか。思い悩んだ末、最後にその女子生徒は、呪いの言葉を残して命を絶ったという。しかも、その死に様が物凄い。

学校で生徒が自殺したと聞くと、大概の者は屋上からの飛び降り自殺などを連想するだろう。しかし、その少女が選んだ方法は、より残酷でグロテスクな、人の記憶にトラウマとなって焼きつくような死に方だった。

彼女が最後に選んだ死に場所は、事故のあった理科準備室。深夜の学校に忍び込み、彼女は自らの腹を包丁で裂いて割腹自殺したという。しかも、腹を裂いた直後は絶命に至らず、自らの身体から溢れ出る血で、準備室の床に呪いの言葉を書き残して。

それ以来、土師見第二中の理科準備室には、非業の死を遂げた女子生徒の霊が出るとの噂が立った。真夜中の女子生徒が自殺を遂げたとされる時間になると、顔の焼け爛れた少女の霊が、どこからともなく現れるというものだ。そして、裂けた腹から赤黒い内臓をはみ出させ、ずるずると床を這うような形で迫って来るという。

この話を聞いた時、紅は言いようのない不安感に襲われたことを覚えている。他の話があくまで小学生の作り話の域を出ないのに対し、なんというか、一つだけ異質なのだ。

硫酸を浴びて醜い姿へと変貌した女子生徒が、その事故現場で割腹自殺を遂げる。中学生が話す怪談話としては、あまりにも生々しく、またグロテスクでもあった。

できるだけ過激な言葉を使わないように注意しながら、紅は少女の霊が出る理科準備室の話を終えた。先ほどから、その話を聞いている朱音は何も言わずにこちらを見ているだけだ。

やはり、朱音には刺激が強すぎたか。予想以上に恐ろしい話を聞

かされたことで、怯えてしまったのかもしれない。

そう思った紅だったが、彼の心配は杞憂だった。

「その人、可哀想だね……」

赤い瞳が何かを憐れむ時のそれに変わり、朱音はぽつりと呟くようにして言った。

「可哀想、か……。まあ、確かにそうかもしれないな。自分の不注意で事故に遭ったとはいえ、その後に周りの人間が冷たくしたりしなければ、彼女も自殺なんかしなかったかもしれない」

「ねえ、紅君。もし、肝試しの時に、その女の子の幽霊が出てきたら……どうするの？」

「どうするって……。残念だが、今の俺には朱音が期待しているような答えは言えないな。成仏させてやりたい気持ちはあるが、それは俺の爺さんや婆さんの仕事だ」

「そっか……」

「まあ、そもそも噂が本当かどうか、その辺だって曖昧だしな。とりあえず、今日帰ったら爺さんに相談して……全てはそれからだな」

「うん。でも、紅君も、無理はしないでね。お化けに襲われそうになったら、すぐに逃げてね」

「ああ、分かったよ。もっとも、朱音が心配しているようなことは、たぶん起きないと思うけどな」

最後の言葉は、作り笑いと共に口にした。

理科準備室に現われる少女の霊。その真相は定かではないが、仮に本物の霊が現れた場合、今の紅にそれを祓うのは困難だ。剣術の腕は別としても、紅はまだ、退魔師としては半人前。その辺を漂っているような浮遊霊ならいざ知らず、強い怨念を抱いて悪霊と化した魂を浄化できるとは思えない。

ここは、やはり祖父や祖母に相談するしかないだろう。あの不良達が興味本位で肝試しを行った結果、取り返しのつかないことになってからでは遅い。向こう側の世界の住人というものは、素人が考えている以上に危険な存在なのだ。

棚田の近くにある分かれ道に差し掛かり、紅は朱音と別れて帰路を急いだ。別れ際に朱音の名残惜しそうな顔が気になったが、今はそんなことに気を取られている場合ではない。

はやる気持ちを抑えつつ、紅は棚田の脇にある坂道を早足で昇った。こういう時、つくづく山の上にある自分の家が恨めしくなる。先祖代々の土地らしいが、せめてもう少しだけ平らな土地に家を建ててもよいのではないかと思う。

「帰ったぜ、婆さん」

玄関に続く戸を開けると、紅は祖母の多恵に向かって叫んだ。この時間、大抵の場合、祖母は茶の間にいる。玄関先から呼んで、聞こえない距離ではない。

だが、そんな彼の予想に反し、今から返ってきたのは若い女性の

声だった。ふと足元を見ると、いつもはそこにあるはずのない、妙に踵の高い靴が置いてある。

靴の持ち主に、紅は心当たりが無いわけではなかった。自分も靴を脱ぎ、客人が来ているであろう茶の間へと向かう。多少、建てつけの悪くなった襖を開けると、果たしてそこには彼の予想していたのと同じ人物が座っていた。

「あら、紅ちゃん。久しぶりね」

座布団の上に座ったまま、若い女性が首だけを紅の方に向けて言った。

「皐月さんか。いつ、こっちに来てたんだ」

「あら。折角久しぶりに会えたのに、第一声がそれ？　お姉さん、悲しくなっちゃうな……」

「茶化すのは止めてくれ。それとも、まさか本気で言ってるんじゃないだろうな」

「やれやれ……。相変わらず、冗談の一つも通じないってわけね、紅ちゃんは」

座ったまま肩をすくめ、その女性、鳴澤皐月（なるさわさつき）は少し残念そうな顔をした。彼女自身、男性をからかって反応を見るのは好きだったが、紅に限ってそれは通用しないらしい。

「それで。今日は、何の用でこっちまで？」

茶の間にあった座布団の一つを引っ張り出し、紅もその上に腰かけた。

「そうね……。とりあえず、仕事道具を作るための素材集めってところかしら。土師見の樅は、私から見ても一級品のものだしね」

「樅か……。それで、誰かの卒塔婆か棺桶でも作るつもりか？」

「まさか。縁起でもないことを言わないでちょうだい。樅は、木札の材料にもなるからね。こと、魔封じの札を作るには、素材になる木の質が関係してくるのよ」

「なるほどな。さすがは、俺の爺さんが認める退魔具師（たいまぐし）ってところか……」

先ほどまでの表情とは打って変わり、紅が感心した様子で皐月を見た。

退魔具師。魔除けの札を初めとした、向こう側の世界の住人達と戦うための道具を作ることを生業とする職業。その中でも皐月の守備範囲は極めて広く、魔除けの札作りから呪いの解除、果ては退魔師の用いる武器の作成まで一挙に手がけている。

そんな皐月の格好だが、どう見てもこんな山間の村に赴くには不釣り合いなものだった。黒いスーツに身を固め、紫色のアメジストをはめ込んだアクセサリーを首や耳、それに腕にもつけている。髪の毛からは、ほのかに鼻腔を刺激する甘い香りを漂わせてもいた。

だが、そのような外見に反し、皐月の腕は確かなものがあった。それこそ、紅の祖父である臙良も認める程に、優秀な退魔具師であ

る。

退魔具師の皐月と拝み屋の多恵。この二人にならば、例の旧校舎に出る幽霊の話を相談してもよいだろう。そう考えた紅は、先ほどから皐月と向かい合う形でお茶を飲んでいた祖母へと顔を向け、徐に今日の出来事を語り出す。

「なあ……。ところで、話は変わるんだが……」

「なんだい、紅。何か、学校で良からぬことでもあったのかえ？」

「まあ、そんなところだな。今日の昼、学校の不良どもに呼び出されて、肝試しへの参加を強要された。なんでも、廃校になった土師見第二中の旧校舎へ、金曜の晩に探索に行くらしい」

「それはまあ、物好きな輩もおったものよのう。人の手の入らなくなった土地など、穢れ地になっておることも多い故に……。決して誉められたものではないな」

「俺も同感だ。だが、このまま放っておいて、妙なことになっても後味が悪いからな。それに、あの旧校舎には変な噂もある。万が一のことを考えると、爺さんや婆さんの力を借りた方がいいんじゃないかと思ったんだが……」

「なるほどのう。まあ、私もあの学校の横は何度か通ったことがあるが……恐らく、不浄の者の一つや二つは住みついていると言っても過言でないぞ……」

湯呑のお茶をすすりながら、祖母の多恵が紅を諭すように言った。いつもは細く真横に伸びた目が、どこか険しく見開かれて紅を見る。

「それは、こっちも分かっている。だからこそ、事態が大事になる前になんとかしたい。憑かれたり、祟られたりした者から闇を祓うのは、単に向こう側の世界の連中と対話するよりも大変なんだろう？」

紅も、負けじと多恵に食い下がる。

悪霊や祟り神は、それその物も危険な存在だ。しかし、それ以上に厄介なのが、彼らを怒らせ禁忌に触れてしまうことである。

悪霊に憑依される、もしくは祟り神に祟られる。そういった場合、退魔師の仕事は途端に難しいものとなる。憑依した霊を追い出すことは、下手をすれば憑かれている者の命に関わる事態に陥ることも多い。祟り神と対峙するに至っては、逆にこちらが命を奪われないとも限らない。

触らぬ神に祟りなし。昔から言われている諺であるが、これは確かに真実だろう。好奇心から下手に霊を刺激して、取り返しのつかないことになってからでは遅いのだ。

理科準備室に現われる少女の霊の話が、果たしてどこまで本当なのかは分からない。だが、祖母の話を聞く限りでは、噂に関係なく、不浄霊の一つや二つは旧校舎に巣食っている可能性がある。

どちらにせよ、あの旧校舎は足を踏み入れてはならない場所なのだ。だからこそ、紅はこれが恐ろしい事件の引き金になりそうで不安だった。深夜、その辺の神社の境内を回るような肝試しとは、根本的にわけが違うのだから。

「なあ、婆さん。できることなら、あの不良共が肝試しをやる前に、なんとかできないか？　妙なものが巣食っているんなら、それこそ、婆さんの力でさ……」

「いんや、無理だね。私はただの拝み屋だよ。この世に未練を残して亡くなった霊の、愚痴を聞いてやるのが仕事さね。臙良のように、なんでもかんでも祓えるってわけじゃあないんだよ」

「だったら、俺から爺さんに頼む」

「残念だね、紅。臙良なら、仕事で今日の夜から出かけるよ。しばらくは戻らないと言っていたし、帰って来るのは次の日曜くらいではないかのう」

「なんだって！？　ったく……。どうしてこう、肝心な時に出かけちまうんだよ……」

頼みの綱が次々と音を立てて切れてゆく音が、紅には頭の中に直接響いてくるような気がした。

祖母の多恵は、自分の力では悪霊を退治することができないと言う。最後の砦であった祖父の臙良も、帰って来るのは日曜日。今度の金曜がに肝試しが実施されることを考えると、それでは遅すぎる。

家に帰れば、なんとか打開策があると思っていた。その考えが脆くも崩れさり、紅は表情を曇らせる。

だが、そんな彼の気持ちなどお構いなしに、多恵はさらにとんでもないことを言ってきた。

「のう、紅。なんだったら……旧校舎に出る亡霊とやらを、お前が祓ってみてはどうじゃ？」

「なっ……！？　冗談じゃないぞ、婆さん。俺はまだ、修業中の身だ。爺さんみたいに、悪霊と正面切って戦うなんてことは……」

「おや、自信がないのかえ？　あれだけの剣の腕を持っているのなら、お前にもやって出来ぬことはないじゃろうに……」

「それとこれとは、話が別だ。いくら剣を上手く使えたところで、向こう側の世界の住人相手には通用しない。それは、婆さんだって分かっているだろう？」

「まあ、確かにそうじゃな。ただ……連中と対等に渡り合うための道具があれば、そうも言えまい」

多恵が、皐月の方をじっと見る。一瞬、何事かと思った皐月だったが、すぐにその意味を理解した。

「なるほどね。確かに、武器さえあれば、なんとかなるかもしれないわね」

そう言いながら、皐月がなにやら意地の悪そうな笑みを浮かべる。いつもは冷静にふるまっている紅を、ほんの少しだけ困らせてみたい。そんな気持ちが見え隠れしているような笑い方だった。

「道具だったら、私の方でなんとか用意しておくわ。今の紅ちゃんでも使えるような物くらい、金曜までには用意できるしね」

「今の俺にって……随分と、過大評価されたもんだな。何度も言っ

ているが、俺は修業中の身で……」

「そうは言っても、私よりは強い力を持っているんでしょう？　だったら、私の作った道具を使うことだって簡単よ。なんだったら、お姉さんが手取り足取り、使い方を教えてあげようかしら？」

「勘弁してくれ……。言っておくが、俺は皐月さんの玩具にされるような趣味はない」

左手で目元を押さえながら、紅は思わずため息をついて口にした。

どうやら多恵は、本気で紅に退魔師として第一歩を踏み出させようとしているらしい。その上、皐月も皐月で、この状況を喜んでいるようだ。

確かに、退魔師としての仕事をするのは、紅も納得していないわけではなかった。それこそ、ゆくゆくは赫の一族の末裔として、祖父の仕事を継がねばならないのだから。

しかし、今の紅は、祖父とは異なり未だ修業中の身だ。いかに皐月の作る退魔具が優秀でも、それを使って悪霊を祓えるとは限らない。向こう側の世界の住人と戦うための術はいくつか習っていたものの、それはあくまで練習の上での話だ。実際に、本番でその力を使った経験は、当然の事ながらない。

「はぁ……。まあ、仕方ないな。婆さんに無理させるわけにもいかないし、かと言って、あの馬鹿どもを放っておくわけにもいかないからな。ここは一つ、出来るだけのことをやってみるか……」

表向きには納得したような台詞を言って、紅は再び多恵と皐月の

方を見た。二人とも、何やら妙に期待に満ちた目でこちらを見ている。

どうやらここは、本気で覚悟を決める他になさそうだ。不良連中の安否などはどうでもよかったが、やはり、穢れ地に巣食う闇を外に解き放つようなことになっては一大事である。

その上、下手に弱気になれば、皐月が妙な退魔具レクチャーを始めかねない。それこそ、向こう側の世界の住人と戦う前に、色々な意味で皐月に食べられてしまうかもしれないのだ。

赫の一族として、初めて闇と対峙する。金曜までには日があったものの、その現実は、否応なしに紅を緊張させていた。

※　※　※　※　※　※　※

九月に入ったばかりだというのに、その日の晩は特に蒸し暑い夜だった。

宵の闇に染められた山々を背景に建つ校舎を前に、田所隆二は仲間と共にそれを眺めていた。昼間は深い緑色をしているであろう山々の樅は、今は薄暗く不気味な色に変わっている。

梢と梢の間を風が通り抜ける度に、樅の葉がザワザワと揺れて音を立てた。老朽化の進む旧校舎の姿と相俟って、その光景は否応なしに人の不安を煽るものだ。

「田所さん。犬崎のやつ、本当に来ますかね？」

待ち合わせの時間には早かったが、それでも仲間の一人が早くも痺れを切らしているようだった。

「奴は来るさ。腐っても、オカルト一家の息子なんだからな。こういった話は、あいつにとっても絶好の餌だろうよ」

「でも、びびって来ないってこともあるんじゃないっすか？」

「その時はその時だ。これであいつが来なければ、犬崎の家の人間なんぞ、何の力もないハッタリ野郎だということを証明できるんだからな。そうなれば、この土師見の中学は、俺達が締めたも同然だ」

「なるほど。さっすが田所さんですね」

「だろ？　今日の肝試しは、あの犬崎の野郎の化けの皮を剥ぐための、絶好の舞台ってわけさ。そのために、お前にも力を貸してもらうぜ、澤井」

田所が、何やら含みのある笑みを浮かべて言った。澤井と呼ばれた彼の仲間も、無言のまま頷いてそれに答える。

旧校舎に出る幽霊の話など、田所は端から信じていなかった。それればかりか、今日の肝試しの計画自体、犬崎紅を嵌めるための罠なのだ。

現在、田所の周りにいる仲間は三人。先の澤井明俊（さわいあきとし）に加え、二年の権田健史（ごんだたけし）と一年の柏木辰巳（かしわぎたつみ）がいる。

澤井は田所と同じ三年であり、同時に彼の昔からの仲間である。

いや、むしろ仲間というよりは、部下と言った方が正しいだろう。

強者に弱く、弱者に強い。格下相手には高圧的に出る癖に、田所に対しては必要以上に持ち上げる、典型的なごますり男。サラリーマンにでもなれば出世しそうなタイプだが、田所自身、澤井のことをそこまで気に入ってはいなかった。こういう人間は、いざとなれば我先に裏切って、今までの恩をあだで返すという相場が決まっているからだ。

二年の権田に関しては、ある意味で澤井よりも酷い。

柔道の経験もある権田は、体格だけならば田所よりも良い。だが、そういった人間にありがちな、頭の悪さが欠点だった。なにしろ、ちょっとしたことで直ぐに頭に血を昇らせて、殴り合いの喧嘩を起こしかねないのだから。

力は他者を服従させるために必要だが、それ故に、無闇に振るっては価値が下がる。単細胞なゴリラでは、所詮、喧嘩の一番槍として格上の人間に利用されるだけの存在だ。

そして、最後の柏木辰巳。こいつに関しては、田所も少しだけ期待しているところがあった。

柏木はまだ一年だったが、その残虐性は、仲間の内でも最も高いものがあった。小学校の頃から小動物を虐め殺すような人間だったらしいが、そういったタイプにある根暗な印象はまったくない。どちらかと言えば、遊びの延長で犬や猫を殺す事に、何の罪悪感も覚えないような人間だ。

ウザいから殺す。それが柏木の口癖だった。この田舎の村におい

て、ある意味では最も今風の若者に近い考えを持つ彼は、確かに先の二人よりも不良として期待するものがある。だが、それもあくまで、他の二人と比較しての話である。

村の田んぼにいる蛇や蛙を残虐にナイフで痛めつけたところで、そんなものは、所詮は餓鬼のお遊びと変わらない。小さな暴力で自己満足しているようでは、まだまだ幼いと言わざるを得ない。

結局、頼りになるのは自分自身しかいない。仲間は皆、存在そのものが格下の連中ばかりである。その上、この村に残る妙な因習のせいで、自分は未だに小さな中学校一つ締められない。現に、あの犬崎紅は、田所に対してまったく臆することなく話していたのだから。

できることならば、一刻も早く高校に上がり、街へと繰り出してゆきたかった。こんなダサい田舎の村で燻っていては、今に全身にカビが生えてしまう。

そう、田所が考えた時だった。

雲と雲の切れ間から、淡い一筋の月光が舞い降りる。その明かりに照らされて、闇の中から一人の少年が姿を現した。

「待たせたな……」

宵の闇の中から現れた少年、犬崎紅が、田所に向かって言った。田所も、「おう」とだけ返して紅を見る。

田所が明からさまにガンを飛ばしているにも関わらず、紅はその態度をまったく変えることがなかった。そのことが田所を無性に苛

立たせたが、ここは仲間の手前、軽率な行動は控えることにした。

「へぇ、ようやく来やがったか。逃げ出したんじゃないかと思ったぜ」

田所に代わり、澤井が紅を挑発する。しかし、紅はそれを完全に無視し、目の前にそびえ立つ旧校舎を睨んだ。

今では使われることのなくなった、木造の古臭い作りの旧校舎。大きさも、紅達の通うコンクリート製の校舎と比べ、どこか一回り小さな印象を受ける。

だが、そんな旧校舎ではあったものの、その姿が今の紅達にはやけに大きく映って見えた。漆黒の闇の中、まるで獲物がやって来るのを待つ怪物のように、校舎その物が大きな口を開けて待ち構えているのではないかと感じてしまう。

「それじゃあ、さっさと行くぞ、犬崎。ところで……その手に持っている物はなんだ？」

紅の手に握られた、奇妙な棒状の物体。小太刀程度の大きさを持つそれは、一見してただの短い木刀にしか見えない。

「ああ、これか。簡単に言うなら、幽霊退治の道具ってところだな。この旧校舎に伝わる噂……あんたも知らないわけじゃないだろう？」

「理科準備室に出る女の霊の話か？」

「そうだ。万が一のことがあった場合、こいつでその霊とやらを祓う」

「へっ、頼もしいじゃねえか。まあ、お前がその気なら、こっちも手間が省けるってもんだな。なにしろ、今回の肝試しは、その女の霊の噂を確かめるためのもんだからよ」

「勝手にしろ。だが……仮にこの中の誰かが危害を加えられても、完全に守り通せるという保証はない。ヤバいと感じたら、すぐに逃げてくれ」

紅は本気で言っていたが、田所を初めとした不良達は、それを鼻で笑っていた。

幽霊など、この世にいるはずがない。そう思っているからこそ、今回の肝試しのような、死者をも恐れぬ暴挙を働くことができる。

正直なところ、紅は気が重かった。赫の一族の仕事とはいえ、何故に、このような輩を悪霊から守らねばならないのか。自業自得、因果応報で罰を受けるなら、それもまた仕方のないことではないだろうか。

ふと、そんな考えが頭をよぎったが、紅はすぐさま首を横に振って邪念を打ち消した。

彼らを守るのは、手段であって目的ではない。紅の本当の目的は、この不良達が禁忌に触れて、村に穢れを撒き散らすのを防ぐためだ。結果として田所達を救うことになるのが不満だったが、これも仕方ないことである。

閉鎖された学校の門を乗り越え、紅と田所達は校庭へと侵入した。人の手が入らなくなった校庭は、今やそのあちこちに、背丈の高い

雑草が勢力を広げている。特に、隅の方は侵食も酷い。

雑草を掻き分けるのが面倒だったのか、田所は独り校庭の中心を突っ切るような形で進んだ。紅と、田所の仲間もそれに続く。

いざ、近づいてみると、旧校舎は想像以上に朽ち果てているようだった。木の腐った独特の匂いが鼻をつき、かつては通用口だった場所の奥からは、なんとも言えぬ陰鬱な気が溢れ出している。

「行くぞ……」

そう、一言だけ告げて、田所は旧校舎の中に足を踏み入れた。彼の仲間も、それに続く形で後を追う。

昼間に見るのとは明らかに異なる、異様な空気に包まれた旧校舎。そんな場所にずかずかと入ってゆけることが、紅には不思議でならなかった。

普通の人間であれば、この場の空気に飲まれて躊躇いそうなものだ。やはり、不良の神経というものは、一般人のそれとはどこか一線を画しているのだろうか。

ぎしっ、ぎしっ、という木の軋む音と共に、田所を先頭にした一団が夜の旧校舎を歩く。頼りになるのは、手にした懐中電灯の僅かな明かりのみ。校舎の中に充満した埃臭い空気が、否応なしに紅の鼻を刺激する。

（見られているな……）

校舎のあちこちから妙な視線を感じ、木刀を握る紅の手にも力が

入った。

一度、目を瞑ってから、紅は大きく息を吸い込んで静かに吐き出す。埃を吸い込むのは嫌だったが、この際、贅沢は言っていられない。

肺の中の空気を吐き出したところで、紅の瞳が再び開かれた。いつもの燃えるように赤い瞳が、さらにその赤さを増して輝く。それは炎の色というよりも、体に流れる血の色そのものだ。

現世を漂う、向こう側の世界の住人の姿を見えるようにすること。それが、紅が祖父に初めて教わった退魔師としての技だった。

常世の世界を除けるからといって、紅とて常に相手の姿が見えているわけではない。直感で何かを感じ取ることはあっても、よほど強い力を持った霊でもない限り、意識を集中せねば姿を見ることは敵わない。

霊的な存在に対する、可視と不可視の状態を使い分けること。簡単そうなことではあるが、向こう側の世界と関わる者にとっては重要なことだ。この切り替えがうまくいかず、その辺に漂っている浮遊霊まで常に見えてしまうのであれば、いかに紅とて発狂しないという自信はない。

今、紅は、その精神を集中させることで、霊的な存在に対して可視の状態に入っていた。未だ何の姿も見えないものの、こちらを舐めるように見ている妙な視線だけは確かに感じる。

物陰から様子をうかがっているだけなのか、それとも他に何か意図があるのか。

可視の状態を途切れさせないように集中しながら、紅は油断なく辺りの様子を見回していた。

※　※　※　※　※　※　※

薄暗い、朽ち果てた校舎の一室で、何かを待つようにして座りこむ一つの影があった。

兼元一也（かねもとかずや）。彼もまた、あの田所隆二の仲間である。他のメンバーとは異なり徹底した現実主義者で、その上、頭もよく切れた。

実質上、田所のグループの中では彼が参謀であった。同じ学年の澤井と比べても、兼元の方が田所から信用されていた。それに気づいていないのは、ごますり男である澤井だけだ。

兼元が旧校舎の中に先回りしているのは、田所の命令である。犬崎紅を陥れるために、兼元はあえて理科準備室の中にいた。

準備室に現われる、少女の怨霊。兼元とて、その話を知らないわけではない。もっとも、幽霊がどうしたという類の話は、兼元はまったく信じてはいなかった。

怨霊が出るとされる場所で犬崎紅を待ち、本人が現れたところで、変装した自分が紅を脅かす。紅が、恐怖に慌てふためいて逃げだせば良し。逆に、お祓いのようなことを始めたら、それはそれで面白い。人間の扮した幽霊相手に除霊などを始めたら、それこそが紅の霊能力を否定する証拠となる。

どちらに転んでも、事は自分たちにとって都合よく運ぶのだ。村の年寄り連中が言っている迷信を暴き、更には目障りな紅を陥れることができるとすれば、これほど面白いことはない。

手にしたかつらを頭に乗せて、兼元は持ちこんだ白装束を身にまとった。どちらも、学校の倉庫から失敬してきたものである。数年前の演劇発表か何かで使われたものを、田所達と一緒にくすねてきたのだ。

白い着物を着た、長い髪の女の幽霊。本当はセーラー服でも着た方が良いのだろうが、さすがにそこまで激しい女装をする趣味はない。ステレオタイプな幽霊の姿であるとは思ったが、これでも驚かせるには十分なはずだ。

準備は完了。後は、田所達が犬崎紅を連れて来るのを待てばよい。

「ったく……。それにしても、湿っぽい場所だな……」

暗闇の中、兼元は辺りの様子を窺うようにして首を動かした。

幽霊の存在を信じていない兼元にとって、暗闇そのものは別に怖いとも思わない。朽ち果てた旧校舎にあっても、それは同じことだ。ただ、古く暗いだけの建物というだけで、いちいち怖がっていたらきりがない。

幽霊の話など、所詮は年寄りか噂好きの小学生が作りだした与太話に過ぎない。そう考えていた兼元だったが、今日に限って妙な不安感が彼の心の中で蠢いていた。同学年の中でも特に肝が据わっているとされる兼元だったが、なぜだか今は無性に落ち着かない。

（馬鹿らしい……。こんなボロいだけの建物なんぞに、いちいちビビッてられねえぜ……）

不安を打ち消すようにして、兼元は独り鼻で笑う。この場の空気に飲まれてしまうほど、自分は弱い人間ではないはずだ。

――――ピチャッ……。

次の瞬間、兼元の耳に、何かの雫が滴り落ちるような音がした。それも、遠く離れた場所からではない。今、自分のいる場所の、すぐ近くから音がした。

――――ピチャッ……。

また、何かが垂れた。

間違いない。音は、この部屋から聞こえて来る。

水道の蛇口が閉まっていないのかとも思ったが、それは考えられないことだった。この旧校舎は、とっくの昔に電気も水道も止められているはずだ。

では、あの音の正体はなんなのか。雨漏りという線も考えられず、兼元は思わずその場で首をかしげた。

――――ピチャッ……ピチャッ……ピチャッ……。

音は、規則正しいリズムを刻みながら、絶え間なく兼元の耳に響いてくる。とうとうたまらず、兼元は音の正体を探るために腰を上げて動き出した。

音は、自分のすぐ側から聞こえて来る。薄暗い準備室の、窓辺の方からだ。

足音を立てないように注意しながら、兼元はそっと音のする方へ近づいて行った。いつになく緊張しているというのが、自分でもはっきりと分かる。単に水音の正体を調べるだけだというのに、なんとも情けない話だ。

（下らねえ……。何、ビビってんだよ、俺は……）

兼元が足を出すと、それに従って音も強くなった。窓際の、今では使われなくなった流し台まで辿り着き、兼元はそこに水溜りのような物を発見した。

「なんだ、こいつは……？」

校舎の水道は、とっくの昔に止められている。では、この流しに残る水溜りはなんなのか。そっと指を出して触れてみると、なにやら生温かく、妙に粘性の高い液体だった。

指に付いた液体を摘まむようにして、兼元はそれを自分の鼻先に近づける。何やら生臭く、それでいて錆びた鉄のような匂いが、彼

の鼻腔を刺激した。

「……っ！？」

自分の指に付いている物の正体に気づき、兼元は思わず後ずさった。室内だというのに、妙に生温かい風が吹いて、彼のかぶっているかつらの髪を揺らした。

今、顔を上げてはいけない。そこにある物を見れば、決して日常には戻れない。そう分かっていても、自分の考えとは反対に、頭だけが動いてしまう。

自分の指先から、その視線をゆっくりと天井へ移す兼元。そこにいた者の姿を見た時、彼の精神は一度に決壊の時を迎えた。

「ひっ……！！」

天井からこちらを見下ろしている、醜く歪んだ顔をした異形の者。それは、ぱっくりと開いた腹から赤黒い液体を滴らせ、兼元の方を見つめたままニタニタと笑っていた。

「ぎ、ぎゃぁぁぁぁっ！！」

ドサッ、という音と共に、天井に貼りついていた者が床へと落ちた。その音に合わせ、兼元の叫び声が夜の旧校舎にこだました。

※　※　※　※　※　※　※　※

深夜の旧校舎に、突如として悲鳴が響き渡る。その叫び声に、廊下を歩いていた紅達は思わず足を止めた。

「おい！　なんだ、今のは！？」

「あれは……兼元か！？」

「兼元だと？　貴様、いったいどういうことだ……」

その場にいない者の名を口にしたことで、紅が田所のことを睨んだ。

旧校舎の探索は、紅と一緒に行うはずだった。しかし、今の田所の話を聞く限りでは、どうやら一足先に校舎の中へと足を踏み入れていた者がいるようだ。恐らく、不良の田所のこと。きっと、何か良からぬ考えあってのことに違いない。

「旧校舎の探索は、俺を混ぜて行うって話だったんだがな……。それなら、今の悲鳴は何だ」

「さあてね……。誰か、他にも肝試しをやってるやつがいたんじゃねえのか？」

「下手な嘘だな。だが……今は、そんなことはどうでもいい」

あの悲鳴が、ただ事でないことは紅にも分かっていた。木刀を握る紅の手にも、思わず力が入る。

朽ちた校舎が崩れて事故でも起きたのか、それとも何か、恐ろし

い物に遭遇したのか。原因など、考え出せばきりがない。

とにかく、今はあの悲鳴の主を、なんとかして助けることが先決だ。そう思ったが早いか、紅は板張りの廊下を蹴って走り出していた。声の聞こえてきた方角、理科室の方へと向かい、足を急がせる。

「おい！　待てよ、犬崎！！」

後ろから、田所達も追ってきた。それでも紅は、振り向くことなく先を急ぐ。不良どもに構っている暇など、今はない。

理科室の前に着くと、紅は部屋と廊下を隔てる扉を乱暴に揺すった。扉は建てつけが悪く、なかなか思うように開いてくれない。苛立ちを抑えきれない顔をして蹴り飛ばすと、ガタっという音と共に、扉は無残にも外れてしまった。

外れた扉を半ば放り出すようにして、紅は理科室への入口を開け放った。部屋の中には使われなくなった実験机が並んでおり、かつては様々な標本や薬瓶が並んでいたと思しき棚の姿もある。

「どこだ……。どこにいる！！」

焦りは禁物だと分かっていたが、それでも逸る鼓動を抑えることができなかった。

この校舎に入ってから感じていた、こちらを舐めまわすようにして見つめる奇怪な視線。それが、この部屋に入った途端、急に強くなった。可視の状態にある今ならば、相手の姿もはっきりと捉えることができるだろう。

暗闇の中、紅の赤い目が、まるで何かを探すレーダーのように輝いた。日中は、強い光を受けただけで痛みを感じてしまう真紅の瞳。そんな彼の目は、闇の中でこそ真の力を発揮する。夜行性の獣の目のように、灯りを用いずとも闇の中の様子が分かるのだ。そればかりでなく、力を行使すれば、この世にはあり得ない者の姿を見ることさえも可能となる。

静まり返った理科室の中で、紅は油断なく視線を動かした。相手はどこから、何を仕掛けて来るか分からない。敵の正体が分からない以上、こちらも気を抜くことは許されない。

「あれは……」

紅の瞳が、部屋の隅で丸くなっている者の姿を捉えた。白装束に身を包み、手には長髪のかつらを持っている。その恰好から一瞬だけ女かと思ったが、相手はどうやら男のようだった。それも、自分とそう歳の離れていない少年だ。

「おい……。お前、こんなところで何をしている？」

紅が、暗がりの中で震えている少年に近づいて尋ねた。その声に、少年は一瞬だけ、肩をビクッと震わせて反応する。

「お前、田所の知り合いか？　なんで、俺達より早く旧校舎に入った？」

紅は少年を問い詰めたが、少年は何も答えなかった。その代わり、掠れたような声を洩らしながら、震える指で部屋の奥になる扉を指差す。

それは、理科準備室へと続く扉だった。古びた木製の戸は開け放たれ、その奥からは漆黒の闇が顔を覗かせている。

間違いない。先ほどから自分達を見ていた者は、あの奥に存在する。

右手に木刀を握りしめ、紅は無言で立ち上がった。後ろから、なにやらバタバタと駆けて来るような音が聞こえる。きっと、田所達が追いついたのだろう。

――――ズルッ……。

暗闇の奥から、何かを引きずるような音がした。油断なく、紅は音のする方へと目を向ける。

――――ズルッ……ズルッ……。

再び、引きずるような音。それは徐々に、こちらへと近づいているようにも思われる。

「ひ、ひぃっ！！」

紅の横で丸くなっていた少年が、小さな悲鳴を上げて脚に縋りついた。一方の紅は、あくまで落ち着き払った表情で、闇の奥から這い出て来た者を見つめている。

「なるほど……。あれか……」

紅の瞳が、細く、鋭く変化した。いつもの、どこか儚くぼんやりとしたような目ではない。獲物を駆る時の肉食獣のような、向こう側の世界の者と戦う時のそれだった。

「な、なんだ、ありゃ……」

後ろから、田所達の声が聞こえてきた。今、紅の前に現われた者が、恐らくは彼らにも見えているのだろう。

黒い髪を振り乱し、ヒキガエルのようにして地面を這う奇怪な少女。その顔は半分が焼け爛れ、腹の部分からは赤黒い液体が溢れ出ている。少女の這った後には、腹から溢れたと思しき液体が、赤く太い線を描いていた。

「どうやら、噂はまったくの作り話ってわけでもなかったみたいだな……」

旧校舎の理科準備室に現われる、割腹自殺を遂げた少女の霊。話には聞いていたものの、こうして対峙してみると、やはりそのおぞましいしい姿に顔を背けたくもなる。

だが、ここで自分が逃げ出してしまっては始まらない。手にした木刀に力を込めると、紅は意識を刀身へと集中させた。木製の刀に刻まれた複数の梵字が、淡いオレンジ色に輝き始める。

霊木刀（れいぼくとう）。鳴澤皐月から借り受けた、退魔師の用いる武器の一つだ。その威力は、純粋に使用者の力に比例して強くなる。本来であれば梵字が炎のように赤く輝くのが普通だが、今の紅ではオレンジ色の

輝きを持たせるので精一杯だった。

「行くぞ……」

小太刀の形をした霊木刀を構えたまま、紅はじりじりと少女の霊に近寄った。その力を感じ取ったのか、少女の霊も動くのを止める。首を上げ、恨めしそうな顔をこちらに向けて、喉の奥から低く唸るような声を洩らした。

紅と少女。闇の中で、赤い瞳と淀んだ瞳が対峙する。一瞬たりとも視線をそらすことをせず、ただお互いに、その心の奥底を覗き込むようにして睨み合った。

静寂に包まれた理科室の中で、時間だけが無情に過ぎてゆく。ほんの数秒しか経っていないにも関わらず、一秒が一時間程にも感じられるような、緊迫した空気が辺りを包む。

（おかしい……）

目の前にいる少女の霊に、紅はふと、妙な違和感を覚えた。

噂が本当ならば、少女は呪いの言葉を残してこの世を去ったはずだ。つまり、強い恨みの念を持って怨霊となったはずなのである。

しかし、目の前にいる霊はどうだろうか。確かに恐ろしく、奇怪な姿をしているものの、その瞳からは悪意のようなものは感じられない。なんというか、こちらの怖がる様子を見て楽しんでいるような、そんな感じなのだ。

（去れ……）

そう、心の中で念じ、紅はその感情を直接相手にぶつけてみた。視線を通し、相手に気弾としてこちらの感情を叩きつける。これもまた、祖父から教わった技の一つだ。

こちらの意思が伝わったのだろうか。少女の霊が、一瞬だけ肩を震わせた。

（ここから去れ……。さもなくば、お前を無に帰すことになるぞ……）

再び、気弾に感情を乗せて叩きつける。その度に、少女の霊は怯えるようにして肩を震わせ、紅から視線を背けようとした。

間違いない。この霊は、紅の聞いた怪談話に出てきた少女の霊ではない。もっと低級で、それでいて性質の悪い存在だ。

そう、紅が考えた時だった。

「うぅぅぅぅ……あぁぁぁぁっ！！」

少女の霊が、突然奇声を上げて向かってきた。恐ろしいまでの速さで床を這い、紅の方へと迫って来る。

「ひ、ひぃぃぃぃっ！！」

紅の足元にいた少年、兼元一也が、情けない声を出して逃げ出した。そんな彼を一瞬だけ横目で見ると、紅は再び少女の霊へと視線を移す。

既に、少女の霊は、紅の足元近くまで迫っていた。赤黒い血にまみれた手で、動かない紅の足をがっしりとつかむ。

ぞっとする程に冷たい感触が、紅の足を痺れさせる。肌に直接ドライアイスを押し当てられているような感覚に、紅は思わず舌打ちをした。

この世の者ではない、死者の手に握られる感触。それは、決して気持ちの良いものではない。

紅の足元で、少女の霊が勝ち誇ったような笑みを浮かべている。爛れた顔を見せつけるようにして、カッと見開かれた瞳が紅を捉えた。

並みの人間であれば、今すぐにでもここから逃げ出していただろう。もしくは、完全に正気を失うか、硬直して動けなくなってしまうかだ。

ところが、そんな状況にあってもなお、紅は至って冷静に相手のことを見据えていた。腐っても、退魔師である赫の一族の末裔。この程度のことで、驚いて逃げ出したりする紅ではない。

「ハッタリはそこまでだ。いいかげん、正体を見せたらどうだ？」

最早、何の興味もないと言った口調で、紅は手にした小太刀を少女の頭に突き立てた。

「ぎぃぃぃぃっ！！」

ガラスを引っ掻いたような甲高い悲鳴が、夜の理科室にこだます

る。霊木刀の一撃を受けた少女の霊は、その頭から白い煙のようなものを上げて苦しみ悶えた。

「な、なにが起きてるってんだよ……」

あまりのことに、後ろで様子をうかがっていた田所が思わずこぼした。その間にも、少女の頭からは白い煙が立ち昇り、水をかけられた泥のように、全身が崩れてゆく。

やがて、その身体が全て青白い塊になってしまうと、それは徐々に四本の足を持つ生き物の姿へと変わっていった。

「なるほど……。狢(むじな)か……」

タヌキとも、アナグマとも取れる、奇妙な動物の形をした青白い物体。紅の一撃によって正体を晒したそれは、やがてゆらゆらと揺れながら、天井の隙間に吸い込まれるようにして消えて行った。

「終わったぜ」

田所達の方を振り向き、紅が感情のこもらない口調で言った。その声を聞き、不良達も初めて我に返った様子で紅を見る。

気がつけば、理科室は再び静寂に包まれていた。気のせいか、先ほどまで部屋に漂っていた、気持ちの悪い空気も消えている。

「あれが、噂の正体だ。残念だが、自殺した女の霊ってやつは、誰かの作った与太話みたいだったな」

自分の見解だけを簡単に述べ、紅は独り理科室を出る。後ろから

田所達が何かを言っていたが、そんなことはどうでもよい。

旧校舎に巣食う少女の怨霊。その正体は、実に下らないものだった。全てを祓ってしまった今となっては、旧校舎を覆っていた薄気味悪い気も感じられない。あるのはただ、老朽化した校舎の放つ哀愁にも似た木の香りだけだ。

「あの……。田所さん……」

状況を飲み込めず、澤井が田所の顔を覗き込むようにして尋ねた。しかし、田所はそんな澤井には目もくれず、去り行く紅の後姿を険しい表情のまま見つめていた。

※　※　※　※　※　※　※

犬崎家。

旧校舎から戻った紅を待っていたのは、多恵と皐月の二人だった。祖母の多恵はともかく、皐月まで一緒とはどういうことだろうか。まあ、霊木刀を返さねばならない手前、この場に居合わせてくれたのは幸いだが。

「おや。帰ったのかい、紅」

「ああ、たった今な。一応、五体満足な姿で帰って来れたぜ」

「それはなによりじゃ。まあ、座りなさい」

多恵に促され、紅も座布団の上に腰を下ろした。見ると、ちゃぶ台の上には酒の入ったとっくりと杯が置いてある。どうやら、多恵が皐月に勧める形で出した物のようだった。

「それよりも……例の学校やらには、何か出たのかえ？」

「まあな。最初は怨霊だと思ったが、ちょっと揺さぶりをかけてやったら、すぐに尻尾を出しやがった。古い建物になら大概は巣食ってる、狢の霊の類だったな」

「なるほどのう。まあ、お前さんのことじゃ。私は大丈夫だと思っておったがな」

「随分な自信だな。さては婆さん、あの場所に出る幽霊の正体、知っていたんじゃないだろうな」

「はて、何のことかのう？　私はただ、お前に退魔師として最初の試練を課してやったに過ぎんのじゃが……」

そう言う多恵の視線が一瞬だけ逸れるのを、紅は見逃さなかった。

恐らく、多恵は知っていたのだろう。あの旧校舎に巣食っている霊の正体も、それが今の紅の力でも十分に対処できるような存在であるということも。だからこそ、肝試しに向かう紅を止めることもしなかったに違いない。

そもそも、冷静になって考えれば、すぐに気づきそうなものだった。この土師見村に、立入るのも憚られるような穢れ地は存在しない。仮にそんな場所があれば、紅の祖父である臙良が真っ先に魔を祓っているはずである。

土師見第二中の旧校舎が、しがない動物霊達の住処になっていること。多恵はそれを知った上で、紅を向かわせたのだろう。本当に悪鬼と化した怨霊が相手ならともかく、悪戯好きの動物霊が相手なら、今の紅でも十分に祓える。皐月の道具を用いるという前提はあるものの、危険性は殆どない。

結局、あれこれと悩んでいたのは自分だけだったのか。妙な使命感に駆られて不良どもと旧校舎の探索に向かったが、それはあくまで多恵の掌で踊らされているに過ぎなかった。

真相が分かってしまえば、途端に緊張の糸も解れて来る。何やら色々と振りまわされたような気がして、一気に疲れが襲ってきた。

「悪いな、婆さん……。今日は、早目に寝かせてもらうぞ。雑魚相手とはいえ、初めて霊と戦ったんだ。霊傷(れいしょう)の類は受けていないが、さすがに少し疲れた……」

「おや、そうかい。だったら、布団は私の方で敷いておくよ。お前は先に、熱い風呂にでも入っておいで」

「あら、いいわね、紅ちゃん。なんだったら、私も一緒に入ろうかしら？」

先ほどまでは黙って酒を飲んでいた皐月が、途端に話に割り込んできた。見ると、その顔はかなり赤い。普段は冷静な美人を装っているが、今はその表情にもどこか締まりがない。

「勘弁してくれ、皐月さん。俺だって、もう小学生のガキじゃないんだ。風呂くらい、一人で入れるさ」

「だったら、今晩は私もこの家に泊まるから……一緒に添い寝してあげるってのは、どう？」

「だから、そういうのを止めてくれと言っているんだ。いくら俺が男だからって、いつも女の裸しか頭にないと思わないでくれないか」

「もう、面白くないわね、紅ちゃんは。折角、今宵は紅ちゃんの、記念すべき筆降ろしの日にしてあげようと思っていたのに……」

「もう、下ネタはいいかげんにしてくれ……。俺は、好きでもない女と一緒に寝るような趣味はない……」

そう言うと、紅は借りていた霊木刀を皐月に押しつけるようにして手渡した。そして、次に彼女の口から言葉が出る前に、そそくさと茶の間を後にする。

あのまま茶の間にいたら、それだけで疲労が増すばかりだ。こちとらは一仕事終えてきたばかりだというのに、酔った皐月の玩具にされてはたまらない。

（今日は、襖につっかえ棒でもして寝るか。いや、それこそ、部屋の中に鳴子でも仕掛けておいた方がいいかもしれないな……）

風呂場へと続く廊下を早足で歩きながら、紅は本気でそんなことを考えた。

あの、皐月のことである。下手をすれば、酔った勢いで本当に夜這いの一つでもしかねない。まさかとは思うが、念には念を入れておかないと、決して安心はできないだろう。

結局、幽霊よりも恐ろしい存在は、家で待ち構えていた女達であった。いつの世も、本当に怖いのは生きている人間の方だということだろうか。

万が一、皐月が自分のことを本気で襲ってきたならば、貞操を奪われる前に舌を噛み切って死んでやろう。その上で、自ら怨霊となって末代まで呪ってやる。

そんな物騒なことを考えながら、紅は脱衣所の扉を開けて、上着を脱ぎながらその中へと入っていった。

〜 参ノ刻　逆恨 〜

土曜日の午後というものは、紅にとっては得てして暇なものだった。

県立の中学に通っている紅には、当然のことながら土日は休みである。朝、祖父から言いつけられている修業を一通り終えたところで、待っているのは至極退屈な日常だ。

学校の宿題なども、紅にとって然したる問題ではなかった。もとより、文武両道で育てられてきた紅のこと。よほど大量の課題でも出されない限り、小一時間もあれば片づけられる。

何をするにしても、中途半端な昼下がり。そんな時、紅は決まって、幼き日に秘密基地として使っていた防空壕の跡地に向かった。

秋とはいえ、未だ残暑の厳しい日もある。そんな日は、壕の中は絶好の休息場所だった。周りには誰もおらず、紅の嫌う強い太陽の光もない。この村の中で、紅が本当の自分をさらけ出せる数少ない場所だ。

土壁に寄りかかるような形で、紅は頭の後ろに腕を組んで腰を下ろした。壁と床を伝わって、ひんやりとした冷気が身体を冷ます。外から聞こえて来る、セミたちの最後の合唱が心地よい。

ふと、壕の中にある柱に目をやると、そこには数本の小さな傷があった。自然に生まれたものではない。明らかに、誰かが意図してつけた印だ。

柱の傷を見ながら、紅は独り幼き日のことを思い出す。まだ、紅が朱音と一緒に秘密基地で遊んでいた時のことだ。

その日も、今日のように残暑の厳しい日だった。

いつものように秘密基地へとやってきた紅は、朱音のために色々な生き物を捕まえては見せた。生き物だけでなく、時には花や木の実など、とにかく朱音が興味を示しそうな自然の物は何でも採って来た。

祖父の教えによって鍛えられた自分とは違い、朱音は生まれつき身体が弱い。本来であれば、日中は家の中で静かに過ごしていなければならないはずだ。

しかし、その反動からか、朱音の野山に対する好奇心は極めて強かった。遊び相手が紅しかいなかったということもあるが、それでも朱音の自然を愛でる気持ちは本物だったと思う。

また、身体が弱いことを気にしてか、朱音はよく紅に自分の成長を自慢した。髪が少し伸びた、背が少し高くなった、などという些細なことを逐一紅に報告してきた。そして、そのことで紅に誉められると、満面の笑みを浮かべて喜ぶのだ。

防空壕にある柱の傷は、そんな朱音のことを想って紅がつけたものである。朱音の成長に合わせ、その身長を柱に刻む。ただ、それだけのことだったが、朱音は記録が伸びる度に紅の腕を取って大喜びしていた。

「やっぱり、ここにいた！！」

壕の中に、突然、耳慣れた声が響き渡る。その声のする方へと顔を向けると、紅にとってはお馴染となった赤い瞳の少女の姿があった。

「なんだ、朱音か。ここにはもう、来たら駄目だって言われていただろう？」

「そうなんだけど、今日は特別なの。そういう紅君こそ、何やってたの？」

「いや……。俺はただ、昔のことを思い出していただけさ。あの柱に傷をつけた時は、二人ともガキだったなぁ、なんて思ってな」

「へえ、そうなんだ。でも、ちょっと嬉しいな。紅君も、ちょうど私のことを考えていてくれたなんて……」

そう言って、朱音も紅の隣に腰を下ろす。

朱音が防空壕の秘密基地を離れなければならなくなったのは、彼女が小学校五年生の時だった。

その年、朱音は酷い風邪をこじらせて、しばらく入院が必要になった。なんでも、肺炎まで併発してしまったらしく、本当に命の危険があったらしい。程なくして朱音は退院したが、彼女の入院は秘密基地での遊びが終わりを告げるきっかけとなった。

もとより、身体の弱い朱音のこと。彼女の母は今まで以上に朱音を心配し、とうとう彼女が外で遊ぶことを禁じてしまった。朱音は反対したものの、それでも日中の強い紫外線が、彼女の身体に良いはずがない。幼少より鍛えられた身体を持つ紅とは違い、朱音は赫

の一族の血を引く者の中でも、とりわけ病弱な身体の持ち主だった。

もう、紅とは一緒に遊べない。そのことは、朱音の心に深い喪失感を抱かせた。

朱音は自然が好きだった。森で生きる鳥や虫、木々や草花の姿を見ることで、その美しさや素晴らしさを人一倍感じる少女だった。朱音にとって、紅と一緒に野山へ出かけることを禁じられるのは、まさしく拷問に等しい。

そんな朱音に対し、紅は彼女のために何かしてやりたいと考えた。悩んだ末、紅はなけなしの小遣いをはたき、青い小さなポラロイドカメラを買った。

野山に暮らす生き物を、無闇に乱獲するような真似はできない。いくら朱音に見せたいからといっても、そんなことをすれば、なにより朱音自身が悲しむはずだ。

だからこそ、紅はせめて写真として、野山の姿を朱音に見せてやりたいと考えた。四季折々の森と山、そしてそこに暮らす生き物達の変化を、写真を通じて彼女に伝えたいと考えたのだ。

結果は、思いのほか好評だった。

本物の生き物ではないとはいえ、朱音は紅の撮った写真を喜んで部屋に飾っていた。特にお気に入りの物は、自分でアルバムを用意して大切に保管するようにもなった。一緒に外で遊ぶことはできなくなったものの、二人の繋がりが完全に断たれたわけではなかった。

今、そのカメラは、朱音の首から下がっている紐の先にある。

紅が中学に上がる時、朱音は紅のカメラを欲しがった。どうやら紅が写真を撮って見せたことに影響を受け、自分でも写真を撮りたくなったらしい。

自分の足で山に出かけることは出来なかったが、それでも朱音は、自宅の庭や近所の空き地に咲いた草花をフィルムに収めていった。また、庭に鳥のエサ台を作り、そこに集まる野鳥を撮影したりもした。以来、そのカメラは朱音の物として、今でも出かける際には肌身離さず持っている。

「ねえ、紅君……」

青い、玩具のようなカメラに手をかけて、紅の隣に座る朱音が口を開いた。

「今日は久しぶりに、紅君に写真を撮ってもらいたいな」

「写真？　また、野鳥かなにかでも撮るのか？」

「そうじゃなくて……。あっ、そうだ！！」

何かを思い出したように、朱音はスッとその場で立ち上がった。そして、壕の奥にあるガラクタ置場の中から、何やら薄汚れた二つの茶碗を取り出した。

「ちょっと、そこで待っててね。すぐ戻るから」

そう言って、朱音は壕の外へと出て行った。いったい、彼女は何を考えているのだろうか。いまひとつ状況が飲み込めず、紅は首を

傾げながらも外の様子に目をやった。

壕の外では、朱音が何かを摘み取っているようだった。入口の近くに生えている、草の実でも集めているのだろうか。

程なくして、朱音が両手に茶碗を持って帰って来た。その茶碗の中には、なにやら赤い小さな実が盛られている。量はそこまで多くはないが、これはいったい何のつもりなのだろう。

「お待たせ、紅君」

「ああ。しかし……いったい、何だそれは？」

「紅君、忘れちゃったの？　小さい頃、よくこうやって、一緒に御飯事したじゃない」

「そういえば、そんなこともあったな。確か、赤飯の代わりに使ってなかったか？」

まだ、二人が小学校に上がったばかりの頃の話だ。

壕の入口の周りに生えている草は、夏の終わりから秋の中頃にかけて、小さな赤い実をつけた。その赤い実を、朱音はよく赤飯の粒に見立てて茶碗に盛っていたのだ。

「ねえ、紅君……」

久方ぶりに盛られた飯事の赤飯。それを紅の前に置くと、朱音はその場に脚を折って正座した。

「あの、ね……。えっと……」

両足を閉じたまま、朱音はなにやら口ごもりながら言った。その様子は、いつもと違ってどこか落ち着きがない。体をそわそわと動かして、視線も紅と合わせようとしない。心なしか、その顔にも赤味がさしている気がする。

「どうした、朱音。言いたいことがあるなら、はっきり言えよ」

「うん……。その……今朝、お母さんから言われたんだけど……」

相変わらず、朱音は紅と視線を合わせようとしない。どうにも次の言葉を口にしづらいようだったが、紅はあえて、朱音が自分の口から何かを言うのを待った。

「あのね、紅君……。私、今朝……本当の意味で、女の子になったんだ……」

「えっ……！？」

「だから……初めて、女の子の日が来たんだよ！！　お母さんに教えてもらって、分かったの！！」

既に、朱音の顔は真っ赤に染まっていた。いつもは雪のように白い肌が、紅の目から見てもはっきりと分かるくらい紅潮している。

朱音が言わんとしていることが何なのかは、さすがに紅も気づいていた。だが、分かったところで、次にかける言葉が見つからない。こういった時、男である自分は相手にどんな言葉をかけてやるべきなのか。残念ながら、彼の今までの生活において、その答えになり

そうなものを知る機会はなかった。

「なあ、朱音……。もしかして、この茶碗の実は……」

「うん。あの時と同じ、お赤飯の代わりだよ。食べられない偽物で悪いけど……紅君には、私が女の子になったこと、ちゃんとお祝いしてもらいたかったから……」

未だ、照れ臭そうにしながらも、朱音は自分の想いを紅に告げた。そして、呆気に取られている紅を他所に立ち上がると、再びその横に寄り添うようにして腰を下ろす。

「あ、朱音……！？」

朱音の手が、紅の手の上にそっと置かれた。肩をつけるようにして、朱音は紅に体重を預けてくる。

「ねえ、紅君。さっきのお願いだけど……やっぱり、なかったことにしてもいいかな？」

「さっきのお願い？」

「紅君に、写真を撮って欲しいって言ったやつ。あれ、私の写真を撮って欲しいって意味だったんだけど……」

「朱音の写真を？」

「そうだよ。でも、やっぱり、紅君と一緒に写りたいから。ほら、こうすれば……」

朱音の頬が、紅の頬につかんばかりに近寄った。そして、首から下げていたカメラを片手で持つと、二人の顔がぎりぎり入るくらいの距離に掲げ、躊躇うことなくシャッターを切った。

フラッシュの眩い光が、一瞬だけ紅の視界を奪う。数秒の間、紅には世界が真っ白に見えた。

二、三回ほど瞬きをし、紅は自分の視力が戻るのを待つ。日中の日差しもそうだったが、どうにも強い光というものは苦手だ。

気がつくと、隣では朱音がカメラから出てきた写真を手にしていた。朱音はしばらくの間、その写真を大事そうに胸元に抱えていたが、やがて写真が出来上がったことを知り、それを紅に手渡した。

「はい、これ。この写真、紅君が持っていてくれないかな。その……今日の、記念ってことで」

「記念って……。お前なぁ……」

「あっ……。もしかして……やっぱり、迷惑だった？」

「いや……。別に、そんなことはないが……」

それ以上は、上手い言葉が見当たらなかった。何やら気まずい雰囲気になり、紅も思わず朱音から顔を逸らしてしまう。

いったい、自分は何を照れているのだろうか。朱音とは幼い頃からの付き合いだったが、どちらかと言えば、妹のような存在として見ていた。

そんな朱音が、今日はなぜか違って見える。なんというか、近くにいると、妙にこちらの方が彼女のことを意識してしまうのだ。

（馬鹿だな、俺は……。相手は朱音なんだぞ！？）

自分と朱音の間には、なんとも言えない気まずい雰囲気が漂っている。今まで朱音を女として意識したことなどなかったのに、この気持ちはなんだろうか。

頭の中に広がる雑念を振り切るようにして、紅は大きく息を吸い込んだ。それをゆっくりと吐き出して、なんとか気持ちを落ちつけようと試みる。

これはきっと、何かの間違いだ。朱音がいきなり変な話を振って来たから、自分もおかしくなったのだ。きっと、そうに違いない。

このままでは、こちらの方が先に息が詰まってしまう。そう思った紅は、朱音に向かって唐突に話を切り出した。特に何か話したいわけでもなかったが、とにかく今は、話の流れを変えたい一心でいっぱいだった。

「なあ、朱音。昨日のことなんだが……」

「昨日？」

「ああ、そうだ。昨日、学校の不良共と一緒に行った、土師見第二中の旧校舎。そこの理科室なんだが……本当に、幽霊の類が出やがった」

「えっ、嘘！？　それじゃあ、噂は本当だったの……」

「いいや、そういうわけじゃない。確かに噂通りの姿をした霊は現れたが……あれは、狢の類が化けた物だった」

自分から、向こう側の世界についての話を朱音にする。はっきり言って、あまり好ましくないことだとは分かっていた。朱音の母親が赫の一族の力を嫌っている以上、朱音が向こう側の世界について興味を持つことは、決して良くは思われないはずだからだ。

しかし、今の状況を考えると、紅には他に選択肢が見当たらなかった。まあ、昨日の旧校舎であった除霊話をするくらいならば、それほど罪はないだろう。呪術や退魔術の内容を、具体的に教えるのはさすがにまずいが。

「狢かぁ……。それって、タヌキさんのことだよね」

「そうだな。タヌキとか、アナグマとか……とにかく、そういった種類の動物が霊になったもんだ。悪戯が好きで、相手の最も怖がりそうな物に化けて、人間を驚かすような低級霊さ」

「へえ、そうなんだ。でも、相手がタヌキなら、私も見てみたかったかも」

「いや、止めておけ。確かに正体はタヌキの霊かもしれないが、あいつが化けた怨霊の姿は、御世辞にも可愛いなんて言えるもんじゃない」

昨日の霊は、自殺した少女の怨霊などではない。狢が人を化かすという話は、昔からよくある話でもある。が、狢の化けたその姿だけは、噂にある少女の霊の姿と寸分狂わぬものだった。内臓丸出し、

顔も焼け爛れた姿でこちらに這って来る様は、悪趣味などという言葉で片付けるには、あまりにもグロテスクだ。

「まあ、なんにしても、ちょっとお灸を据えてやったら逃げて行ったからな。これで、当分は妙な悪戯もできないはずだ」

「ふうん……。やっぱり、紅君って凄いんだね。私の知らないこともいっぱい知ってるし、私のできないことも、なんでも簡単にやっちゃうし……」

「別に、それほど誉められるようなことをしているわけでもないさ。向こう側の世界の連中となんて、できれば関わり合いにならない方がいい」

それだけ言うと、紅は両手を頭の後ろに組んで、そのまま静かに目を瞑った。朱音には悪いと思ったが、やはり日中は体に力が入らない。それに、これ以上は、話の種も持ちそうになかった。

しばらくすると、壕の中に、紅の軽い寝息が聞こえてきた。その横では、朱音が紅に寄り添うような姿勢のまま、彼の体に自分の体重を預けている。

既に熟睡してしまっているのか、紅は朱音が体を預けてきていることに気づいていない。朱音はそんな紅の寝顔を、そっと見つめながら呟いた。

「紅君……。私はずっと、紅君の側にいるよ……」

※　※　※　※　※　※　※　※

週明けというものを楽しみにしている人間は、いったいこの世界に何人程いるのだろうか。学校にしろ、仕事にしろ、休みが終わって再び忙しい一週間が始まることを考えると、憂鬱にならない方がおかしいというものだ。

土師見第三中学の屋上で、田所隆二はいつもの如く、仲間たちと煙草をふかしながら屯していた。
権田、澤井、そして柏木。彼の周りにいるのは、代わり映えのないお馴染の不良仲間達だ。

「ったく……。この前の金曜は、とんだ失敗だったな」

煙草の火を屋上の床に押し付けて、田所はじろりと仲間達の顔を見回しながら言った。

先週の金曜日、田所は犬崎紅を陥れるために、旧校舎の肝試しを計画した。先に校舎へ忍び込ませておいた兼元一也を使い、幽霊の格好をさせて紅を脅かす。紅が除霊の真似ごとを始めれば、そのことが紅の正体を暴く恰好の材料になると考えてのことだ。

しかし、実際には、田所の計画はいとも容易く崩れ去ってしまった。

兼元を待機させていた理科準備室。そこで、何が起きたのか、田所には分からない。だが、本来であれば幽霊など信じていないはずの兼元が、異様なまでに怯えて逃げ出して来たのだけは確かだ。そして、噂通りの姿をした少女が目の前に現われ、それを紅が追い払ったという現実も。

「おい、お前ら。この間の金曜のことだが……お前らは、あれをどう思う？」

田所が、横にいる澤井の方を見て尋ねた。唐突に話を振られ、澤井は慌てた様子で田所に口を合わせる。

「えっ、俺っすか……！？　いや、まあ……その……なんていうか……」

「はっきりしないやつだな。何が言いたいんだ、澤井？」

「う……。別に、何でもないっすよ……。ただ、あの理科室で見たもんが何なのか、俺にはちょっと分からないってだけで……」

「なんだ、てめえ。まさか、お前まで、幽霊がどうしたなんていう話を信じるようになったんじゃないだろうな」

「い、いや……。それは……」

「ふん、まあいいさ。どっちにしろ、犬崎の野郎には借りを返さなけりゃならないからな。俺達の計画を台無しにしてくれた落とし前、しっかりとつけさせてやる」

そう言うと、田所は歯噛みするような表情で立ち上がり、無言のまま後ろにあった屋上のフェンスを殴りつけた。

ガシャン、という音がして、フェンスの役割を果たしている鉄柵が揺れる。仲間の手前、いつもは苛立ちを表に出すことの少ない田所だったが、今日は自分の感情を抑えることができそうになかった。

旧校舎の肝試しで現れた、女の幽霊と思しき者。確かに見た目は噂にあった少女の霊に似ていたが、それでも田所は、未だ霊魂というものの存在を信じようとはしなkった。

幽霊など、所詮は村の年寄りの妄想が生み出した戯言だ。呪いだの、祟りだのと言った話は、最初から信用していない。

金曜の件にしても、犬崎紅が何か仕組んでいた可能性もある。いや、きっとそうに違いない。そうでなければ、あそこまで都合よく噂通りの幽霊が現れるはずがない。その結果、こちらの計画は総崩れになり、犬崎紅を余計に調子に乗らせることになってしまった。

それだけでなく、先に送りこんでおいた兼元。旧校舎での出来事がよほどショックだったのか、今ではすっかり腑抜けになってしまった。当然、チームの参謀としての姿は面影もなく、今日も屋上の集まりには参加していない。

何を仕込んだのかは知らないが、犬崎紅は妙なトリックで幽霊騒ぎを演出したに違いない。幽霊の存在を信じていない田所には、それ以外の考えが思いつかなかった。

このままでは、自分は犬崎紅に頭が上がらないままだ。そればかりか、こんな田舎の村の中学一つ締められず、いずれは周りの人間からも舐められてしまうだろう。

最早、手段を選んでいる場合ではない。そう思った田所は、隣で寝転んだまま空を見上げている柏木を呼んだ。

「はぁ……。なんすか、先輩……」

「相変わらず、マイペースな奴だな、お前は。まあ、そんなことは、どうでもいい」

柏木は、田所のチームの中でも極めて残酷な性格の持ち主である。まだ一年だったが、そんな柏木ならば、今の自分の考えを理解できるに違いない。つかみどころのない性格をしていたが、少なくとも田所は、他の仲間よりは役に立つと考えていた。

「お前の性格を見込んでの話だ。あの、犬崎紅に落とし前をつけるため、少し力を貸せ」

「俺がっすか？　まあ、別にいいっすけど……。いったい、何をすればいいんすか？」

「なあに、簡単なことだ。お前は犬崎の餌になるものを、この屋上まで運んで来ればいい。方法は、お前の好きにしろ」

「了解っす。で、その間、先輩は？」

「俺は、犬崎のやつを呼び出す。あんなやつだが、餌さえあれば、簡単におびき寄せることもできるはずだからな」

田所の口が、にやりと笑みの形に歪んだ。それを見た柏木も、同様に薄笑いを浮かべる。

いつもは周りを威嚇するような顔をしている田所が、こんな笑い方をする時。それは、彼が何かとてつもなく残酷な遊びを始める前触れだ。そのことを知っているだけに、柏木は早くも自分が昂奮してきているのを隠しきれなくなっていた。

※　※　※　※　※　※　※

犬崎紅が田所隆二からの呼び出しを受けたのは、その日の昼休みのことだった。

昼休み、いつもであれば、紅は独り教室で昼寝をして過ごしている。昼間、それも人の多い場所では、どうにも気力が湧いてこない。そのため、例え上級生からの呼び出しであっても、適当に流して無視を決め込んでしまうことが多かった。

だが、その日に限って、紅は田所の呼び出しに応じざるを得なかった。田所が、紅を呼び出す際に言った一言。「来なければ、お前の大切な者を傷つける」という言葉が、どうにも引っかかったのだ。

上級生とはいえ、所詮は不良の戯言。無視してしまえばそれまでだが、万が一ということもある。それに、田所の言っていた言葉に心当たりがないわけではなかった。

いつもは立入禁止とされている、学校の屋上。不良グループの溜まり場にもなっているその場所へ、紅は田所に案内される形でついていった。

鍵の壊れた、外へと続く扉が開けられる。残暑の厳しい日差しが、一瞬だけ紅の目を刺した。

「わざわざ御苦労だったな、犬崎。まあ、とりあえず表に出ろよ」

「こんなところに呼びつけて、いったい何の用だ。まさか、俺と殴り合いの喧嘩でもするつもりか？」

「いや、そんなつもりはねえよ。ただ……あれを見て、お前がどんな顔するのか知りたかっただけさ」

田所の指差すその先に、紅は自分の良く知る少女の姿を見た。白金色の髪と、白い肌。血のように赤い瞳が、なにかを訴えるようにしてこちらを見ている。

「朱音……」

屋上にいたのは、朱音だった。給水タンクの影になっている場所で、権田と澤井の二人に、両手を後ろ手にされて押さえつけられている。

「あれ、お前の親戚なんだってなぁ。なるほど……確かに良く似てやがる」

「貴様……。朱音に何をした！！」

「まだ、なんにもしちゃいねえよ。柏木のやつが、『犬崎に手を出されたくなかったら、屋上まで来い』って言ったら、何も考えずにのこのこ出てきやがった。まったく、おめでたい頭をしている女だぜ」

田所が、紅と朱音を交互に見比べながら笑った。

朱音を柏木に連れ出させたのは、田所の指示だ。もしも朱音がこちらの指示に従わない場合は、強制的に拉致することも考えていた。

それだけに、こうも事が上手く運ぶとは、まったくもって愉快極まりない。

「貴様ら……。用があるのは、俺だけのはずだろう。朱音は関係ない！！」

「確かにな。だが、お前をおびき寄せるための餌にはなる。それに……なまじお前だけ呼び出しても、妙な警戒をされたら困るんでね」

田所の顔に、見るからに邪なことを考えていると分かる薄笑いが浮かんだ。相手の意図が分からず、思わず拳を握って構える紅。

次の瞬間、鈍い音と共に、紅の頭を激しい衝撃が襲った。視界が揺らぎ、紅は思わず頭を抑えて膝をつく。

「へえ……。まだ、倒れないんだ。意外と丈夫なんっすね、犬崎先輩って……」

後ろから、何やらこちらを嘲るような声が聞こえてきた。辛うじて首だけを後ろに向けて振り向くと、そこには金属バットを手にした柏木が立っている。顔にはにやけた笑みを浮かべ、紅のことを見下ろしていた。

「不意討ちか……。喧嘩をしたければ、正面から向かってきたら……」

柏木を睨みつけ、紅がそう言おうとした時だった。

金属バットが、今度は横薙ぎに飛んできた。側頭部を強打され、紅の身体が屋上の床に転がる。後ろでは朱音が何やら叫んでいるよ

うだったが、耳の奥が痺れて聞き取れなかった。

「あっははは！！　今度のは、さすがに効いたみたいっすね。でも、この程度じゃ終わんないっすよね、先輩？」

柏木は笑いながら言っていたが、紅は答えなかった。いや、正しくは、答えられなかったと言った方がよい。

金属バットで耳の横を殴られて、三半規管が完全にやられていた。立ち上がろうにも、手足に力が入らない。その上、焦点も定まらず、左耳も完全に聞こえなくなっている。

相手が動けないのをいいことに、柏木は手にしたバットを持って、紅の頭にその先を押しつけた。そして、例のにやけた笑みを浮かべたまま、紅の腹を力任せに蹴り飛ばした。

「がはっ……」

内臓にめり込むような鋭い一撃が、紅の腹に直撃した。つい先ほど、給食を食べたばかりだというのに、早くもそれが喉の奥から逆流してきた。

「どうしたんすか、先輩？　少しは抵抗してくれないと、面白くないっすよ？　こんな年下相手にいいようにされて……もしかして、先輩ってMなんすか？」

腹と、胸と、そして最後には顔まで蹴り飛ばし、柏木は小馬鹿にしたような口調で言い続けた。しかし、その一方で、決して急所を蹴ることはない。金属バットを手にした腕も、今はだらしなく垂れ下がっているだけだ。

まるで、初めて与えられた玩具を扱うようにして、柏木はへらへらと笑いながら紅を蹴る。最後には、顔や手足の区別なしに、その身体を何度も踏みつけた。

子猫がネズミをいたぶり、幼児が昆虫を殺して遊ぶように、柏木は紅をいたぶった。彼にとって、暴力とは遊びの延長に過ぎない行為だ。一撃で相手を倒すことなどはせず、可能な限り、相手を痛めつける。そうすることで相手が苦痛に呻く表情を眺めている時、柏木は他の何をしている時よりも満ち足りた感覚に支配された。

「もう……やめてよ！　紅君が、あなた達に何をしたって言うの！！」

とうとう、見ているのが耐えきれなくなったのだろう。権田と澤井に押さえつけられたまま、朱音が柏木に向かって叫んだ。だが、柏木はそんな朱音に、さも鬱陶しいと言わんばかりの顔を向けて睨みつける。まるで、遊びを邪魔された子どもが、母親に反抗するかのような目つきをして。

「君、ちょっとうるさいよ。こっちはお楽しみの最中なんだから、邪魔しないでくれないかなぁ……」

「お楽しみって……。紅君に暴力を振るうのが、あなたの遊びなの！？」

「だから、そういうのがウザいって言ってんだよ」

再び、柏木が朱音を睨む。その足を紅の頭に乗せたまま、どんよりと濁った目で権田と澤井に視線を送った。

「権田先輩、澤井先輩……。そいつ、黙らせてくれませんか？　なんだったら、ここで犯っちゃってもいいかもしれませんよ？」

およそ、中学生の言う言葉ではない、あまりに過激な発言。さすがの権田と澤井も、柏木の言葉をどう受け取って良いのか迷っているようだった。

「もう、その辺にしておけ、柏木。俺は別に、犬崎をお前の玩具にするために呼んだわけじゃない」

最後に口を開いたのは、田所だった。今までは傍観しているだけだったが、ここにきて、彼は何故か柏木の暴走を制止するような真似に出た。

「まあ、田所先輩が、そう言うんならね……」

柏木も、紅の顔から足をどけて引き下がる。もっとも、あくまで飄々とした態度は崩さずに、遊びに飽きた子どものような顔をして歩いている。反省や後悔などという言葉は、彼の辞書には無いようだった。

「さあて……。お楽しみはこれからだぜ、犬崎……」

既に、満身創痍となった紅の胸倉をつかみ上げ、田所は紅の身体を引きずるようにしてフェンスの側まで持っていった。そして、そのまま紅の身体をフェンスの支柱に叩きつけると、後ろにいる柏木に目で合図をする。

田所の指示で柏木が持って来たのは、一本のロープだった。田所

はそれを柏木から受け取ると、紅の両手を後ろ手にしてフェンスの支柱に縛り付けた。

「き、貴様……。なんの……つもりだ……」

既に、紅に抵抗するだけの力は残っていなかった。なんとかそれだけ口にしたものの、口の中が切れていて、上手く喋ることもできなかった。

「なあ、犬崎。この前の肝試しでは、随分と世話になったなぁ。だから、今日はこの俺が直々に、お礼をしてやろうっていうんだよ」

「お礼……だと……」

「そうさ。お前、男にしては、少し身体が生っ白いからな。屋上で身体を焼けば、ちっとは男前が上がるんじゃねえか？」

田所の顔が、再び笑みの形に歪んだ。その笑顔の裏にある企みを知り、紅の背筋を始めて冷たいものが走った。

アルビノである紅は、先天的にメラニン色素を持っていない体質だ。そのため、日中の直射日光は、彼の肌にとって天敵となる。特に、紫外線は身体に悪い。

普通であれば、太陽光に含まれる紫外線を受けたところで、せいぜい軽く日焼けする程度である。しかし、紅のようにメラニン色素を持っていない人間は、単に皮膚が赤く腫れ上がるだけだ。熱中症にも陥りやすく、場合によっては死に至る。

田所は、当然ながら紅の身体のことについても知っていた。否、

知っていたというよりは、あの肝試しの後で調べたといった方が正しいだろう。

犬崎紅にお礼まいりをするために、柄にもなく村の図書館でアルビノについて調べた。そこで分かったのは直射日光に弱いという程度の情報だったが、田所にしてみれば十分だった。

九月に入っているとはいえ、その日は残暑も厳しかった。真昼の太陽は容赦なく屋上を照らし、紅の身体を徐々にだが確実に侵食して行く。

支柱に縛り付けられてから数分も経たない内に、紅の顔は早くも赤くなってきた。体温が凄まじい速度で上昇しているのが、紅自身にも分かる。

呼吸が荒くなり、額から流れる汗が頬を伝って下に落ちた。目の前の空間が歪んで見え、少しでも気を抜けば、そのまま意識を失ってしまいそうだった。

「へえ……。なかなか頑張るじゃねえか。まあ、辛くなったら、いつでも助けを呼んでくれて構わねえぜ。田所様、助けて下さいってな。そうしたら、すぐに縄を解いてやるよ」

田所が、紅の前で煙草をふかしながら言った。口に含んだ灰色の煙を露骨に紅の方に向けて吐き出して、にやにやと下品な笑みを浮かべている。

「おい……」

煙が切れたところで、今度は紅が口を開いた。その声は掠れる程

に小さかったが、それでもはっきりと田所に耳に聞こえた。

「貴様ら……」

「なんだぁ、犬崎？　さっそく、許してくれって言う気になったか？」

「朱音には……絶対に手を出すな……」

紅の赤い瞳が、大きく見開かれる。既に意識は朦朧としていたが、その瞳はまだ死んではいなかった。

「もし、手を出したら……貴様らを……殺す……」

今度の言葉は、田所以外の者にもはっきりと聞き取れた。

そこにあるのは、何者にも屈することのない強い意志。田所達になく、紅にはある、絶対的に越えられない壁だ。

あれだけ徹底して痛めつけられ、更には真昼の炎天下に晒されてもなお、紅の心は折れてはいなかった。だが、その事実は、同時に田所の精神を更に逆撫ですることとなる。

「この期に及んで、女の心配か。なるほど……さすがに俺も、ちょっとは感動したぞ、犬崎」

口ではそう言っていたが、田所は明らかに怒りを隠しきれない表情で紅に迫った。権田も澤井も、それに柏木でさえも、その様子をただ後ろで見守っている。

田所があんな顔をする時は、既に冷静な思考ができなくなった証拠だ。それを知っているだけに、下手に口を出してとばっちりを食らうのはごめんだと思っている。

「なあ、犬崎。俺を感動させてくれた御褒美だ。さすがに、この太陽の下じゃあ暑いだろうからな……。ちょっと、涼しくしてやるよ」

田所の手が、紅の足元に伸びた。その手には、いつの間に取り出したのか、先ほど紅の手を縛ったのとは別のロープが握られている。

上履きと、それから靴下も脱がせ、田所は紅の脚も支柱に縛り付けた。

支柱の根元は、金属で覆われるような造りになっていた。真昼の日差しを受けて十分に熱くなった金属板が、紅の足の裏を容赦なく焼く。さすがに、これには耐えられず、紅は苦悶の表情を浮かべて呻くしかなかった。

「おやおや……。涼しくしてやるつもりが、逆にもっと暑くなっちまったみたいだな。天然のホットプレートで焼かれる気分はどうだ、犬崎よぉ」

白々しくも、そんな言葉を紅にぶつける田所。紅の苦しむ姿を見て、柏木と共に下品な笑い声を上げている。

その間にも、温められた金属板は紅の足を焼き続けた。じわじわと、徐々に痛めつけるようにして、熱が肌を侵食してゆく。

刺すような痛みと痺れるような痛み。それらが交互に襲い、気が狂いそうだった。真昼の日差しに照らされ、意識は当に彼岸の淵に

旅立ちそうになっている。が、しかし、足の裏に走る痛みは、否応なしに紅の精神を現実に引き戻す。

いっそのこと、このまま気絶してしまえたら、どれほど楽だろうか。ふと、そんな考えが頭をよぎった時だった。

「やめて！　お願いだから、もうやめて！！」

朱音が泣きながら叫んだ。

先ほどから、彼女は自分の目の前で、紅が一方的に痛めつけられる様を見せつけられていた。

自分が柏木の言葉を真に受けて屋上まで来なければ、紅はこんな目に合わずに済んだはずだ。自分の姿を見て頭に血を昇らせなければ、田所達など瞬く間に叩き伏せてしまったはずだ。

全ては自分の迂闊な行動が原因。そのせいで、紅は抵抗することさえも許されず、今も執拗に田所達による責め苦に苛まされている。

恨んでくれた方が、どれだけマシだっただろう。憎んでくれれば、どれだけ気が楽になっただろう。自分は、そうされても仕方ないだけのことをしてしまった。紅に拒絶されても、誰も文句が言えないほどに迷惑をかけてしまった。

だが、それにも関わらず、紅はこの期に及んでも、まだ自分のことを心配してくれている。田所達の脅しにも屈せずに、自分に手を出したら殺すとまで言った。

「酷い……酷いよ……。どうして、こんな酷いことが平気で出来る

の……？」

朱音の瞳から零れ落ちた大粒の雫が、屋上の床に落ちて濡らした。そんな朱音の顔を見て、さも鬱陶しそうな顔をしているのは柏木だ。

彼としては、この残酷なショーを楽しむことにしか興味がない。女の涙など、ショーを興醒めさせる以外の何物でもなかった。

柏木が、不快感を露わにしたまま朱音に迫る。手加減という言葉を知らない柏木にとって、女だからといって容赦するという考えはない。右の拳を握りしめ、それを朱音の顔に叩き込もうと振り上げた。

――――殴られる！！

直感的にそう思い、思わず目を伏せる朱音。しかし、振り上げられた柏木の拳を止めたのは、以外にも彼の後ろにいた田所だった。

「止めておけ、柏木。そんな女を殴ったところで、なんの得もねえぞ」

手首をつかまれる形で拳を止められ、柏木が不服そうに田所を見た。上げた手のやり場をなくしたことで、不満が更に高まったようだ。

「でも……こいつ、さっきからウザいっすよ、先輩。そろそろ本気で黙らせた方がいいんじゃないっすか？」

「まあ、待てよ。それよりも、もっと面白いことがある」

田所が、柏木の肩に手を置いて言った。朱音を押さえつけている澤井にも目配せすると、三人で再び紅の前に立つ。朱音の腕を押さえるのは権田に任せ、澤井も田所と柏木の列に加わった。

「辛そうだな、犬崎。なんだったら、今度は俺達が冷やしてやろうか？」

紅の頬に指を食い込ませ、田所はその顔を強引に自分の方へと向けた。そして、空いている方の手でズボンのファスナーを降ろすと、隣にいる柏木と澤井の方を見ながら更に続ける。

「おい、お前達も少し手を貸せ。今から、犬崎の野郎の足を冷やしてやろうぜ」

紅の顔から手をどけて、田所がその場から一歩だけ下がる。そして、既に言葉さえ発せなくなった紅の足元に、豪快に小便をかけ始めた。

「あっはははははっ！！　どうだ、犬崎？　これで、少しは足元が涼しくなったんじゃねえか？」

聞いているだけで胸が悪くなりそうな声で、田所はひたすらに笑い続けた。見ると、柏木と澤井も、田所に追従する形で紅に小便をひっかけている。

それは、まさしく人の尊厳を完膚なきまでに奪い去る拷問だった。三人の不良達の小便が、紅の足元だけでなく、はいているズボンまでも濡らしてゆく。生温かく、不快な感触が紅の足全体に広がって

いたが、彼には抵抗することは許されなかった。

両手、両足を縛りつけられ、炎天下の日差しと熱い金属板によって身も心も焼き尽くされた。最早、風前の灯火となった意識の中で、辛うじて分かるのは朱音が無事ということだけだ。

「おら、どうしたよ、犬崎。悔しかったら、村のジジイやババアが言ってるみたいに、今すぐ俺達を呪ってみたらどうだ。できるもんならな！！」

田所は紅を挑発するようにして言ったが、紅はそれに対して何も答えなかった。

既に、逆らうだけの気力はない。呻く事も、叫ぶ事もできず、成されるがままに身を任せるしかない。今、自分が何をされているのか。それさえも分からなくなりそうだった。

目の前が、だんだんと白くなってきた。既に、体温は四十度近くまで上がっているだろうか。意識が徐々に朦朧とし、何も考えることができなくなってくる。

このまま自分は、成す術もなくなぶり殺しにされてしまうのだろうか。ふと、そんな諦めにも近い考えが紅の頭をよぎった時だった。

「ぎゃっ！！」

突然、屋上に悲鳴が響いた。その声に、紅の意識が一瞬だけ戻る。田所と澤井、それに柏木も、声のする方を振り向いた。

「あっ！　あの女……！！」

柏木が、慌てた様子で言った。その先では、権田が自分の脛を押さえ、痛みに耐えている姿があった。

権田の脛を蹴ったのは、どうやら朱音のようだった。さしもの権田も、脛だけは鍛えることができなかったらしい。なんとか片手で朱音の腕をつかんではいたが、それでも、一瞬だけ手を離してしまったのは失敗だった。

片腕が自由になったところで、朱音は身体を捻らせて権田の方を振り向いた。そして、自分の腕をつかんでいる権田の手に、渾身の力を込めて噛みついたのだ。

再び、権田の悲鳴が屋上に響く。予想になかった朱音の反撃に、田所達もしばし状況を飲み込むのが遅れてしまった。そんな彼らの隙を突き、朱音は一目散に屋上の出口へと駆けだして行く。

「くそっ！　逃がすな！！」

田所が、そう叫んだ時には遅かった。

その華奢な身体からは想像できないほど素早く、朱音は彼らの前から姿を消した。澤井と柏木が慌てて追ったものの、階段の踊り場まで出たところで悔しそうに歯噛みする。

朱音の身体は、既に階下の廊下へと抜けてゆくところだった。こうなっては、下手に追っても後の祭りだ。教員に見つかれば、それこそ厄介なことになる。

「くそっ！　逃げられたか……」

澤井の拳が階段の手すりを叩いた。後から出てきた田所と権田も、そんな彼の姿を見て、今の状況を察したようだった。

「田所さん、どうしますか？」

「どうするも何もねえよ。あの女に先公を呼ばれたら、それで全部お終いだ。残念だが、ここはさっさとバックレた方が身のためみたいだな」

「犬崎のやつは？」

「放っておけ。あのまま干からびたところで、俺の知ったことじゃない。それに、先公が来れば、後は勝手にやってくれんだろ」

先ほどまで紅を痛めつけていた時の高揚感は、既に無くなっていた。朱音に逃げられたことで、一気に興醒めしてしまったのかもしれない。

どちらにせよ、こうなってはどうしようもない。いつ教員がやって来るかも分からない場所に、長居は禁物だ。

屋上に紅を縛りつけたまま、田所達は、その場から逃げるようにして階段を駆け下りて行った。

※　※　※　※　※　※　※　※

人のいない学校の廊下を、自分の駆ける足音だけが響いている。

田所達から逃げ出した朱音は、そのまま全力で紅の教室を目指して駆けた。既に授業の始まっている時間だったが、そんなことは関係ない。今は一刻も早く、紅を助けるために誰かを呼ばねばならない。

いつもであれば、貧血の一つでも起こしていそうな程の全力疾走。鼓動が早まり、肩で息をしているにも関わらず、自分でも何故走り続けられるのかが不思議だった。

程なくして、紅のクラスの教室が見えてきた。扉に手をかけると同時に、それを乱暴に開け放つ。一瞬、教室の中にあった全ての視線が自分に向けられたが、そんなことに構っている暇はない。

「なんだね、君は？　今は、授業中で……」

教師の言葉など、朱音には耳に入らなかった。呼吸を整えることさえも忘れ、ひたすらに助けを求めた。

「紅君が……紅君が……！！」

言いたいことは他にもたくさんあったが、それ以上は言葉が出なかった。頭に血が昇り、自分でも混乱して何を言っているのか分からない。ただ、他の生徒達の冷たい視線だけが、自分に向けて送られてくるだけだ。

「先生……。紅く……いえ、犬崎君が、大変なんです……」

「犬崎が？　大変って、何かあったのかね？」

「はい……。屋上で、不良に呼び出されて……とにかく、大変なんです！！」

「屋上？　そう言えば、今日は姿が見えないが……。まさか、犬崎はサボりかね？」

慌てている朱音を他所に、授業をしていた教師はさも面倒臭そうな口調で返した。厄介事には関わりたくない。そんな日和見な考えが、露骨に顔に現われていた。

「なんだか知らないが、これ以上は授業の邪魔だよ。問題があるなら、後で職員室に来て話しなさい」

犬崎家の人間とは、深い関わりを持ちたくない。教師の言葉は、そう朱音に告げているようにも思われた。そして、それは教室にいる他の生徒達も同様である。先ほどは全員の目が朱音に向けられていたが、それが犬崎紅と関係があると分かった途端、急に全員が無口になって視線をそらしていた。

犬神筋。古来より、四国地方を中心に、人々より畏怖されてきた呪術師の家系。この土師見村においても、その扱いは変わらない。

魔を祓う力を持つと同時に、自ら魔を操り、人を呪うことさえも可能とされる赫の一族。そんな彼らに対し、昔も今も、人々の持つ印象は同じままだ。

人が赫の一族を頼るのは、自らに憑いた魔を祓う時だけである。それ以外は、極力関わりを持たないように、彼らとの間に見えない壁を作って過ごす。困った時だけ神頼みし、それ以外の時は、薄汚い穢れ物を見るかのような扱いで。

自分勝手で、自己中心的な考えだと朱音は思った。そんな忌まわしき因習に、この村は今でも縛られている。それは、学校においても同じことだ。今も、これほどまでに自分が助けを求めているのに、生徒も教師も一向に救いの手を伸ばそうとさえしない。

もう、この学校に自分達を助けてくれる者はいないのか。そう、朱音が諦めかけた時だった。

ガタッ、という椅子の動く音がして、教室の真ん中に座っていた生徒が立ち上がった。その音に、教室にいた人間の視線が一瞬だけ集まる。

「あなた……。犬崎君の親戚の子だったわよね？」

席を立ったのは、野々村萌葱だった。紅のいるクラスで学級委員を務め、何かと彼の世話を焼いていた少女だ。共に下校したこともあり、朱音も彼女とは面識があった。

生徒と教師が唖然とした表情で見つめる中、萌葱は机の間を抜け、朱音の前まで歩み寄った。そのまま朱音の顔を真っ直ぐに見据え、何やら張りつめた口調で尋ねてくる。

「狗蓼さん、だったかしら。犬崎君に、何があったの？」

「あの……。それが、不良に屋上まで呼び出されて、そこで……」

「ここで説明してもらうより、歩きながら話してくれた方が早そうね。悪いけど、それで構わないかしら？」

疑いの心を一切持たない、真剣な眼差しだった。朱音は萌葱に無言で頷くと、二人して教室の外に出た。

後ろから、何やら教師が叫んでいる声が聞こえて来る。しかし、そんな言葉は今の朱音と萌葱の耳には届かない。

犬崎紅を助けたい。その一心で、朱音の足は再び廊下を蹴った。萌葱もそれに続く。

本当は今すぐにでも屋上に向かいたかったが、そんな朱音を萌葱は制した。何はともあれ、まずは大人を呼ばねばならない。

教室にいた教師は頼りにならなそうだったが、職員室に残っている者の中には、話の分かる人間もいるかもしれない。それに、学級委員も務めている萌葱は、教師達からの信頼もそれなりに厚い。

自分と紅の味方は、この学校には誰もいない。そう思っていた朱音だったが、今ではそんな考えも、少しだけ違って思えるような気がしていた。

※　※　※　※　※　※　※

犬崎紅が目を覚ました時、そこには真っ白な天井が広がっていた。

（ここは……）

蛍光灯の眩い光に、思わず目を細めてしまう紅。どうやら自分は、保健室のベッドに寝かされているようだった。

「よかった……。紅君、気がついたんだ……」

耳元で、誰かが自分の名を呼ぶ声がした。その声のする方へ顔を向けると、そこにいたのは朱音だった。後ろには、なぜか萌葱の姿もある。

「お前達……」

二人の顔を見て、今までの記憶が唐突に蘇ってきた。早回しの映像を見ているかのように、頭の中に屋上での出来事が映し出される。

田所達の策にはまり、自分は屋上でリンチを受けた。朱音が隙を見て逃げ出した後、田所とその仲間たちもまた、自分を支柱に縛り付けたまま屋上を去った。

今、自分が保健室にいるということは、どうやら誰かの手によって屋上から助け出されたということなのだろう。助けてくれたのは、恐らく朱音と萌葱の二人だ。まあ、実際には他に、誰か手の空いている教員を呼んでいたのかもしれないが。

「お前達が……俺を助けてくれたのか？」

記憶が戻るにつれ、身体の節々に痛みも戻って来た。なんとか身体を起こしたものの、その瞬間に鋭い痛みが足の裏に走り、紅は軽く顔をしかめて唸った。

「駄目だよ、紅君。まだ、起きたりしたら……」

「いや、心配はない。こう見えても、爺さんに日頃から鍛えられて

いるからな」

「心配はないって……。それは、自分の足を見てから言ったらどう？」

朱音だけでなく、今度は萌葱も呆れた顔をして紅を見てきた。言われたとおりに足を布団から抜いて見ると、白い包帯が幾重にも巻かれていた。自分では大したことないと思っていたが、どうやら軽い火傷を負ってしまったらしい。

それだけでなく、気づけば服も体操着に着替えさせられている。田所達に汚されたズボンで保健室のベッドに寝るわけにいかないというのは分かるが、まさか朱音や萌葱が服を取り替えてくれたのだろうか。だとすれば、さすがに紅も少し恥ずかしかった。

「なあ……。ところで、俺の服なんだが……もしかして、お前達が着替えさせたのか？」

「なっ……！　馬鹿なこと言わないでよね！！」

萌葱の顔が、とたんに赤くなった。普段から生真面目な学級委員で通っているだけに、こういった話にはからきし免疫がない。

「犬崎君の服を着替えさせたのは、保険の先生よ。ちなみに、その体操着は学校の貸出品だからね。後で、ちゃんと洗って返しなさいよ」

「ああ、大丈夫だ。とりあえず、お前達に脱がされたんじゃないと分かって安心した」

「うん。でも……本当は、紅君を着替えさせるのも、私が手伝いたかったんだけどな……」

どさくさに紛れて、朱音がとんでもないことを言ってきた。正直、それだけは勘弁して欲しいと紅は思う。いくら幼馴染だからといって、中学生にもなって知り合いの少女にズボンを着替えさせてもらうというのは恥ずかしい。昔は一緒に風呂まで入った仲だったが、それも小学校に上がる前の話だ。

「それにしても……」

包帯の巻かれた紅の足に目を落としながら、萌葱が呟いた。

「今回は、さすがに私も頭にきたわ。田所先輩の噂は前々から聞いていたけど……まさか、ここまで酷いことをするなんてね」

「本当だよ。紅君は、何も悪いことなんかしてないのに……。あいつら……勝手に紅君のことを恨んだりして……」

「まったくだわ。犬崎君がなにをしたのか知らないけど、一方的に暴力を振るうなんて最低よ。ああいう連中は、一度自分達も同じような目に合わないと分からないのかしら？」

朱音と萌葱の声が、徐々に熱を帯びてきた。彼女達の怒りは、紅も分からないではない。しかし、ここで怒ったところで、女二人の力で不良グループをどうにかできるものでもない。

「お前達の言いたいことは、俺にも分かる」

身体を痛みに耐えつつも、紅はベッドから降りて立ち上がった。

足の裏に一瞬だけ痺れるような痛みが走ったが、あえて顔には出さずに我慢する。

「だが、怒りに任せて軽率な行動だけは取るんじゃないぞ。連中は、話して分かるような輩じゃないからな」

「うん、それは私も分かってる。でも……ごめんね、紅君。私のせいで、紅君を酷い目に合わせちゃって……」

「気にするな、朱音。お前が無事だっただけでも、俺としては幸いだ」

そう言って、紅は朱音の頭に手を乗せてくしゃくしゃと撫でた。白金色の髪が、指と指の間に絡みついてくる。

田所隆二とその仲間による非道な仕打ち。彼らがこのまま紅のことを見逃すとは思えない。

今後のことを考えると気が重かったが、それでも学校から逃げ出すわけにはいかなかった。不良相手に本気で戦うのは馬鹿らしいと思ったものの、連中が再び朱音に手を出さないという保証はない。

次に田所が何かを仕掛けてくるようならば、今度はこちらも本気で立ち向かわせてもらおう。そう思った紅だったが、今日のことがこれから始まる惨劇の序章になろうとは、この時点では気づいてもいなかった。

〜 四ノ刻　影潜 〜

不幸な出来事というものは連鎖する。その当事者達の意思とは関係なく、時に人の運命を翻弄するかのように、重ねて降りかかるものである。

犬崎紅が狗蓼朱音の母親の訃報を知ったのは、彼が田所達に暴行を加えられた、その翌日のことだった。

その日の晩、紅の家に入った一本の電話。内容は、朱音の母が亡くなったというものだった。対応したのは祖母だったが、その話は直ぐに紅の耳にも入ることとなった。なんでも、階段から足を滑らせて転落し、そのまま帰らぬ人となってしまったとのことである。

紅の知る限り、朱音の家は母子家庭だ。親戚は犬崎の家以外になく、祖父母も既に他界していると聞いていた。

まったくもって、やるせない。そう思ったところで、紅にはどうしてやることもできなかった。

運命の女神という者がいるのであれば、紅は真っ先にその相手を呪っていただろう。彼女は自分の気まぐれから、時として不幸の渦中にいる人物を奈落の底まで叩き落とすような真似を平気でする。こんな時に、何故に朱音が家族を奪われなければならないのか。どれほど考えたところで、納得のいく理由など見つかりはしない。

ここで考えていても仕方ない。そう思った紅は、祖母の多恵の声に呼ばれるままに、席を立って外へ出た。玄関まで行くと、そこには多恵に連れられた朱音の姿があった。

身寄りのいない朱音にとって、母の死は即ち彼女の家庭が失われたことを意味している。他に行く宛てもない朱音にとって、紅の家は彼女を受け入れてくれる唯一の場所だった。

「朱音……」

名前を呼んだが、返事は返ってこなかった。やはり、母の死に動揺しているのだろうか。紅を前にしても、朱音はいつもの笑顔を見せようとはしない。

多恵に促され、朱音は軽く一礼して犬崎邸の扉をくぐる。そんな彼女の姿を、紅はただ見ていることしかできなかった。

※　※　※　※　※　※　※

その日は、秋にしては妙に蒸し暑い夜だった。

自室の布団で横になりながら、紅はふと、隣の部屋で寝ている朱音のことを考えた。

あの後、自分は朱音に満足な言葉さえかけてやることもできなかった。何を言っても気休めにしかならないということは分かっていたが、それでもあまりに冷た過ぎはしなかったか。

確かに、人を気づかったり慰めたりすることは、自分の苦手としていることだ。しかし、屋上で田所達に捕まった時、朱音は己の身を顧みずにこちらを助けてくれた。

そんな朱音に対し、いざという時に限って、自分は何もできていない。あの時、屋上で田所達に言った言葉さえも、今では単なる強がりのように思えて仕方がない。

暗がりの中、ぼんやりと考えながら天井を見つめる紅。明日、朱音に謝ろうとも思ったが、溜息と共にその考えは打ち消された。

（馬鹿だな、俺は……。朱音に謝るとして……その時は、どんな言葉をかけてやればいい……）

謝罪とは、相手がこちらの罪を認識しているからこそ意味がある。では、朱音は紅の取った行動を、果たして罪と思っているのだろうか。

自分は確かに、朱音に対して気の利いた言葉の一つもかけてやれなかった。だが、朱音がそんなことで腹を立てるような人間でないことは、紅がなによりも良く知っている。

こちらが謝ったところで、逆に妙な気づかいをさせるだけだ。そんな朱音の性格を知っているだけに、単に形だけの謝罪を述べて済ませるのも気が引けた。

どうにも、考えがまとまらない。それは、この蒸し暑さから来る寝苦しさが原因なのか、それとも他に何か理由があるのか。

先ほどから、同じような考えが頭の中を回っている。気持ちを静めるようにして、紅は意味もなく寝返りを打った。部屋の入口である襖に背を向けて、悶々とした気持ちのまま赤い目を開く。

こんなことは、考えるだけ馬鹿馬鹿しい。全ては明日、朱音の様子を見てから決めればいいことだ。

考えをまとめるというよりは、強引に悩みを断ち切ったと言った方が正しかった。果たして何が正解なのか、それは紅にも分からない。今はただ、早く寝てしまおうという気持ちだけが頭の中を占めていた。

再び、蒸し暑い部屋の空気が圧し掛かるようにして紅を包む。やはり、今日は寝苦しい。秋に鳴ったからといって、掛け布団まで押入れの中から引っ張り出したのは早かったか。そう、紅が思った時だった。

何かが擦れるような音がして、部屋の中に廊下の空気が流れ込んで来た。紅の家は古い作りだったが、隙間風が入るようなおんぼろではない。だとすれば、この背中に当たる冷気の正体は何だろうか。

答えなど、紅には当に分かっていた。誰かが部屋の襖を開け、中に入って来たのだ。それ以外に、思いつく理由などありはしない。

「誰だ……」

深夜の来訪者に、紅は警戒した様子で尋ねた。まさかとは思うが、泥棒ということはないだろう。犬崎の家は確かに広かったが、ここには盗むような価値のあるものなど何もない。それどころか、下手に手を出せば盗んだ者が呪われるような、曰くつきの品々まである。

暗闇の中、紅の赤い瞳が大きく広がった。日中は力を発揮できない彼の目は、暗闇の中でこそ真の力を発揮する。光など一切なくとも、辺りの様子が手に取るように分かるのである。それこそ、まる

で猫の目のように、闇の中を見通すことが可能だった。

襖を開け、自分の部屋に入って来た者は誰なのか。つい、よくない想像をしてしまい、紅の拳には無意識の内に力が入っていた。が、自分の前にいる人物が誰なのかが分かると、その瞳は途端に緊張の色を失ってゆく。

「なんだ、朱音か……。どうした、こんな夜に？」

紅の部屋を訪れて来たのは朱音だった。今は、寝衣（しんい）の代わりに青い浴衣をまとっている。荷物の殆どは家に置いてきたようだったので、恐らくは多恵が貸したのだろう。

「ごめんね、紅君。起こしちゃったかな？」

朱音が紅の隣に腰を下ろして言った。

上から顔を覗き込むようにされると、どうにも居心地が悪い。たまらず紅も、布団を剥いで身体を起こす。

「いや、大丈夫だ。今日は、ちょっと寝苦しかったからな。正直、今も目が冴えてしょうがない」

「そうなんだ。実は、私もなんだよね。私、枕が変わると、あまりよく眠れなくて……」

「なるほどな。まあ、慣れるまで少しの辛抱だ。それまでは、ちょっと辛いかもしれないが」

「うん。でも、別にそれは構わないんだけどね。ただ……」

突然、朱音が口籠った。視線を下に落とし、浴衣の裾をぎゅっと握って俯いている。

「さっき……ちょっと、怖い夢を見たの……。だから、紅君が一緒に寝てくれたらって……そう思って……」

「なっ……！？」

暗闇の中、朱音の口から唐突に発せられた言葉。その、あまりに突然な申し出に、さすがの紅もしばし言葉を失ってしまった。

朱音とは、確かに一緒に寝たことがないわけではない。しかし、それとて小学校に上がったばかりの頃の話である。

「お前……本気で言ってるのか？」

「うん。駄目……かな？」

朱音が上目づかいに紅を見て言った。その赤い瞳で縋るようにして見つめられると、それだけで断れなくなってしまう自分がいる。いつもであれば、何の意識もせずに言葉を返せるはずなのに、今日に限って頭が回らない。

このまま待っていても、朱音は自分の部屋に戻ることはないだろう。かといって、追い返すというのも気が引けた。

仕方なく、紅は布団の上に立ち上がって部屋の灯りをつける。押入れの襖を開け、中から予備の布団を引っ張り出した。自分の布団の横に、並べるようにしてそれを敷く。

「ほら、お前の分の布団だ。今日は隣で寝てやるが……明日からは、一人で寝ろよ」

考えられる限りでの、精一杯の対応だった。

朱音が布団に入ったことを確認し、紅は再び部屋の灯りを消した。自分も布団に戻ったが、やはりどうにも落ち着かない。隣で寝ている朱音からできるだけ距離を取るようにして、紅は布団の隅で毛布を被って丸くなっていた。

幼い頃から、朱音は常に自分の近くにいる存在だった。だからこそ、特にこれといって、特別な感情を抱いてきたわけではなかった。

自分と同じ血の定めを持ち、その容姿故に外の世界から好奇の目に晒される。家族は母親のみで、身体も弱く、頼れる者もほとんどいない。そんな朱音を守ってやるのが、自分の役割だと考えていた。

朱音とは、あくまで親戚であり幼馴染である関係。それ以上でも、それ以下でもない。今まではそう考えていたが、果たして自分は今この時も、そのように言いきることができるだろうか。

中学に上がり、こと最近になってからは、朱音は大きく成長した。一年前は小学生だったことが嘘のように、背も伸び、体つきも少しだけだが女らしくなった。

数日前、秘密基地に使っていた防空壕の中で、朱音が告げた言葉が蘇る。それを思い出した瞬間に、自分の顔が赤くなっているのが嫌でも分かった。

あの日、彼女は自分に向かって、本当の意味で女の子になったと伝えた。あれはいったい、どういう意図があったのだろうか。確かに自分は幼い頃から朱音の兄的存在として振舞ってきたが、さすがにあれは理解の範疇を越えていた。

（何を考えているんだ、俺は……。朱音は……妹みたいなもんだろ……。昔も、今も、そうだったはずだ……）

そう、紅が考えた時だった。

布団の捲れる音がして、部屋の空気が背中に一瞬だけ触れた。同時に、自分の布団の中に、何かがそっと入り込んで来るのが分かった。

「あ、朱音……！？」

後ろを振り返ることなど、できはしなかった。自分の背中の向こうには、間違いなく朱音がいる。身体を少し動かしただけで触れてしまえるほど近く、紙一枚ほどの隔たりしかない距離に、朱音の身体があるのだ。

闇の中、自分の心臓の音だけが妙にはっきりと聞こえた。自分の耳にしか響いていないとは知りつつも、朱音にも聞こえているのではないかと思うと気が気でない。

やはり、布団と布団の間を離しておくべきだったか。そう思っても、最早後の祭りだった。少しでも身体を動かすと朱音にぶつかりそうになるため、寝返りはおろか、腕も足も満足に動かせない。指一本でも動かした途端、それが朱音の肌に触れてしまいそうで怖かった。

十分、二十分、そして三十分。どれほどの時間が経過しただろうか。

しばらくすると、自分のすぐ隣から、軽い寝息が聞こえてきた。ようやく眠ってくれたのか。そう思い、紅もほっと胸を撫で下ろして仰向けになった。ずっと同じ姿勢で固まっていたためか、首の筋が妙に張っている気がしてならない。

何気なく横に目をやると、そこでは朱音があどけない表情で眠っていた。その顔だけ見れば、いつも学校で見ている朱音の顔と大差はない。

さすがに、妙な心配をし過ぎたか。母親が急に亡くなり、朱音は不安だったのだろう。だからこそ、こうして自分に甘えて来た。それ以上でも、それ以下でもない。

今まで妙に朱音を意識していたことが、急に馬鹿馬鹿しくなってきた。同時に、あれこれと疾しいことまで想像してしまった自分が情けなくなってくる。

だが、そんな考えは、朱音の胸元に目を下ろした瞬間、即座に吹き飛んだ。

部屋の蒸し暑さに耐えかねてか、朱音は胸から上の部分を布団からさらけ出していた。浴衣の胸元が少しだけ乱れ、そこから白い肌が覗いて見える。決して大きくはない胸が、朱音の呼吸に合わせて小さく上下しているのも見て取れた。

最早、眠気は完全に消え去っていた。これ以上一緒にいては、妙

な間違いが起きないとも限らない。そんなことになったら、それこそ取り返しのつかない一大事だ。

朱音を起こさないように気をつけながら、紅はそっと布団から抜け出した。そのまま音を立てないように注意しつつ、襖を開けて部屋を出る。一度、外の空気を吸って頭を冷やさねば、おかしくなってしまいそうだった。

部屋と違い、夜の廊下はいくらか涼しかった。板張りの床が、歩くたびに指先に張り付いて来るような感覚を覚える。田所達に焼かれた足の傷が、少しだけすれて軽い痛みを覚えた。

旧校舎の肝試しから始まった、幽霊退治の騒動。そして、最近になって妙にこちらに意識させるような態度を取る朱音と、田所達の理不尽な暴行。更に、このタイミングで訪れた、朱音の母親の死。

ほんの数日の間に、あまりに多くのことが起き過ぎた。一度、本格的に頭の中身を整理しないといけないだろう。

そう思って顔を上げると、何やら廊下の向こうに一筋の明かりが見えた。それは茶の間から出ているようで、紅は思わず足音を忍ばせ、その明かりに近づいて行った。

こんな時間に茶の間にいるとは、いったい誰だろう。まだ、祖父や祖母が起きているとでも言うのだろうか。朱音の母の通夜は明日のはずだというのに、どうにも様子が変だ。

隙間から明かりの漏れている襖に近づくと、紅は物音を立てないように注意しながら、そっと聞き耳を立ててみた。果たして、彼の予想は正しく、中から聞こえてきたのは臙良と多恵の声だ。ただし、

いつもの二人の声とは少し違い、何やら深刻な雰囲気ではあるが。

「のう、臙良。あの娘の……朱音のことだがね」

「分かっておる。既に、わしの方で霊視はしておいた」

「それは手が早いのう。で、結果はどうじゃった？」

「残念ながら、白じゃったな。あの娘に絶影（ぜつえい）が憑いている様子はない」

話の内容は分からなかったが、何やら朱音についてのことを話しているということだけは紅にも分かった。どうにも続きが気になって、紅は更に襖に耳を近づける。

「わしの見立てでは、あれははぐれ神になったと思うておる。朱鷺（とき）子（こ）の身体はもちろん、朱音の身体にも憑いている気配がないのだからのう」

「お主の黒影のように、影に潜っているということは考えられんのか？」

「それはない。影潜りの術は、訓練なしに使えるものではないからな。それに、仮に憑かれていた場合、もっと表面的な部分に影響が現れる。今の朱音の様子を見る限り、心配はなかろうて」

「まあ、お主がそう言うのであれば、大丈夫じゃろう。もっとも、はぐれ神になった絶影が、あの娘を狙わんとも限らんぞ」

「それも分かっておるよ。当分は、わしと黒影で村の見回りをせね

ばならんな……」

襖の向こうで、臙良が立ち上がる音が聞こえた。こちらに向かって来ることが分かり、紅は慌ててその場を去る。足音を立てないように注意しつつ、廊下を曲がったところにある物陰に身を隠した。

茶の間の方から、二つの足音が徐々に遠ざかって行くのが聞こえて来る。臙良と多恵は、どうやら紅のことに気づいていないようだった。

はぐれ神、影潜り、そして黒影。どれも、紅が一度は聞いたことのある言葉である。

黒影というのは、犬崎家に古来より伝わる犬神の名前だ。今は臙良が使役しているが、いずれは紅もそれを引き継ぐことになると言われていた。絶影という名は聞いたことがなかったが、恐らくはそれも、黒影のような犬神に違いない。

犬神は、使役する者の影に潜む。影潜りというのは、犬神が術者の影と一つになるための術を指す。術者の影と一体化することにより、その術者は犬神に憑かれることなく彼らを己の側に置き、更には自由に使役することができるのである。

もっとも、それを行うには、術者が犬神を完全に己の支配下に置かねばならない。外法(げほう)使いとして、そして退魔師として長年仕事をしてきた臙良であればともかく、朱音はもとより、今の紅にさえ使えない高度な技だ。

そして、臙良が繰り返し口にしていたはぐれ神という言葉。これに関しては、まだ退魔師として半人前の紅でさえ、その危険性につ

いて十分に教わっていた。

はぐれ神。それは、祀られる社や使役する術者を失って、完全に己の意思だけで行動するようになった神である。

通常、そのような神は下級の神であることが多く、その殆どが己の本能によってのみ行動する。中には完全に祟り神と化してしまうものもあり、そういった類の神性は、もはや悪霊と大差はない。存在するだけで周囲に祟りを撒き散らす、極めて危険な存在なのだ。

臙良と多恵が何を話していたのかは、紅にも完全に分からなかった。しかし、自分達の身の回りで、何やら良くないことが起きているということだけは、辛うじて理解することができた。

多恵の言葉に合った、はぐれ神が朱音を狙うかもしれないという話。そして、いつもであれば仕事の依頼を受けない限り動かない臙良が、自ら夜の見回りを申し出たという事実。これらのことから考えて、朱音の身に危険が迫っている可能性は否定できない。

朱音に危険が迫っているのであれば、自分はその危険から朱音を守らねばならない。否、守らねばならないのではなく、守ってやりたいと言った方が正しいか。残念ながら、臙良のような力は今の自分にはないが、それでも何かできることがあるはずだ。

「今の俺に、できることか……」

はぐれ神のような、強大な霊と戦うための力は自分にはない。ならば、朱音のために出来ることは何なのか。その答えは、当に出ているはずだった。

母を亡くし、頼りになる者は紅だけとなってしまった朱音。そんな彼女のために、自分は少しでも心の拠り所となってやればよいのではないか。

何の解決にもならない、偽善的な自己満足だとは分かっていた。しかし、今の自分に出来ることを考えた時、紅には他に何か良い手が思いつきそうにもなかった。

※　※　※　※　※　※　※

翌日、朱音の母である狗蓼朱鷺子（くりょうときこ）の通夜は、しめやかに行われた。

通夜といっても、犬崎や狗蓼の家は仏門に入っているわけではない。彼ら、赫の一族は、どちらかと言えば神道の系列に近い存在である。そのため、朱鷺子の通夜には僧侶さえも呼ばれず、身内だけで取り行われた。

それは、まるで密葬のような通夜だった。参列者は、赫の一族に関わる極僅かな人間のみ。犬崎家の人間と朱音、それに、仕事で土師見村を訪れていた皐月だけだ。儀式は臙良が中心となって取り行い、極めて短い時間で済まされた。

最後に、棺に入れられた朱鷺子の遺体は、赫の一族ゆかりの地へと運ばれた。山の中にある小さな石造りの建物に、遺体の入った棺桶を安置したところで通夜は終わりだった。

本葬が終わってもいないのに、遺体の入った棺を特殊な建物の中に安置する。傍から見れば奇妙なことではあったが、これは赫の一

族に代々伝わる葬儀の儀式であった。

殯(もがり)。古来、日本で行われていた、最も古い形の葬儀儀礼の一つである。

死者の遺体を殯宮(もがりのみや)と呼ばれる特殊な場所に、本葬までのかなり長い期間に渡り安置する。そして、死者との別れを惜しみ、同時にその魂を慰めつつも、最後には時間と共に代わり果ててゆく死者の姿を見て、死という事実を受け入れる。

遺体を安置する期間は一年とも三年とも言われているが、さすがに現代において、そこまで長期に渡り遺体を埋葬せずに安置することは不可能だった。赫の一族の殯に関しても、それは同様である。

数日の間、一族の者が交代で殯宮を訪れ、その後は棺を土葬に処す。期間こそ短縮されているものの、最低限の埋葬方法は昔から変わらぬままだった。

通夜を終え、紅と朱音は再び犬崎邸へと戻って来た。臙良は、今日は儀式の関係で、殯宮に残っている。死者の魂を慰めるためには、殯宮で夜通し死者に付き添わねばならないからだ。

家に帰るまでの間、朱音は始終無言だった。それは帰宅してからも変わりなく、紅だけでなく多恵でさえも、声をかけるのが憚られるほどだった。

「なあ、朱音……。その……大丈夫か？」

家に帰っても沈んだ表情のままの朱音に、紅がその顔色を窺うようにして尋ねた。もう少し、何か気の利いた言葉でもかけられれば

と思ったが、それ以外には何も言葉が浮かばなかった。

「私なら平気だよ、紅君。ただ、今日はちょっと、疲れただけだから……」

「無理はするな。辛い時や苦しい時は、思い切り泣いた方がいいこともある。もっとも、それで俺が、お前に何かしてやれるわけじゃないがな……」

「そ、そんなことないよ！　私、紅君にいっつも心配かけてばかりだし……。こうして一緒にいてくれるだけでも、私は十分だよ！！」

泣かれると思った紅だったが、朱音は泣かなかった。その代わり、今まで項垂れていた首を上げて、紅に懇願するような瞳を向けて来た。

それは、朱音の本心なのか、それとも単に強がっているだけなのか。その真意は、紅には分からない。

だが、普通に考えた場合、母親の死という現実は極めて重たいものである。その現実に押しつぶされないようにするために、朱音はあえて弱い部分を見せないようにしている。少なくとも、紅の目にはそう映った。

どちらにせよ、今の朱音が頼りにしているのは自分だけだ。そう思った紅は、何も言わずに朱音の横へ移動して腰を下ろした。壁によりかかるようにして座ると、肩に軽い重みがかかってくる。どうやら、朱音がこちらに体重を預けてきたらしい。

しばらくすると、朱音は軽い寝息を立てながら、紅の横で眠り始

めた。疲れているというのは本当のようで、紅が肩を少し揺すったくらいでは、まったく目を覚まそうとしない。

しばらく寝顔を覗きこんでいた紅だったが、昨晩のように朱音を意識してしまうようなことはなかった。今の紅にはそれ以上に、臙良と多恵の話していたことが気がかりだった。

臙良の話にあった、はぐれ神。それが朱音を狙っていたとしても、自分には彼女を守る術など無い。

退魔師としての修業を受けながらも、肝心な時に力不足な自分の現状。そんな自分に、紅は苛立ちともどかしさを抱かずにはいられなかった。

※　※　※　※　※　※　※

夜の帳が降りた土師見村は、昼の喧騒が嘘のように静まり返っていた。昼間は人で賑わっている駅の周りも、今は人の影さえない。その日の電車はとっくに運行を終えており、駅前の商店も軒並み暖簾を下ろしていた。

宵闇に包まれた、人気のない夜の大通り。こんな夜更けに出歩く者は、普通に考えれば誰もいないはずだ。

ところが、その日に限り、大通りには人目を憚って動くような一つの影があった。

柏木辰巳。あの、田所隆二の仲間の一人で、執拗なまでに残酷な

遊びを好む少年だ。その態度はどこか人を食ったようなところがあり、時に先輩である権田や澤井でさえも顔をしかめるような行動を平気でする。

柏木が夜に出歩くのは、何も今に始まったことではなかった。昼間と違い、夜は柏木にとっていろいろと動きやすい時間帯である。別に、人の目など気にして生きてはいなかったが、誰かに自分の行動を邪魔されるのは気に入らなかった。

例えば、煙草を一つ買うにしても、中学生である自分に昼日中から煙草を売るような者はいないだろう。自動販売機も同様で、下手に買っているところを見つかって、大人達にあれこれと言われるのは鬱陶しい。

その点、夜というのはとても便利な時間帯だ。こんな田舎の自動販売機には、当然のことながら年齢認証を要する仕組みも導入されていない。周りに大人もおらず、買ったその場で堂々と煙草を吸うことができる。

また、その一方で、夜は柏木の趣味を満喫するのにも都合が良い時間帯だった。

幼い頃から柏木は、自分より小さな生き物を虐めて殺すのが好きだった。昆虫を捕え、意味もなく羽や足をもぎ取るようなことは普通にやってきたし、その辺の池や田んぼにいるカエルやフナに石をぶつけて殺すこともあった。

最近になってから、そんな柏木の遊びは更にエスカレートの一途をたどっていた。あぜ道で見つけた蛇の腹をナイフで裂く。道端で見かけた野良猫を捕まえ、動かなくなるまで殴る蹴るの暴行を加え

る。そうして小さな命を奪っている時が、柏木にとって何よりも楽しい時間だった。

目の前にいる生き物の生殺与奪権は、全て自分に握られている。どれほど相手が生きたいと望んだところで、それを決めるのは相手ではなく自分自身。こちらの気まぐれで、生きるも死ぬも簡単に操ることができてしまうという征服感。小動物を虐めている時だけが、柏木にとって、その快感を存分に堪能することのできる時間である。

その日も柏木は、自分の欲求を満たすための獲物を探して彷徨っていた。この時間、村の目ぼしい通りを歩いていれば、野良猫の一匹や二匹を見つけることは造作もない。片手には得物である金属バットを持ち、先ほど買った煙草をくわえながら道を歩く。

（さて……。今日の獲物は、どの辺りにいるのかな？）

バットで犬や猫を殴った時の、あの柔らかいものが潰れるような感触。それを想像するだけで、たまらず片手が震えてきてしまう。カエルやヘビのような小物ではなく、今日の狩りは久々に大物を仕留めたい気分だ。

しかし、そんな柏木の気持ちとは裏腹に、その日は猫の子一匹にさえ出会うことがなかった。こんな日に限って、連中は物陰でじっと身を潜めているのだろうか。

秋にしては、やけにじっとりと湿った空気が辺りを覆っていた。

腹の奥からこみ上げて来る苛立ちを抑えきれず、柏木はバットの先で地面をゴツゴツと叩きながら歩いてゆく。金属がコンクリートにぶつかる音だけが、自分の耳を刺激する。

駅前から離れ、田んぼのあぜ道を横目に、柏木はバス停へと続く細い県道へとやって来た。左右を森と林に囲まれた、昼間でも静かな場所である。この辺りまで来れば、猫だけだなく、なにかしらの生き物に出会える可能性はあった。

それにしても、今日はやたらと蒸し暑い。空気さえもが蒸されて淀んでいるような気がしてしまい、それが柏木の苛立ちを更に助長させた。

なんでもいい。とりあえず、獲物を狩ってすっきりしたい。そんなことを考えながら、柏木は県道を歩いてゆく。服と服の間に溜まっている空気が暑苦しく、時折、胸元を引っ張っては、空いている方の手で中を仰ぐ。

あれから、どれくらい歩いたのだろうか。

結局、今日は手ごろな獲物に一匹も出会うことはなかった。県道はまだ伸びていたが、これ以上進んでは本格的に山の中に入ってしまう。いくら狩りをしたくとも、わざわざ夜の山の中にまで足を踏み入れて行こうとは思わない。

「ちっ……。今日はついてないな……」

バットを肩に担ぎ、柏木は悪態をこぼした。これ以上は、獲物を探しまわっても無駄だろう。不本意ではあるが、今日はこの辺りで引き上げるしかなさそうだ。

――――ヒタ……。

突然、柏木の後ろから、何かが近づいて来るような足音がした。思わず振り返って後ろを見るが、そこには何の姿もない。

「なんだ、気のせいか……」

別段、恐怖というものは感じていなかった。こんな夜に、田舎の県道を歩いているのは獣くらいのものだ。もしも目の前に現われたならば、狩りの獲物として扱うくらいの考えしかない。

何もいないことを確認し、夜道を歩き出す柏木。だが、彼が歩き出した途端、先ほどの足音が再び聞こえてきた。

――――ヒタ……ヒタ……ヒタ……。

こちらの歩調に合わせるようにして、足音は徐々に柏木との距離を詰めて来る。足を止めて後ろを見るが、やはり何もいない。あるのはただ、左右に広がる林と闇の中に伸びる道だけだ。

突然、木々の梢を圧し折るような音がして、生温かい風が吹き抜けた。雲に覆われていた月が顔を出し、青白い光が夜道を照らす。

――――ヒタ……ヒタ……ヒタ……ヒタ……

今度は、足音が止まることはなかった。いつしか柏木は、バット

を持っている自分の手が汗で濡れているのに気がついた。

自分は何も恐れてはいない。例え何かが現れたとて、それは狩りの獲物に過ぎないはずだ。

ならば、この全身を覆う不安と不快感はなんだろうか。まるで、闇の中から何者かが、こちらの様子を窺っているかのようだ。全身を舐めるようにして見つめられているのが、今の柏木にもはっきりと分かった。

「ったく……。なんだってんだよ、いったい……」

恐怖と苛立ちが入り混じり、柏木の頭は既に冷静な判断力を失っていた。手にしたバットを強く握ると、そのまま後ろを振り返って頭の上で構える。次に現れるものがなんであれ、そのままバットを叩きつけて壊してしまおうと考えた。

ところが、そんな柏木をあざ笑うかのようにして、彼の目の前には何の姿もなかった。一瞬、拍子抜けしてしまう柏木だったが、すぐに妙な違和感を覚えてバットを構え直す。

月明かりに照らされた、林に囲まれた一本の県道。そこにあるのは、自分の影と木々の影。それだけならば、何の変哲もない夜道の風景だ。

そんな影の間を縫うようにして、柏木はこちらに迫って来る異質なものの存在を目の当たりにした。

「な、なんだよ、あれ……」

それは、紛れもない影だった。大柄な、犬とも狼とも取れる四足の獣。ヒタヒタという足音と共に、それは少しずつ自分の方へと近づいて来る。そして、そんな影の本体となる物は、柏木の目には映っていなかった。

月夜の晩、獣の姿をした影だけが、足音を立ててこちらに迫る。その、あまりに奇妙な光景に、柏木は次に自分が何をすれば良いのかさえも分からなかった。

影が、柏木との距離を更に詰める。足音が徐々に大きくなり、最後は柏木自身の影と重なる程にまで近づいた。

次の瞬間、柏木の首に鋭い痛みが走った。思わずバットを取り落とし、両手で首を押さえる。

下に目をやると、獣の影が自分の影に咬みついていた。相変わらず、獣の本体は見えないものの、影だけはしっかりと柏木の影に食らいついている。

喉の奥に牙が突き刺さり、そのまま肉を千切られているような痛みを感じた。呼吸することさえも苦しくなり、柏木は喉をかきむしるようにして地面を転げまわる。両手をバタつかせ、落としたバットを拾おうと懸命にもがいた。

あの影は、いったい何なのだろうか。そんなことは、今の柏木にとってはどうでもよかった。ただ、この状況から逃げ出さねばならない。一心にそれだけを考えて、なんとか落としたバットを拾い上げる。

「くそっ……！　こ、こいつ……！！」

武器を取り戻したことで、柏木の中の恐怖心が僅かだが薄れた。獣の影は相変わらずこちらの影に食らいついていたが、いつまでも好きにさせるつもりはない。

相手の正体など、もはや二の次だった。獣の影に向け、柏木は手にしたバットを勢いよく投げつける。ガラン、という金属が地面にぶつかる音がして、バットは影に命中した。

「はぁ……はぁ……」

首筋を庇うようにして押さえ、柏木は肩で息をしながら立ち上がった。首筋には、まだ何かに噛みつかれたような痛みが残っている。そればかりでなく、首から肩にかけての部分は、その一部が既に感覚を失っていた。

あの影は、いったい何だったのか。なぜ、自分が襲われなければならないのか。その答えを柏木が出す前に、影は次の動きに出た。

獣の影が、まるで道から這い上がるかのようにして起き上がった。一瞬、大地が盛り上がったかのように見えたが、それは影が膨らんで黒い塊となったものだった。

どろどろした流動的な塊となって、影は徐々にその形をはっきりとさせてきた。四肢が伸び、赤銅色の目を輝かせ、大きく開いた口から白銀の牙をむき出しにする。その身体は液体とも気体ともつかない物だったが、それは四本の脚を持ち、しっかりと大地に立っていた。

黒い、虎ほどの大きさもある巨大な獣。犬とも狼とも取れるその

顔には、激しい敵意が見て取れる。

既に、影の正体などは問題ではなかった。放り投げたバットを拾うことさえもせずに、柏木は一目散にその場から逃げ出した。

自分は、見てはならないものを見てしまった。あれは、生きている人間の世界に住むものではない。もっと邪悪で恐ろしく、それでいて得体の知れない存在。自分の常識を越えた、決して出会ってはいけないものだ。

相手の正体は分からなかったが、本能が危険を告げていた。今は、とにかくあの影から逃げねばならない。人間の敵う相手ではないということは、あの燃えるような瞳を見ただけでも分かるだろう。

左右に広がる林には目もくれず、柏木はひたすらに県道を走った。後ろを振り返る余裕などはない。振り向けば、その瞬間に鋭利なナイフのような牙が自分の首に突き立てられる。そう考えてしまうと、もう駄目だった。

「ひぃ……ひぃ……」

息を切らし、脚を絡めそうになりながらも、柏木は走った。バス停は当に通り過ぎ、自分でもどこを走っているのか分からない。

気がつくと、柏木は県道を抜けた先の分かれ道に出ていた。頭の上では街灯が、夜の闇の中で薄ぼんやりと輝いている。光に連れられて来た虫たちが、本能に導かれるままに街灯へ体当たりを繰り返していた。

ここまでくれば、大丈夫だろう。幸いにして、あのヒタヒタとい

う足音も聞こえてこない。

ほっと安堵のため息をつき、柏木は街灯に寄り掛かるようにして下を見た。薄明かりの中、あるのは自分と街灯の支柱の影だけだ。辺りを見回してみても、あの奇妙な獣の影は見当たらない。そう、柏木が思った時だった。

「う、うわぁぁぁっ！！」

街灯の明かりに照らされてできた、自分自身の影。その影に目をやった瞬間、柏木は恐怖のあまり、とうとうその場にへたり込んでしまった。

自分の影と目が合った。おかしな言い方かもしれないが、この場合はそれ以外に表現する方法が見当たらなかった。

柏木の足元から伸びた自分自身の影が、まっすぐにこちらを見つめていた。本来であれば目のある部分には、赤銅色の鋭い瞳が輝いている。

柏木の影が、音もなくぬうっと伸びた。そして、そのままゆっくりと起き上がり、影は再び先の獣の姿を形作ってゆく。

なんということだ。自分は逃げられたと思っていたが、そもそも最初から逃げ道などなかったのだ。あの獣は、柏木自身の影に潜み、ずっと機会を窺っていた。こちらがどれほど走ったところで、逃げきれるようなものではない。

獣の姿となった影が、低い唸り声を上げながら柏木をにらんだ。黒一色の身体の中で、瞳と牙の色だけが妙に冴えて見える。

「ぎゃぁっ！！」

獣の牙が柏木の首に食い込み、悲鳴が夜道に響き渡った。黒い身体の獣は、そのまま柏木の身体をずるずると引きずって行く。

腕を咬まれ、脚を咬まれ、最後には両耳をかじられるような形で頭を咬まれた。しかし、その一撃が致命傷になることは決してない。

獣は、柏木の身体を使って遊んでいた。子猫が虫にじゃれつき、子犬が玩具を振り回すように、ただ柏木の身体を蹂躙し続けた。

獣に咬みつかれる度に、身体の感覚が少しずつ失われてゆく。激しい痛みを伴ってはいたが、不思議と血は流れていない。肉を抉られ、皮を引き裂かれる感じがしたが、ある一点を通り越すと、痛みは無感覚へと変わっていった。

いつの間にか、柏木は狩る側から狩られる側へと変わっていた。絶対的な力の差を見せつけられて、玩具のように肉体を弄ばれる。自ら経験することで、柏木は初めて己のしてきた行いに恐怖した。もっとも、今になって悔いたところで、全ては後の祭りであったが。

もう、両手と両脚の感覚は完全に失われていた。大地に大の字になって転がったまま、成されるがままに空を仰いでいる。

黒い影の獣が、自分の上にのしかかって来た。このまま、最後は首を咬み千切られて死ぬのだろうか。思わず身体を強張らせようとしたが、手足に力が入らず、それさえも叶わない。

獣の鼻面が、徐々に自分の顔に近づいて来る。その口から吐き出

される息が、柏木の鼻腔を刺激した。あまりの生臭さに、息がつまり吐き気を催してしまう。

獣の身体がぐにゃりと揺れた。その身体は徐々に黒い塊となり、柏木の頭の上をふわふわと浮いている。

それは、あまりに奇妙な光景だった。

夜空に輝く黄色い月の横に、黒い月が浮いている。黒い球状の塊となった獣は、その中心に赤銅色の瞳だけを残している。

次の瞬間、黒い塊が溶けるようにして霧と化し、柏木の鼻と口の中に滑り込んできた。べっとりとした、粘性の高い液体のようなものが、物凄い勢いで体内に入り込んで来る。こちらの呼吸さえも無視して口と鼻を犯され、思わず目に涙が浮かんできた。

既に、手足を動かすことは叶わない。抗うことさえも許されず、柏木は流れるままに黒い煙を体内へと受け入れる他になかった。

身体の中で、なにやら熱い物が暴れまわっているのが分かる。腹や胸に激しい痛みが走ったが、もはや叫び声を出すことさえもできない。

気がつくと、自分の瞳からは赤い涙が流れていた。眼球を、誰かの手で直接握られているような痛みが走る。そして、喉の奥から生臭い液体が這い上がって来るのを感じた途端、唐突に視界が遮られた。

ごぼっ、という嫌な音がして、柏木の口から赤黒い液体が吐き出される。その瞳は既に真っ赤に染まり、眼球であったはずの物は既

に無い。瞳があった場所には抉られたような大きな穴が二つ開き、やはり赤黒い液体を噴水のように垂れ流していた。

四肢の感覚を奪われ、身体の奥に焼けつくような痛みを感じる。光さえも奪われ、声を出すことも息をすることも叶わない。

生温かく、それでいて鉄のような味が口内に広がって行く。それが自分の血の味だと分かった時、柏木の意識はそこで途切れた。

〜 伍ノ刻　報復 〜

司法解剖というと、大抵の人間はどのような光景を思い浮かべるだろうか。

大都会の真ん中で起きた、謎の密室殺人。その場に居合わせた監察医が、刑事の依頼によって、とりあえず被害者の遺体を解剖する。そんな、刑事ドラマのワンシーンのような光景を思い浮かべることがほとんどだろう。

しかし、殺人事件の被害者のものと思しき遺体が、全て司法解剖に回されるわけではない。他殺の疑いが間違いない場合は、検察官による検視だけで終わってしまうことが殆どである。実際に解剖までされるのは、他殺か否かに関係なく、変死と断定された遺体だけなのだ。

その日、K県警お抱えの監察医達は、久方ぶりに仕事の依頼を受けた。とは言っても、実際に彼らが赴いたのは、山奥にある小さな農村。村にある唯一の病院を使い、その場で司法解剖を行うことになっていた。

病院の手術室に横たわる遺体の前に、県警の刑事と数人の監察医が立ち並ぶ。運ばれてきた遺体の顔を見た瞬間、まだ新米と思われる刑事と監察医が思わず目をそらした。

遺体は、その村に住む中学生のものだった。年齢は、まだ十三歳程の少年である。早朝、散歩をしていた村の老人が、道端の街灯下で発見したものだ。

遺体となって運ばれた少年が、異常な死に方をしているのは明白だった。眼球は完全に破裂し、穴から流れ出た血液が、涙の後のように顔にへばりついている。だが、それ以外にこれといった外傷はなく、死因に関してはまったくもって不明だった。

「では、これより解剖を始める」

監察医の中でも年配と思しき男が、手にしたメスを遺体の腹に当てた。男は手慣れた手つきで腹にメスを刺し入れると、観音開きになるように切れ込みを入れる。もう、今までに幾度となくやってきた、男にとっては当たり前の作業だ。

男のメスが遺体の腹を裂いた瞬間、その切り口から赤黒い液体が大量に溢れ出した。周りにいる他の監察医や刑事達は、その様子をただ見守っているだけだ。が、しかし、解剖を続ける男だけは、その光景に今までの仕事とは違う異質なものを感じていた。

死後、それほど経過していない遺体であれば、切開個所から出血することも不自然ではない。ところが、今日の遺体に関しては、その出血量があまりに多すぎるのだ。それこそ、まるで生きている人間と同じように、否、それ以上に大量の血液が切り口から流れ出している。

これは、ただの変死体ではない。そう思った男はメスを置くと、遺体の腹を手早く左右にこじ開けた。

瞬間、手術室に小さな悲鳴が響き渡る。監察医が開いた少年の腹から、滝のように血が溢れ出したのだ。それこそ、腹の中は全て血で満たされていたと言わんばかりに、手術台の上に赤いものが広がってゆく。その量は到底並みの出血量ではなく、台の上から溢れ出

た血がぼたぼたと床に落ちた。

「せ、先生……。これは……」

あまりに壮絶な光景に、思わず後ろに控えていた助手の監察医が尋ねた。

腹腔が破裂したにしては、あまりにも多すぎる血液の量。素人目に見ても、それが異常な光景であるということは容易に想像できる。これでは遺体というよりも、まるで血の詰まった風船だ。

他の助手や刑事達が、口元を押さえながら後ろに下がった。あまりに酷い臭気と奇怪な光景に、耐えられなくなったのだろう。

己の中に湧き上る恐怖をこらえながら、担当の監察医は遺体の中に手を伸ばした。どろっとした血のスープが手袋を濡らし、同じ色に染め上げてゆく。

遺体の中は、その外見に反して冷たかった。血の池の中をかき回すようにして、監察医は中の様子をまさぐってゆく。が、いかに手と指先を動かそうとも、その中にはあるべきはずの物がない。

胃も、腸も、およそ内臓と呼べるものが全て失われていた。代わりにあるのは、目の前に広がる大量の血液。これの意味するところが分かり、監察医の顔にも初めて恐怖の色が浮き彫りとなった。

内臓が、完全に液化している。眼球もそうだったが、よくよく考えれば、昨日まで健康だった人間の身体が液化するまで酷く破裂するなど不自然極まりない。

結局、その日の解剖では、少年の身体が謎の液状化を遂げたこと以外の発見はなかった。死亡に至った原因さえも特定できず、その場に居合わせた全員が、納得のゆかない表情で手術室を去ることになった。

※　※　※　※　※　※　※

その日はまだ木曜だというのに、学校は午前中で終わりとなった。無理もない。生徒の一人である柏木辰巳が、早朝に変死体となって発見されたのだから。

午前中の授業を全て終え、生徒達は教師の誘導を経て早くも下校を始めていた。給食さえ食べられず、半ば追い出されるような形で学校を出てゆく生徒達。その顔に、喜びの表情を浮かべている者の姿はない。

亡くなった柏木は根っからの不良として有名だったが、変死ともなれば話は別だ。この小さな村の中に異常な思考にとり憑かれた殺人犯が潜んでいるかもしれない。その事実だけでも、中学生の少年少女を震え上がらせるには十分だった。

だが、そんな生徒達の中にいても、恐怖の感情に支配されない者達もいた。田所隆二だ。

例の如く、屋上で煙草をふかしながら、田所は柏木の変死について考えていた。

柏木が死んだのは、自分達が犬崎紅に手を出した翌々日だ。ここ

まで都合よく仲間の一人が亡くなると、やはり偶然では片づけられなくなってくる。

もとより、田所は呪いや祟りと言った話は信じていない。柏木の件に関しても、彼は犬崎紅が裏で手をまわして復讐をしたと考え疑わなかった。死亡の原因や状況などは分からなかったが、紅が闇討ちを仕掛けたと考えた方が、全てにおいてしっくりと来る。

旧校舎の肝試しでは紅に出し抜かれ、先日の仕置きでさえも相手の心を折るに至らなかった。そればかりか、仲間の一人は腑抜けにさせられ、とうとう一人は亡くなった。

もう、我慢するのは限界だ。これ以上、犬崎紅の好きにさせてなるものか。今日という今日は、本気でお礼まいりをしなければ腹の虫が納まらない。それこそ、手加減なし、遊びなしで、本当に殺すつもりで私刑にせねば気が済まなかった。

「おい、お前達。今から犬崎の野郎をぶっ殺しに行くぞ。いつまでも、チンタラとヤニ食ってんじゃねえよ」

屋上のフェンスに寄りかかったままの仲間、権田と澤井の二人に対し、田所はやや凄んだような口調で言った。それは、いつのも田所らしくない行動。抑えようのない苛立ちが、顔や言葉にそのまま表れている。

「あの……田所さん……」

澤井が恐る恐る顔を上げた。太鼓持ちの彼にしては珍しくない行動だが、その表情はいつにも増して覇気がない。

「なんだ、澤井。お前……まさか、怖気づいたんじゃねえだろうな？」

「いや……でも、今回はさすがにヤバいっすよ。柏木が死んだのだって、なんか、普通の死に方じゃなかったって聞きましたし……」

「ちっ、情けねえ。だったら権田、お前だけでもいい。俺達二人だけで、犬崎の野郎をぶっ殺すぞ」

弱気になっている澤井を見限り、田所は権田に目をやった。単純な性格のやつではあるが、権田の体格と腕っ節だけは仲間の中でも随一だ。こいつなら、特に臆することなく紅を叩きのめすのに力を貸すはずだ。

そう考えた田所ではあったが、権田からの回答もまた意外なものだった。

「田所さん……。俺も、今日は遠慮させて下さい……。さすがに、柏木のやつがこうも都合よく死ぬと、気味悪くて……」

「なんだぁ、てめえら。おい、それでも貴様ら、本当にこれからも俺と一緒にやってゆく気があるんだろうな……？」

「そ、それは……」

「なんだよ。言いたいことがあるんなら、はっきり言ってみたらどうだ？」

田所が、指の関節を鳴らしながら澤井と権田に迫った。ポキポキと、関節の鳴る音に合わせ、田所の足もまた澤井達に向かって踏み

出されてゆく。

田所の顔は笑っていない。いつもの余裕は当に消え、その顔は本気で相手を叩きのめす時のそれに変わっていた。

澤井も権田も、田所の喧嘩の強さは嫌というほど知っている。単なる腰巾着でしかない澤井はもとより、柔道の経験がある権田でさえ、本気の田所と殴り合いをして勝てる保証はない。

並みの不良では、二、三人が束になっても敵わないような田所の実力。それこそが、田所が土師見第三中学の不良の頂点に君臨する証だった。この学校内で、面と向かって田所と喧嘩をしようという者など存在しない。彼の存在は、ある意味では澤井や権田にとっては絶対者である。

ただ、それとこれとは話は別だ。こんな場所で、八つ当たりから殴られてたまるものか。

なんとか落ち着いてもらおうと、澤井はいつもの調子で田所を説得しようと試みた。しかし、田所は澤井の言葉など耳に貸さず、徐々にその距離を縮めて来る。

ザッ、ザッという足音が、死刑執行までのカウントダウンのように聞こえた。それは、時間にして数秒。決して長いものではない。それにも関わらず、澤井と権田はまるで蛇に睨まれた蛙のように、その身体を硬直させて後ずさるしかなかった。

本気の田所と殴り合いをしたら、今は亡き柏木とメンバーを外れた兼元を入れても相討ちがいいところだろう。その現実が、リアルな恐怖となって澤井と権田を襲う。

徐々に近づく田所の足音。それに気を取られ過ぎたばかりに、澤井と権田は自分の影が、歪な形に歪んで伸びてゆくのに気がつかなかった。

まるで、アメーバのような不定形生物の如く、二人の影が寄りかかっているフェンスに絡みつくようにして伸びた。影はフェンスを止めているネジへとまとわりつき、その拘束が恐ろしい程の速さで緩められてゆく。

気がついた時は、既に遅かった。

田所が二人を殴ろうとした瞬間、ガタッという音と共にフェンスが揺れた。拘束具としてのネジが外れ、二人の体重を支えきれなくなったのだ。

自分の意思とは反対に、身体が後ろに倒れてゆく。まだ殴られたわけでもないというのに、この妙な滑落感はなんだろう。

天地が逆さまに映り、自分の身体が大地に向かって昇って行く。いや、この場合は、落ちて行くと言った方が正しいのか。

どちらにせよ、澤井と権田の二人がその答えを出すことは永遠になかった。

人の身体が大地に叩きつけられる音。鉄柵が大地に当たり、跳ね上がる音。二つの音が昼の校庭に響いた直後、そこは悲鳴と混乱の嵐に包まれた。

固い大地に頭の中身を撒き散らした、澤井と権田の見るも無残に

代わり果てた姿。そして、そんな彼らの墓標のように、校庭に横たわっている鉄の柵。

真昼の校庭で起きた、新たなる惨劇。血と、悲鳴と、狂気の渦に飲まれた現場は、まさに白昼の地獄絵図。

生徒達の日常が崩壊してゆく中、澤井と権田であったものの影が、ゆるゆると動いてその場を離れた。だが、そんな影の動きに目を配れる余裕のある者は、当然のことながら、その場に居合わせてはいなかった。

※　※　※　※　※　※　※

犬崎紅が帰宅した時、そこには既に先客がいた。玄関先では、珍しく臙良が応対をしている。来客など、いつもは多恵に任せていることがほとんどのため、紅にとっては少し意外な光景だった。

「おや、美紅さんの息子じゃないか。今日は、大変な騒ぎになっちまったなぁ」

玄関先で臙良と話していた男が紅の方を振り向いた。眼鏡をかねた、中肉中背の男。温和な顔立ちをしているが、男の着ている服は、間違いなく警官のそれだった。

「あ……どうも……」

咄嗟に言葉が思いつかず、紅は男に向かって軽く頭を下げた。

元村定夫（もとむらさだお）。紅が物心ついた時から、土師見村の駐在所に務める警官である。祖父母はもとより、紅の母親である美紅とも顔見知りであり、昔はよく世話になったのを覚えている。この土師見村において、赫の一族の人間を奇異の目で見ることのない、数少ない住人の一人だった。

「それより、どうして元村さんがここにいるんだ？」

今日の学校で下校中に起きた騒ぎは、紅とて知らないわけではない。屋上のフェンスが外れ、そこに寄りかかっていた二人の生徒が転落死するという惨事があったばかりなのだ。本来であれば、駐在の元村が現場に残るのが普通だろう。

自分に向けられる、紅の訝しげな視線。それに気づいたのか、元村も身体を紅の方に向けて語りだした。

「いや、亡くなった生徒さんには申し訳ないんだがな……。ちょっと、臙良先生のとこに相談しに来たんだよ」

「爺さんにか？」

「ああ、そうだよ。今朝、二中の生徒が変死体で見つかったっていう話は、既に聞いていないかな？　それから半日と経たず、今度は同じ中学の生徒が事故で亡くなった。こいつは、何か妙なもんが動いているんじゃないかと思ってね」

「そんなこと言って、学校の方はいいのか？　事故の原因だって、まだ分かってないだろうし……」

「そっちは、県警のお偉方に任せているよ。それに……」

元村が、今まで紅の方に向けていた顔を再び臙良の方へと戻す。

「もし、本当に物の怪の類が動いているんなら、早目に先生のとこに相談した方がいいかと……まあ、そんなところかな」

「なるほどな。でも、今日の事件が事故だって可能性もあるんだろ？」

「できれば、そう願いたいところだね。こちらの杞憂で済めば、それに越したことはない」

そう言って、元村が紅の肩に手を置いてきた。小柄な体つきに反し、グローブのように大きく、がっしりとした手だった。

「とにかく、今はこの辺も随分と物騒になった。紅君も、夜遅くまで歩きまわって、臙良先生を悲しませるようなことをしたらいかんぞ」

「心配は要らないさ。これでも、一応は用心して生きているつもりだ。色々とな」

「それを聞ければ十分だ。昔、美紅さんには、随分とお世話になったからね。紅君に万が一のことがあれば、とてもじゃないが、仏壇に顔向けできないよ」

元村が、紅の肩を軽く叩いた。

土師見村の駐在である元村が、こうまでして犬崎家の人間に好意的なのにはわけがある。以前、まだ紅の母親が生きていた頃に、土

師見村で神隠しの事件が起きたことがあった。その際、我が子を奪われたのが、他でもない元村だったのである。

村の駐在として、そして何よりも父親として、元村は我が子を連れ去った誘拐犯を探し続けた。しかし、県警の応援まで頼んだにも関わらず、数日たっても何の手掛かりも見つかることはなかった。

快楽目的か、身代金目的か、それとも怨恨によるものか。様々な面から捜査が行われたが、元村の子どもの手掛かりはまったくない。そんな折に現れたのが、紅の母である犬崎美紅だったという。

警察さえも投げ出しそうになった、謎の神隠し事件。周りの人間から好奇と偏見の目で見られながらも、美紅は独自に調査を続けた。そして、美紅が元村に協力を申し出てから三日後の朝、彼女は元村の息子を連れて、彼の前に現れたのだ。

それ以来、元村は犬崎家の人間に対して極めて好意的に接するようになった。今では妙な事件の話を聞きつけると、それを臙良のところへ持って来ることも少なくない。

（それにしても……元村さんが、現場をそっちのけで爺さんを頼って来るなんてな……）

再び臙良と話を始めた元村を横目に、紅は少々遠慮しながら自宅へと上がった。

紅の知る限り、元村は霊感の類など皆無の男である。赫の一族に対しての偏見がないとはいえ、基本的には向こう側の世界ではなく、こちら側の世界で生きる人間だ。

その元村が、転落事故の現場を県警に任せて臙良のところへやって来た。こうなると、村で起きている事件の背後に、なにやらきな臭い物の存在を感じてならない。

いったい、自分の知らないところで何が起きているのか。臙良や多恵は、今回の事件について何を知っているのか。

知ったところで、自分に何ができるわけでもない。そう分かってはいたものの、紅は言いようのないもどかしさを全身で感じていた。それは、赫の一族の血が成せる、本能的な直感なのか。それとも、何か他の超自然的な存在が、自分に語りかけているという印なのか。

そんなことを考えながら廊下を歩いていると、ふと奥座敷の中が目についた。

いつもであれば、殆ど使われることのない奥座敷。そんな部屋であったが、今は退魔具の材料集めに村を訪れている皐月が使っている。寝室兼作業場にしていると聞いてはいたが、それにしては、今日の奥座敷は何やら物々しい様相をしめしていた。

「皐月さん？」

「ちょっと待って！　今、部屋に入られると困るわ！！」

部屋の中に一歩を踏み出そうとしたその瞬間、皐月が紅に背中を向けたまま怒鳴った。いつもの人を食ったような態度とは違い、紅は思わず肩をすくめて踏み止まる。

部屋の中は、天井から吊るされた無数の鈴で埋め尽くされていた。その数は、ざっと数えただけでも百は下らない。いったい、皐月は

どこからこれほどの鈴を集めてきたのか。否、それ以前に、この鈴は何の意味があるというのだろうか。

「な、なんだよ、これは……」

天井から玉簾のように吊るされた無数の鈴。どう見ても、異様としか言いようのない光景である。臙良から魔を祓うための知識を授かっていた紅ではあったが、今回ばかりは皐月の行動に呆気にとられるだけであった。

「ごめんなさいね、紅ちゃん。でも、これも仕事の内なのよ。臙良さんに頼まれて、ちょっとした幽霊探知機を作らなきゃいけなくてね」

「幽霊探知機？　この鈴が、か……？」

「そうよ。詳しいことは企業秘密で話せないけど、まあ、私の使っているフーチの強化版ってとこかしら」

「強化版か。こんなもんまで持ち出さなきゃならないってことは、相当にヤバい相手なのか？」

「そんなところね。悪いけど、これ以上の質問には、紅ちゃんでも答えてあげられないわ。あんまり余計なこと話すと、臙良さんに怒られちゃうから」

「そうなのか……。そういうことなら、仕方ないな」

「ごめんね、紅ちゃん。それと、当分の間、この部屋には近づかないでくれるかしら。この道具、使うのには神経も相当に集中しなく

ちゃいけないから、人の目があると気になるのよ」

「了解だ。朱音にも、気をつけるように言っておく」

「悪いわね。それじゃあ、よろしく」

こちらに向けて軽く指を立てて言った皐月の顔は、いつもの紅をいじって楽しんでいる時のそれに戻っていた。

ここにいても、これ以上は満足な情報は得られないだろう。とりあえず、今は臙良や皐月に任せ、自分は大人しくしているしかなさそうだ。

紅の足音が、徐々に奥座敷から遠のいてゆく。無数の鈴に囲まれたまま、皐月はその音が完全に聞こえなくなるのを待った。

辺りに人がいなくなったことを確認し、再び作業に戻る皐月。襖を閉め、ほっと溜息をついたのも束の間。今度は部屋の隅に束ねてあった、半紙の山を取り出して前に置く。

硯に入れた墨の匂いが、微かに鼻を刺激した。ここから先の作業は、まさに忍耐との勝負である。

道具が完成するのは、恐らく明朝のことになるだろう。これからのことを考えると気が重かったが、それでも休んでいる暇などない。

手にした筆の先に墨をつけ、皐月は目の前の半紙に向かい、大きく第一筆を書き出した。

※　※　※　※　※　※　※

月隠り（つきこも）。古来より、月の末日を示す言葉である。本来であれば、それは新月を指す言葉。九月の半ばにさしかかった辺りでは、まだ月隠りというには少し早い。

しかし、それを抜きにしても、その日の晩はやけに暗い夜だった。空一面が真っ黒な雲で覆われ、月どころか星さえも見えない。生温かい風が吹き上げるようにして空へと昇り、今にも雨が降り出しそうな気配である。

自室の畳に寝転がりながら、田所隆二は今日の学校であった出来事を思い起こしていた。

今朝、登校するや否や伝えられた、柏木の死。そして、屋上で起きた澤井と権田の転落事故。

霊的な存在など信じていない田所ではあったが、さすがにこうも仲間が不審な死に方をすると、不気味で仕方がなかった。しかも、その死は全て、あの犬崎紅に屋上で暴行を加えた後に起きているのだ。

――――赫の一族には手を出すな。

村の老人達が、幼い頃から自分に言い聞かせて来た言葉が頭をよぎる。祖父母だけでなく、両親からも強く言われてきたことだ。理由は教えてもらえなかったが、この話をする時だけは、周りの大人

の顔が妙に真剣だったことを覚えている。

呪いなどはありえない。祟りなどは迷信に過ぎない。今まではそう思ってきた田所だったが、ここ最近、自分の身の回りで起きていることは明らかに異常だ。

犬崎紅は、本当に自分の仲間を呪い殺したのか。だとすれば、いったいどのような手で。考え出せばきりがなかったが、いくら考えたところで、田所には真実など分かりそうになかった。

柏木、権田、澤井と死に、残されたのは自分と兼元のみ。ただ、紅を屋上に呼び出した際、兼元はその場にいなかった。すると、次に死ぬ可能性が高いのは、やはり自分ということになるのだろうか。

気がつくと、指先が微かに震えているのが分かった。認めたくはなかったが、田所は直ぐに、それが恐怖心から来るものであると理解した。

今までも、恐怖に打ち負けそうになった時は何度もある。明らかに体格差のある上級生と喧嘩をし、互いにどちらも満身創痍になるまで殴り合った時など、本当に殺されるのではないかと思った。また、父親のバイクを勝手に持ち出して乗り回し、事故に遭った際も、一瞬だが死を覚悟した。

しかし、今の自分を覆っている恐怖は、そのどれにも当てはまらない。得体の知れない存在が、こちらの知らない圧倒的な力を用い、あらゆる場所で命を狙っているかもしれないのだ。

逃れようのない運命。抗いようのない絶対者。その存在が目の前に現われた時、自分はただ成す術もなく狩られるだけなのだろうか。

「ったく……。冗談じゃねえぞ……」

誰に言うともなく、田所はそう呟いて起き上がった。部屋の隅に立てかけておいた金属バットを握り、畳の上に胡坐をかいて座る。

「来るなら来てみろよ、犬崎……。俺は、そう簡単にやられはしねえからな……」

その言葉が虚勢だということは、田所自身にも分かっていた。ただ、何かしていないと落ち着かなかっただけだ。何の抵抗も示さず、気がつけば命を狩られていたなどまっぴらごめんである。

夜の風が、部屋の窓ガラスを乱暴に叩いた。空の雲は物凄い速度で流れていたが、決して月が姿を見せることはない。黒雲は、山の向こうから次々と運ばれてくる。まるで、田所を出口のない暗闇の中に閉じ込めんとしているように、一向に途切れることはなかった。

どれほどの時間が経ったのだろうか。時計を見ると、短針は既に夜の二時を指していた。家の者はとっくに寝静まり、今の時間に起きているのは自分のみだ。

さすがに、今日は何も起きないか。立て続けに仲間が妙な死に方をしたので、少し神経質になっていただけかもしれない。そう、田所が思った時だった。

一際強い風が、田所の部屋のガラスを叩いた。瞬間、物凄い音がして、窓にはまっていたガラスが粉々に砕け散る。

「痛っ……！！」

左腕に鋭い痛みが走り、田所は思わずそこに手をやった。生温かい、それでいてぬるっとした感触。どうやら飛んできたガラスの破片で、腕を切ってしまったようだった。

金属バットを手に、田所はゆっくりと立ち上がり部屋の奥に下がる。割れたガラスの向こう側からは、気味悪い程に温い風が、まるで部屋の空気を侵食するようにして吹きこんでくる。

風の一撃でガラスが割れる。それだけでも異常なことではあったが、田所を襲う怪異は止まることを知らなかった。部屋の電気が明滅したかと思うと、今度は天井から吊るしてある蛍光管が音を立てて砕け散った。粉のようになったガラスの破片が、パラパラと部屋の中に降り注ぐ。

いったい、自分の周りで何が起きているのか。これは、本当に犬崎紅の呪いなのか。

頭が混乱し、自分でも何を考えているのか分からなかった。ただ、次に何が襲ってきてもいいように、手にしたバットを強く握りしめるだけだ。残された、机の上にあるスタンドの明かりだけを頼りに、田所は自分の周りに意識を集中する。

――――クス、クス、クス……。

後ろで誰かが笑うような声が聞こえた。全身の毛穴が広がり、冷たい物が背中を這ってゆくのが分かる。

自分の後ろにあるのは壁だけだ。では、今の笑い声はどこから聞こえてきたのだろう。否、それ以前に、声の主はいったい誰なのか。

――――クス、クス、クス……。

また、声が聞こえてきた。先ほどは風の音に混じって消えてしまいそうな声だったが、今度は田所の耳にもしっかりと響いた。

「だ、誰だ！　どこにいやがる！！」

暗闇の中、田所はバットを振り回しながら叫んだ。

明らかに、この部屋に自分以外の者がいる。そう分かっているにも関わらず、手にしたバットは虚しく空を切るばかりだ。

身体の奥からにじみ出て来る脂汗が、じっとりとシャツを濡らしていた。暗闇の中でぼんやりと光るスタンドの明かりが、そんな田所の身体を照らしている。

淡い、オレンジ色をした白熱電球の明かり。それが田所の身体に当たり、部屋の中に影を作る。

温く、生臭い風が吹いたと同時に、影が動いた。田所はその場から動いていないにも関わらず、影だけが彼の足元から離れたのだ。

部屋のかべに伸びた背丈の高い影の男。それは、かつて田所自身の影であった者。だが、いまその影は、田所の身体を離れてゆっくりと揺れている。あたかも自分の意思を持っているかのように、壁

の中からこちらを凝視しているのだ。

ぬるっ、という音がして、影が盛り上がった。人の形を崩さぬまま、影は徐々に田所の部屋の中に実態を現して行く。

もう、目の前で何が起きているか、田所にはまったく分からなかった。ただ言えるのは、これが自分の理解の範疇を越えた何かであるということだけだ。

壁から抜け出した影が、完全に人の形となった。その顔にあるのは、赤銅色の二つの瞳。他には眉毛も鼻もなかったが、口だけは大きく耳まで裂けている。そして、その三日月のような形をした口の中には、白銀の牙がびっしりと並んで顔を覗かせていた。

≪オマエニモ……≫

影が、田所に語りかけて来た。口を動かして言葉を放ったのではない。心の中に直接語りかけてくるような、そんな感じだ。

≪オマエニモ……アジワワセテヤロウ……。ミヲヤカレル、イタミ……クルシミヲ……≫

影の口の中が、妖しい緑色に光って見えた。思わずバットを握りしめて後ずさる田所。

戦おうなどという気は、とうの昔に失せていた。身体が震え、両手を上げることさえ敵わない。いつもの尊大な不良の姿は、完全に影を潜めている。

次の瞬間、影の口から突如として緑色の炎が放たれた。それは部

屋の暗闇を不思議な色に染めながら、瞬く間に田所の口の中に吸い込まれてゆく。

「がっ……あぐっ……」

何かを口にしようとしたが、それは炎の勢いによって遮られた。影の吐き出す緑の炎は、田所の意思とは関係なしに、彼の口と鼻を犯した。

口が焼け、喉が焼け、最後は胃袋全体を焼き尽くされているような痛みが田所を襲った。手にしたバットを落とし、田所はひたすらに喉をかきむしりながら呻く。が、それでも影は容赦なく、彼の身体の中に炎を送り続けた。

やがて、全ての炎が吸い込まれてしまうと、影は満足そうに笑って田所を見た。

既に、田所に立っているだけの力は残されていない。その場で無様に膝を折り、両手をついて畳の上に這いつくばっている。

「はぁ……はぁ……」

荒い息が、田所の口から止め処なく洩れる。額から流れ出る脂汗が、鼻筋を通って畳に落ちた。

ふと、顔を上げて見ると、先の影が嘲笑するようにしながら田所を見下ろしていた。

影の口が、再び歪な笑みを浮かべる。それに呼応するようにして、田所は自分の身体の中から何かが溢れ出そうとしているのを感じた。

「うっ……ぐあぁぁぁぁっ！！」

突然、田所が悲鳴を上げて畳の上を転げ回った。全身が熱く、中から焼き焦がされてゆくような痛みが田所を襲う。

口から、鼻から、耳から、そして最後は全身の毛穴という毛穴から、田所は緑色の炎を噴き出して絶叫した。

もう、痛みという感覚は当に通り越している。あるのはただ、その身を内から焼かれる恐ろしいまでの苦痛。地獄の業火に焼かれると言った方が相応しい、心まで焼き尽くさんとする灼熱の責め苦。

≪ヤカレルガイイ……ソノ、ケガレタタマシイゴト……≫

影の言葉が、再び田所の頭の中でこだました。が、それを聞いても、既に返事さえ満足に返すことができない。

≪ウフフフ……。アハハハハッ……。アハッ……アハハハハハッ……！！≫

鼓膜を引っ掻くような狂笑が、田所の頭の中に響き渡る。その笑い声を聞きながら、田所の精神は炎に焼かれ崩壊していった。

※　※　※　※　※　※　※　※

その日は金曜日であったが、学校は一足先に休講となっていた。

早朝になって判明した、田所隆二の死。柏木、澤井、権田に続き、僅か数日の間に四人もの生徒が亡くなったことになる。

発見された際、田所は、自宅の部屋で仰向けになったまま死んでいた。死因は不明。柏木のように内臓が液化していたわけでもなく、澤井や権田のような事故死でもない。死亡の原因は未だ不明のままであったが、突発的な心臓発作というのが公に発表された見解だった。

夏休みが明けて一カ月と経たず、土日を含めた三連休が訪れた。が、休みを謳歌するような学生の姿はなく、村全体が一種の異様な空気に包まれていた。

中学生の、相次ぐ謎の不審死。その内の二つは事故死だとしても、残る二つの直接的な原因は分からずじまい。過疎の進む田舎の小さな村で起きた事件としては、あまりにも異質。これでは、村人が恐れをなして外出を控えるというのも無理はない。

重苦しい気分のまま、土師見の村は週末を終えた。警察の捜査も虚しく、田所や柏木が死んだ原因については判明しないままだった。

月曜日、犬崎紅は、いつもの通りに学校へと向かった。祖父母や皐月は相変わらず今回の事件に難色を示していたが、紅には何も語ってくれない。もっとも、いつまでも気にしていたところで答えなど出ないため、時間と共に学校へ行くしかないのだが。

校門をくぐり教室へ入ると、紅は部屋の空気が何やら違っていることに気がついた。否、正確には部屋の空気が違っているのではない。紅に対する周囲の視線が、明らかに先週とは異なっていたのだ。

その特異な容姿と家柄故に、今までも他人から疎まれ、差別されることは幾度となくあった。しかし、それにしても今日の教室は異常だ。クラスメイト達のほぼ全員が、紅のことを、まるで悪魔か怪物のように恐れている。少し側を通っただけで、恐怖に慄いた顔をしながら紅の前から去って行くのだ。

週末を挟み、明らかに変わってしまった周りの態度。その原因さえも分からないまま、予鈴と共に紅は自分の席に着いた。

教室に担任の教師が入り、朝の簡単な学活を行う。配布物として、何やら学校からの連絡事項が書かれた手紙が配られる。先頭の机に座っている生徒から、それを後ろの生徒に渡す形で回していった。

どこにでもある、朝の学校で見られるような平凡な光景。しかし、最後尾である紅のところまで、その手紙が回ってくることはなかった。

教師が枚数を間違えたのか、それとも前の生徒が寝ぼけているのか。不思議に思って前の席を覗きこんでみたが、手紙はきちんと机の上にある。紅の分と、その生徒の分で、しっかり二枚だ。生徒自身も決して眠っているわけではなく、意識があることは後ろから見ている紅からもはっきりと分かった。

「おい。手紙、こっちにも早く回してくれないか？」

遅々として手紙を渡さない前の席の生徒に、紅は少々苛立った口調で言った。だが、その声が聞こえているのかいないのか、生徒は黙ったまま何も言わず、また動くこともなかった。

これはいったい、どういうことか。今までも周囲から煙たがられ

ることはあったものの、ここまで露骨に無視をされたのは初めてだ。

そうこうしている内に、再び始業ベルの音が教室に響いた。どうやら一限の授業が始まる時間になってしまったらしく、担任は教卓の上の物をまとめて部屋を出ていった。こうなってしまうと、もうどうしようもない。

仕方なく、紅は授業の準備をして時が過ぎるのを待った。そもそも教師の話など、最初から聞いてはいない。勉強など、一人で静かにやった方がいいという考えは、昔から一貫している。

異変を強く感じるようになったのは、その日の休み時間からだった。どの生徒も、紅に対して今まで以上に避けるような仕草を強めている。半径一メートル以内に人が寄って来ないと言っても過言ではない。

さすがにこれは、紅にもこたえた。もとより、他人とは深く関わろうとも思わなかったが、存在そのものを無視されるのは、やはり辛い物がある。自分がそこにいるにも関わらず、初めからいないように振舞われるのは、決して気持ち良いものではない。

部屋の空気、生徒の様子、そして自分に投げかけられる視線。何もかもが異常だった。これは、畏怖などというものではない。そこにあるのは絶対的な拒絶。畏れ、敬う感情ではなく、紅自身を禁忌の存在として見るかのような、冷たい目。

このまま教室にいても、気分が悪くなるだけだ。そう思い、紅が席を立った時だった。

「ちょっと、犬崎君」

突然、後ろから自分の名を呼ぶ声がした。そういえば、今日になって、初めて学校で名を呼ばれた気がする。

振り向くと、そこに立っていたのは萌葱だった。意外そうな顔をしている紅を他所に、彼女は手にした紙を突き出すようにして紅に手渡す。

「はい、これ。今朝の学活で、手紙、もらえなかったんでしょう？　だから、私が代わりに受け取っておいたわよ」

「それは、わざわざご苦労だったな。だが、俺にとってはいつものことだ」

「何言ってるの！　そんなこと言ったって、今日のあれは、さすがにやり過ぎよ！！」

いつになく憤慨した様子で萌葱は言った。確かに今日のクラスメイト達の様子は変だったが、それと彼女が怒ることに、何か関係があるのだろうか。

「なあ……。お前、どうしてそこまでして怒るんだ？　俺がクラスの連中から避けられていることなんて、今に始まったことじゃないだろ？」

「それは、確かにそうかもしれないけど……。でも、今日のそれは、今までのこととは違うのよ。犬崎君も、薄々は気づいているんじゃないの？」

「それは……」

言い返すことはできなかった。萌葱の言っていることは、確かに紅も感じていたからだ。

「はぁ……。その顔じゃ、どうやら学校で広まっている噂までは知らないみたいね」

「噂だと？」

「そうよ。犬崎君が知らないって言うんなら、私が説明してあげるわ」

「お、おい……！！」

萌葱が紅の手を取り、いきなり小走りに歩きだした。周囲の視線が思わず気になったが、周りの生徒達は何事もなかったかのような様子で紅達の横を通り過ぎて行く。いや、むしろ、目を合わせることさえも避けていると言った方が賢明か。

廊下に出ても、紅と萌葱の周りにいる生徒達の態度は変わらなかった。萌葱は半ば強引に紅の腕を引くと、二年の教室のある場所を離れ、三年の教室に向かう。

「ほら、あれよ……」

萌葱に引かれて来た場所は、三年二組の教室だった。言われるままに教室の中を除くと、何やら数人の生徒が固まって噂話をしているようだ。その中心にいる男子生徒の顔には、紅も見覚えがあった。

「あいつは……」

兼元一也。忘れもしない、あの旧校舎の探索で紅が助けた生徒である。先回りして紅を脅かそうとしたものの、逆に狢の霊に脅かされ、それ以来すっかり腑抜けてしまったとのことだった。そう言えば、田所に屋上に呼び出されて向かった際にも、兼元の姿だけはなかったような気がする。

以前に顔を見てから一週間ほどしか経っていないにも関わらず、兼元の顔は妙にやつれているように見えた。まるで何日も寝ていないかのように、目の下には大きな隈がはっきりと見て取れる。それは、狢の霊に脅かされたからだけではないだろう。

「あの人が、妙な噂を流している張本人よ。なんでも、犬崎君に触れると祟りがあるとか何だとか言って、周りの人を怖がらせているみたいね」

「なるほど、そういうことか。しかし……どうしてまた、今さらになってそんな噂を流したんだ？」

「犬崎君に元不良仲間達が酷い事をした後、次々に死んだでしょう。それで、急に怖くなったんじゃないかしら？　昔はけっこう頭も良くてクールな先輩だったらしいけど、今じゃあ見る影もないわね」

萌葱は辟易した様子で言っていたが、紅は何も言わなかった。

ここ最近になって立て続いた、相次ぐ不良の不審死。それについて、思い当たる節がないわけではない。

はぐれ神。臙良が口にしていた、主を失い暴走した下級神の存在。そんな物がこの土師見村で暴れまわっているのだとすれば、祟りと

いうのもあながち間違いではない。

「なあ、野々村……」

教室の中で話を続けている兼元から、紅は萌葱に目を移して口を開く。

「お前は、実際にどう思っているんだ。やはり、俺が田所達に復讐したと考えているのか？」

「そんなこと、間違ってもあるわけないでしょ。だいたい……呪いだの祟りだの、そんな話で人を差別するなんて、馬鹿馬鹿しいにも程があるわよ」

「だが、この村は昔から、そういった慣習に支えられてきた村だ。今の状況で俺と一緒にいれば、お前も変な目で見られることになるぞ」

「別に、そんなの構わないわよ。私も、この村の中じゃあ他所者みたいなものだしね」

「変わったやつだな、お前は。自分から好奇の目に晒されることを望む人間なんて、そういるもんじゃないぞ」

「それは、お互い様でしょ？　まあ、とりあえず……今日みたいなことで困ったことがあったら、まずは私に言ってちょうだい。学級委員として、できるだけのことはするつもりだから」

「すまないな、野々村。なんだか、妙に気を使わせたみたいで……」

「気にしない、気にしない。それよりも、もうすぐ次の授業が始まるわよ。早く、教室に戻りましょう」

廊下から兼元のいる教室の時計を覗き見て、萌葱が少し慌てた様子で言った。自分達の教室までは歩いても間に合う距離だったが、紅と萌葱は互いの顔を見合わせると、共に早足でその場を立ち去った。

〜 六ノ刻　闇想 〜

天井から無数の鈴が吊るされた部屋の中で、鳴澤皐月は瞑想を続けていた。

狗蓼朱鷺子の死をきっかけに起き始めた、謎の中学生の連続不審死。その裏で蠢く闇の存在を捕えるために、皐月は犬崎邸の奥座敷そのものを道具として作り変えていた。

座敷の畳に、所狭しと置かれた半紙。その上には筆で様々な線や地名が書かれている。個々に見ても何を意味するのかは分からなかったが、繋げて見れば、すぐにそれが地図だということが分かった。

バラバラの半紙を繋ぎ合わせるようにして作られた、土師見村全体の地図。天井から吊るされた鈴と相俟って、その光景は見るからに異質だ。

皐月が座っている座布団の置かれた場所は、地図の上では犬崎邸のある場所である。即ち、彼女が今いるこの場所のことだ。

全身に流れる気を集中し、皐月はそれを部屋の各所にある鈴へと送り込む。一見して何の変哲もない鈴であったが、これは列記とした彼女の商売道具であった。

退魔具師という仕事柄故に、皐月は向こう側の世界の住人と直接戦うための力は弱い。しかし、現世か常世かを問わず、気を探って何かを見つけることに関しては、優秀な力を持っていた。

通常、皐月が探索に用いるのは小型の振り子である。鎖の先に円

錐のような金属がついたもので、これに気を流し込んで対象の物を探したり鑑定したりする。霊能者としての潜在意識に強く働きかけることで、邪悪な気配をや穢れた物を感知することを得意としている。

今、この奥座敷に吊るされた鈴は、その一つ一つが皐月の用いる振り子と同じ役割を果たしていた。半紙に描かれた地図は、土師見村そのものを表したもの。もし、この村の中で極めて強い陰の気を持った者が動きまわれば、部屋に吊るされた鈴が反応して鳴り響く。鳴っている鈴の真下にある地図の場所が、陰の気を持った者が現れた場所ということになる。

正直なところ、これだけ大掛かりな道具を使うのは、さすがの皐月でもかなり骨が折れた。振り子を一つ使うだけでもかなりの集中力を要するが、今回は部屋全体に吊るされた鈴の全てに意識を集中せねばならない。おまけに、いつ相手が活動し始めるか分からないとなると、どうしても数時間は部屋にこもって瞑想を続けることになる。

先週の金曜から、皐月はこの部屋に籠りきりで探索を続けていた。だが、土日を挟み数日が経過しても、相手は一向に動く気配を見せていない。

気がつけば再び週末を迎え、その間には何の進展もなかった。今まで相次いで起こっていた不審死も、ぱったりと収まってしまっている。

敵はもう、この村を離れてしまったのだろうか。いや、それはありえない。少なくとも二名の中学生、それも同じ学校にいる不良が変死した時点で、敵はこの村に住まう何者かに憑いている可能性が

高い。

では、仮に悪霊にとり憑かれているとして、それはいったい誰なのか。残念ながら、皐月にはそこまでのことは分かりそうになかった。今できることは、敵が次の獲物を見つけて行動を起こした際に、迅速に対応するための策を講じることだけだ。

一時間、二時間と座っている内に、皐月の顔にも疲れが見え始めた。もとより、彼女は道具作りが専門である。霊の探索にしても、決して本業というわけではない。

今日は、もうこの辺りで休みを取るか。そう、皐月が思った時だった。

「おや、まだ頑張っていたか」

部屋の襖がスッと開き、その向こう側から聞き覚えのある声がした。目を開けてみると、そこに立っていたのは紅の祖父である臙良だった。

「あら、臙良さん。もう、交代の時間かしら？」

「いや、まだ時間までは一時間程あるがね。しかし、さすがにお主も疲れたのではないか？　昼間からこんな部屋に何時間も閉じ籠っていては、身体に毒じゃぞ」

「それは、仕方ないわ。臙良さんも、紅ちゃんの学校で起きた事故のことはご存じでしょう？　もし、あれもはぐれ神の仕業だとしたら……朝であろうと昼間であろうと、気を抜くことは許されないわよ」

「確かに、それはそうじゃがのう……。それでも、お主は元々退魔具師じゃ。この仕事は、本来であれば、わしが一人でこなさねばならんことよ」

そう言うと、臙良は皐月に部屋を出るよう促しつつ、自分が皐月の座っていた座布団の上に腰を下ろす。そして、先の皐月と同様に、大きく息を吸い込んで瞑想の準備を始めた。

「ところで……」

部屋を出る前に、皐月が思い出したように振り返って臙良に尋ねる。

「紅ちゃんは、今日はどこへ行ったのかしら？」

「紅のやつなら、朱音を連れて村の祭りに出かけておるよ。朱音も母親を亡くしたばかりじゃからの。少しでも、気が紛れれば良いという考えじゃ」

「お祭りか……。そういえば、今日は秋祭りの日だったわね。まさか、あんな騒ぎの後に祭りを開くなんて、ちょっと意外だったけど……」

「いや、そうとも言い切れんよ。祭りは神事故に、穢れを祓う作用もある。妙な事件が起きたからこそ、祭りでその穢れを祓いたいと思うのも人の心よ」

「なるほど、そういう考えもあるわね」

臙良の言葉に、皐月は妙に納得した顔をして頷いた。

土師見村では、毎年九月の半ば頃に、恒例の秋祭りが開かれる。村の祭りと言うと伝統的な秘祭のような物を思い浮かべがちだが、村の成立した経緯に反し、土師見の祭りは至極普通の祭りだった。

昼間、神輿を担いで村々を回り、夜は太鼓や笛の音が響く中に様々な屋台が顔を出す。麓の町で開かれる秋祭りと、何の違いがあるわけでもない。

「それはそうと、お主は祭りに行かんのか？　ここ一週間ほど、この部屋に籠ってばかりじゃったろう。少しは気分を変えぬと、身体に良い気が流れぬぞ」

「残念だけど、今回は遠慮させていただくわ。仕事も溜まっちゃってるし……それに、紅ちゃんと違って、一緒に行くような相手もいないしね」

「まあ、そう言うでない。あまり肩肘を張り過ぎると、本当に身体に悪いぞ。ここはわしに任せ、お主も少しは気の流れを変えた方が良い」

口では軽く言っているだけだったが、臙良の言っていることは事実だった。それだけに、皐月もこれ以上の反論をすることはない。

振り子一つならばいざ知らず、部屋中に備え付けた鈴に意識を集中させるのは相当な精神力を要するものだ。それを、かれこれ一週間近くも続けていれば、体内の気が枯れるのも頷ける。

……

向こう側の世界と関わる者にとって、気の枯渇は深刻な問題だ。

体内の気が枯れた状態で霊的な存在と戦えば、臙良とて無事では済まない。ましてや、皐月は本来であれば道具を作る職人の様な存在である。これ以上、気の枯れた状態で事件に巻き込んでしまうことは、さすがに臙良にも気が引けた。

「それじゃあ、ここはお言葉に甘えて、少し羽を伸ばさせてもらうことにするわ。臙良さんも、あまり無理したらだめよ。もう、いい歳なんだから」

「まったく、言ってくれるわい。こう見えても、若い頃と比べて力の減退は感じておらんつもりなんじゃがな」

「冗談よ。それじゃあ、後はよろしく頼んだわね」

臙良の意図を汲んでか、今度は皐月も彼の考えを承諾したようだった。

襖が閉じられ、奥座敷に再び静寂が訪れる。気を取り直し、臙良は座禅を組んで意識を鈴に集中した。

はぐれ神。下級の神が人の手を離れ、悪霊と化した存在。そんな物を、みすみす野放しにしておくわけにはいかない。今は大人しくしているかもしれないが、何時再び、人間に牙を向けるか分からないのだ。

この戦いは、下手をすれば思った以上の持久戦になるだろう。それだけに、焦りは禁物だ。

あまり長引かせたくないと思いつつも、臙良は大きく息を吸い込むと、部屋の天井から吊るされた鈴の一つ一つに意識を集中させ始

めた。

※　※　※　※　※　※　※

祭りの空気というものは、時に人の心を無条件に高揚させるものだ。宵闇のなか、どこか懐かしい音楽と赤い提灯の光に囲まれていると、それだけで楽しい気分になってくるから不思議なものである。

様々な屋台の立ち並ぶ秋祭りの会場で、紅はふと、そんなことを考えた。朱音の母親が亡くなり、さらには田所を初めとした不良グループが次々に変死したものの、祭りだけは昨年と変わらずに行われている。まるで、そんな出来事は全て夢の中の話であるかと言わんばかりに、往来する人々は祭りを楽しんでいた。

最初、祭りの話を聞いた時は、はっきり言って乗り気ではなかった。人が亡くなった後ということもあり、また学校で妙な噂に振り回されていたことも相俟って、しばらく一人でいたいとも考えていた。

しかし、実際に祭りの場に来てみれば、そんな気分は消し飛んだ。村祭りの空気は紅も嫌いではなかったし、何よりも朱音の気分転換になっているのは幸いだった。

横を見ると、朱音が先ほど買った綿菓子を食べながら、紅の袖を引いていた。いつもは控えめで大人しい朱音だが、さすがに今日は気分が高揚しているようだ。

「ねえ、紅君。次は、どこに行こうか」

「俺は、別にどこでも構わない。朱音の好きなところに行くんでいいぞ」

「そうだなぁ……。それじゃあ、あれ、やってみたいかも」

そう言って、朱音が指差した屋台へと目を移す。そこで行われていたのは射的だった。

「あれは、ちょっと難しいんじゃないか？　まあ、やりたいって言うんなら止めはしないが……」

「だったら、一緒にやろうよ。私、下手かもしれないけど……紅君、教えてくれる？」

「仕方ない……。ちょっとだけだぞ」

正直なところ、紅は射的には自身がなかった。運動神経や動体視力は人並み以上の物を持っているが、銃の類など玩具でも使ったことがない。剣の腕は優れていても、飛び道具に関してはさっぱりである。

素人同然の人間が、そう簡単に景品など手に入れられるはずがない。分かってはいたが、朱音の頼みを無下に断るわけにもいかなかった。

幸い、財布の中身にはまだ余裕がある。朱音と一緒に屋台の店主に金を払うと、紅は渡された銃を構えて狙いをつけた。

一発目。

弾は大きく的を外れ、明後日の方向に飛んでいった。やはり、自分は銃に関しては素人同然だと改めて思う。

二発目。

これも外れ。しかし、後少しのところで的を掠め、狙いとしては悪くなかった。自惚れるわけではないが、早くもコツがつかめてきた気がする。

三発目。

今度こそ、弾は見事な軌道を描き、狙っていた景品を叩き落とした。とはいえ、紅が落としたのは一番前の列にある小さな菓子の箱。最初から、後列に並んでいる大物は狙っていなかったのだ。堅実と言えば堅実だが、決して威張れるような記録ではない。

とりあえず、初めてにしては上出来か。その程度にしか考えていなかった紅だったが、朱音の目には違って見えたようだった。

「やったね、紅君。やっぱり紅君は、私と違ってなんでもできちゃうんだね」

「別に、そんなんじゃないさ。たまたま、運がよかっただけだろ？」

謙遜などではなく、これは事実である。しかし、朱音は納得しなかったようで、訝しげな顔をしたまま紅を見ていた。

「ねえ、紅君……」

突然、朱音が尋ねてきた。射的の銃を横に置き、下から見上げるような視線を紅に送る。

「私にも、コツを教えて欲しいんだけど……駄目、かな……？」

上目づかいに、せがむ様にして朱音が紅に縋る。思わず、いつぞやの晩に添い寝をして欲しいと言ってきた際のことを思い出してしまい、顔が赤くなる。いつもは真正面から見ても何とも思わない朱音の顔だが、この目つきだけは反則だろう。

「しょうがないな……。だったら、その銃をちょっと貸してみろ。俺が構え方を見せてやるから、それを見て真似したらどうだ？」

「そ、そう……。でも……できれば、私は紅君に、一緒に構えてもらいたいんだけど……」

「一緒にって……まさか……」

「うん。私が構えるから、紅君が後ろから支えて。そうすれば、上手く行きそうな気がするから」

朱音の言わんとしていることが分かり、紅は思わずその視線を朱音からそらした。

銃を構えた朱音を後ろで支える。それは文字通り、朱音に手取り足取り銃の構え方を教えるということに他ならない。

以前であれば何も思わずに、紅も朱音に触れることができただろう。しかし、ここ最近の朱音の行動を思い出すと、妙に変なことを意識してしまっていけない。どうも、あの防空壕での告白依頼、自

分は朱音を昔のように扱えなくなってしまった気がする。

「なあ、朱音……。お前、本気で言ってるのか？」

「私は本気だよ、紅君。それとも……私と一緒じゃ、やっぱり迷惑かな？」

再び、朱音が上目づかいに紅を見た。何度も言うが、やはりこれは反則だ。こんな風にして頼まれたら、いかに紅とて断るに断れなくなってしまう。

結局、朱音に言われるままに、紅は彼女の後ろで両腕を支えてやることになってしまった。朱音の後ろに立ち、銃を構えた朱音の手に自分の手を重ねる。身体と身体が密着し、どうしても相手を意識せざるを得ない。

心臓の鼓動が早まっているのが、自分でもはっきりと分かった。朱音の手に添えている自分の手にも、妙な力が入っている。これでは、とても朱音の射的のサポートをするどころではない。

朱音が狙っていたのは、一番奥の列にある人形だった。距離も遠く、おまけに的の重さもある。的確に重心を崩すような場所に弾を当てなければ、倒すことは難しい。

「こんな感じでいいのかな、紅君？」

標的に狙いをつけながら、朱音が聞いてくる。そんなことを言われても、分かるはずもない。なにしろ、こちらも射的に関しては素人同然なのだから。

「たぶん、大丈夫じゃないか。とりあえず、今の狙いで撃ってみろよ」

的確なアドバイスなど、できるはずもなかった。本来は朱音の補助に回るべきなのに、自分の方が緊張してしまっている。こんなことでは、大物を撃ち取ることなど夢のまた夢だ。

果たして、そんな紅の予想は正しく、朱音の撃った弾は大きく的を外れてしまった。三発の弾を撃ち尽くし、朱音はしょんぼりした様子で項垂れている。店主から残念賞の飴をもらったが、まだ納得がいかないようだった。

「ごめんね、紅君。せっかく手伝ってもらったのに、無駄にしちゃった……」

「いや、そんなことはないぞ。それに、上手く手伝ってやれなかった俺にも責任はある」

謝らなければならないのは、むしろこちらの方だ。変に朱音のことを意識してしまい、朱音を支えてやるどころではなくなっていたのだから。

射的の屋台を離れ、紅は朱音と一緒に再び広場を歩いて回る。露店のほとんどは食べ物を売っていたが、今は何かを口にしたい気分ではなかった。

気分転換をさせるつもりで連れて来たのに、朱音をがっかりさせたまま帰ったのでは意味がない。ここは一つ、何か彼女を喜ばせるようなことをしてやらねば。

そう思い、紅は目の前にある露店の店先を見た。そこに売られていた物を見て、思わずこれだと確信する。

店の前には、幸いにして人は少なかった。紅は朱音を待たせると、自分は財布を握り締めて店の前へと向かった。

程なくして、紅は朱音のところへ戻って来た。その手に握られているのは、赤い花柄の髪飾り。不思議そうな目でこちらを見ている朱音を他所に、紅はそれを彼女の頭にそっとつけてやった。

「紅君……！？　これ……」

「さっき、射的で満足に支えてやれなかったからな。代わりと言ったらあれだが……お前にやる」

「えっ……いいの？」

「俺がやりたいからやるんだ。それとも、気に入らなかったか？」

「ううん、そんなことないよ。ありがとう、紅君……」

咄嗟の思いつきで買ったものだったが、朱音は喜んでくれたようだった。嬉しそうに笑う彼女の顔を見ると、こちらも買った甲斐があるというものだ。

祭りの終わりまでは、まだ少しだけ時間がある。朱音も気を取り直してくれたようだし、もう一回りしてみるか。そう思い、紅が足を踏み出した時だった。

「あっ、犬崎君！！」

聞き覚えのある、妙にはつらつとした少女の声。声のする方に顔を向けると、そこには彼の良く知る人物が立っていた。

「なんだ、野々村か。お前も祭りに来ていたんだな」

「なんだとは、随分な御挨拶ね。相変わらず、無愛想なのは変わりないわね」

声の主は萌葱だった。浴衣に着替えた彼女の姿は、いつにも増して大人びて見える。それは、学級委員としての彼女が持つ、真面目な印象から来るだけのものではないだろう。萌葱は紅と同じく中二だったが、今の姿だけ見れば、高一くらいの年齢に見えなくもない。

「でも、元気そうで安心したわ。ここ最近、学校の人達が露骨に犬崎君のことを避けてたからね。登校拒否にでもなったら、どうしようかと思ったわよ」

「そんなことなら、無用な心配だ。生憎と、俺はそこまで柔な人間じゃない」

「それだけ憎まれ口が叩けるなら、まったく問題なさそうね。まあ、私の知ってる犬崎紅は、こんなことくらいじゃ折れないって思ってはいたけど」

「これはまた、俺も随分と過大評価されたもんだな。まあ、それでも、ある意味では当たっていると言えるか……」

自嘲気味な笑みと共に、紅は萌葱に返した。しかし、本心からそう思っていたかと言えば、決してそんなことはない。

月曜から週末までの一週間ほど、紅が学校で執拗に避けられるという状況は続いていた。存在そのものを否定される程に露骨な無視をされ、教師もそれに対して全く注意をしない。全ては兼元一也の流した噂が原因だったが、それにしても今回の件は紅も辟易するものがあった。

今までも人から避けられることはあったが、それでも最低限のコミュニケーションは取れていた。こちらの内面に触れることはなくとも、学校生活を送る上で支障がない程度の関わりは保てていた。

ところが、今回に限っては、クラスメイトの無視は徹底し過ぎていた。それこそ、萌葱のフォローがなければ、満足に学校生活を送ることさえもできない程に無視をされ続けたのだから。

正直、最初は鬱陶しいと思っていたが、今では萌葱に感謝していた。彼女が自分の何に興味を持ったかは知らないが、四面楚歌な状況での助け船は素直に嬉しかった。

「ねえ、犬崎君。お取り込み中のところ悪いけど、ちょっと私につき合ってくれるかしら？　別に、大したことじゃないんだけど……」

時折、紅の横にいる朱音の方を見ながら、萌葱が遠慮がちに聞いてきた。これが他の人間の頼みであれば、すっぱりと断ってしまうところだろう。だが、萌葱に多少なりとも恩義を感じていた紅としては、断る理由はない。

「俺の方は問題ない。ただ、あまり長い時間ならば、遠慮させてもらうがな」

「たぶん、犬崎君が考えているほど、長くはかからないと思うわ。本当に、ほんの少しだけつき合って欲しいだけだから」

「そうか。なら、仕方ない。そっちには、最近世話にもなったからな」

「ありがとう、犬崎君。それじゃあ、狗蓼さん。ちょっとだけ犬崎君のことを借りるけど、いいかな？」

萌葱が少しだけ腰を落とし、朱音に言った。だが、朱音は何も言わず、じっと唇を噛んで萌葱の方を見つめているだけだ。

「悪いな、朱音。ちょっと野暮用が出来たが、すぐに戻る。それまで、この辺りで待っていてくれ」

何も言わない朱音に代わり、紅が答えた。朱音の頭に手を乗せて、諭すような口調で言う。

萌葱に同行する形で、紅は祭りが行われている神社の裏手へと回る。その後ろから見つめる強い嫉視に、この時の紅はまだ気づいてはいなかった。

※　※　※　※　※　※　※　※

祭りの最中とはいえ、神社の裏手はさすがに静かだった。紅と萌葱の他に人はおらず、時折、遠くからの祭り囃子に混じって虫の声も聞こえて来る。

「それで……お前の言う要件ってやつはなんだ？」

白金色の髪が生えた頭をかきながら、紅は例のぶっきらぼうな口調で言った。つき合えと言われて着いて来てみれば、連れてこられたのは神社の裏。大方、買い物かなにかにつき合わされると思っていただけに、萌葱の真意が分からない。

「ごめんね、犬崎君。ただ、ちょっと二人だけで話をしたかっただけだから」

「俺と話を……？」

「そうよ。まだ、ちょっと先のことになるかもしれないけど……今後の進路のこととかね」

そう言って、先ほどまで背を向けていた萌葱が紅の方へと振り向いた。

「ねえ、犬崎君。犬崎君は、中学を卒業したら、どうするつもり？」

「卒業したら？　まあ、普通に爺さんの仕事を継ぐために、色々と修業することになると思うぞ。少なくとも、それ以外には思いつかない」

「ふうん、そうなんだ……」

納得したような、それでいてどこか寂しそうな表情で、萌葱は紅を見た。その瞳は、まるで何かを思いつめているかのようにも見て取れる。いったい、萌葱は何を考えて、こんな場所で進路の話などする気になったのだろう。

「私ね……高校生になったら、この村を出ようと思ってるんだ。それこそ、麓の町の高校に村から通うことなんかしないで、もっと遠い場所で、一人暮らしするの」

「そいつは立派なことだな。だが、それが俺と何の関係がある？」

「まあ、ちょっとは最後まで聞きなさいよ。私、前に犬崎君に、自分が他所者だって言ったことあるでしょ。覚えてる？」

「ああ。そう言えば、そんなこともあったな」

そのことだったら忘れてはいない。確か、今週に入って紅が周囲から急に冷たくされた時、声をかけてきた萌葱自身が最後に言った言葉だ。

「あれね、実は本当の話なの。私、家の都合で仕方なくこの村に引っ越して来たから、どうしても村の慣習みたいなのに慣れなくってね。未だに祟りとか呪いとか信じている、村の人の考えが分からないの。犬崎君のことを、変な目で見るのも含めてね」

「だが、それはこの村の昔からの慣習だ。今さらお前一人が騒いだところで、何も変わらないぞ」

「そうね。だから、私は村を出たいの。こんな古臭い慣習に縛られているような土地にいつまでもいないで、もっと現実的な考えができる人達が集まっている場所にね」

その場で空を仰ぎ、時折くるくる回るようにしながら、萌葱は紅に話す。そして、最後に紅の方を向いて動きを止めると、その赤い

瞳をしっかりと見据えて言った。

「ねえ、犬崎君が、よければでいいんだけど……」

「なんだ？」

「私が村を離れる時、犬崎君も一緒に行かない？　一緒に、K市の県立高校を受験して村を出ましょうよ。そうすれば、こんな変な村で差別に苦しむこともないわ。今週、学校であったような噂だって、たぶんされないと思うし……」

「それはどうかな？　例え慣習などなくたって、俺は見ての通りの容姿だ。町に行ったところで、好奇の目に晒されることは目に見えている。それに、俺は生まれ育った土地を離れるつもりはない。少なくとも、家業を一人前に継げるようになるまではな」

「そっかぁ……。まあ、まだ一年以上先の話だしね。すぐじゃなくていいから、気が変わったら返事頂戴」

物事を割り切るのが上手いのか、それとも強がっているだけなのか、その口調からは分からなかった。

萌葱は浴衣の裾をひらひらと風に揺らしながら、紅よりも一足先にその場を離れた。後に残された紅は、静寂に包まれた社の裏で、しばし萌葱の言っていた言葉の意味を考える。

確かに萌葱の言う通り、土師見村は昔ながらの慣習に縛られた山村だ。紅自身、自分の一族に向けられる畏怖の眼差しも含め、それは痛いほど良く感じている。その上、村の伝統的な産業が葬式道具作りというのも、町の人間には受け入れ難いことなのだろう。

だが、だからと言って、自分が村を離れるのは間違いだと思った。少なくとも、退魔師として祖父の後を継げるようになるまでは、村を離れることは許されない。

（何考えてるんだ、あいつは……。俺が村を離れるなんて、そんなことあるはずないのにな……）

生まれながらにして、向こう側の世界に住まう者達と対峙することを宿命づけられた赫の一族。その末裔である以上、自分も血の宿命からは逃れることはできない。

考えるだけ馬鹿らしいことだ。自分の進むべき道は、既に決まっている。

踵を返し、紅も社の裏から祭りの場へと戻った。朱音も待たせていることだし、いつまでも独りであれこれと考えているわけにもいかない。

萌葱と会った場所に戻ると、そこに朱音の姿は見当たらなかった。どこか、別の場所に行ってしまったのか、それとも単に見落としているだけなのか。

不安に思い辺りを探すと、後ろから誰かが自分を見ていることに気がついた。振り返ると、そこには朱音が立っている。祭りの最中、一緒に射的をしたり髪飾りを買ってやったりした時とは違い、少し俯いたまま黙ってこちらを見つめていた。

「紅君。お話、終わったの？」

「ああ。すまなかったな、待たせたみたいで」

「別に、私は平気だよ。それよりも……野々村先輩と、何を話していたの？」

「そんな、大した話じゃない。お前が気にするようなことは、何もないよ」

相手を心配させまいとして言った紅だったが、朱音は「そう……」とだけ呟いて口をつぐんでしまった。

それから朱音は、始終無言のまま紅の後をついてくるだけだった。こちらから何か話しかけても、特に笑ったり喜んだりする素振りも見せない。やはり、萌葱が間に入ったことで、朱音に妙な気を使わせてしまったのかと紅は思った。

祭りから帰る時になっても、相変わらず朱音は無言のままだった。紅もかけてやる言葉が見当たらず、夜道に二人の足音だけが響いている。

互いに言葉を交わさないまま、時間だけが過ぎていった。気がつくと、辺りに他の人間の姿はない。祭りの喧騒が嘘のように、今はひっそりと辺りが静まり返っている。

「ねえ、紅君……」

突然、後ろにいる朱音が紅の名を呼んだ。振り返ろうとしたものの、何やら背中に鋭い視線を感じ、紅はその場で足を止めた。どうしてか、ここで振り向いてはいけないような気がしたからだ。

「紅君は、この村を出て行くつもりなの？」

「えっ……！？」

「答えて、紅君。高校生になったら……野々村先輩と一緒に、村を出て行くの？」

「朱音……。お前、さっきの話……」

なんということだろう。朱音は先ほどの紅と萌葱の会話を、始終盗み聞きしていたのだ。大人しく待っている素振りを見せながら、あの後、こっそり自分達の後をつけてきたのだろう。

これが普段のことであれば、他愛ない妬きもちとして片づけられたところだ。しかし、今日の朱音は何かが違う。先ほどから感じている視線も相俟って、妙に朱音の存在が大きく、恐ろしい物に思えて仕方がない。

「俺は……」

迷う必要などない。自分の答えは既に決まっており、それは逃れられない運命だ。そう分かっていても、何故か声が震えていた。

「俺は、この村を出て行くつもりはない。爺さんの修業だって終わっちゃいないし、俺が後を継いだら、今度は俺が犬崎の家を守らないといけない。村から出て行くつもりなんて、毛頭ないよ」

「そう……。よかった……」

ほっという安堵のため息と共に、紅の首筋に温かい息がかかった。

それが朱音のものだと分かり、思わず背筋がぞくりとする。近づく足音さえも聞こえなかったのに、いつの間にここまで距離を詰められたのだろうか。

「紅君……」

朱音が再び紅の名前を呼び、その腕を後ろから腰に回してきた。そっと触れるのではなく、まるで縛りつけるように、紅のことを強く抱き締める。背中に朱音の胸が当たり、その吐息がかかるのが分かった。

「あ、朱音……！？」

一瞬、何をされているのか分からなかった。今までも朱音が自分に甘えたような仕草を見せることはあったが、抱きついてくるようなことは一度もなかったからだ。

「私は……紅君とずっと一緒にいるよ……。他の、誰がいなくてもいい……。紅君だけがいてくれればいい……」

言葉と共に、朱音の腕の力が強まってゆく。これが本当に、自分の知る非力で病弱な朱音のものなのだろうか。

「だから、紅君も私と一緒にいて……。ずっと……ずっと私と一緒にいて……」

背中にかかる息と共に、なにやらどす黒い物が自分の身体の中に入ってくるのが分かった。朱音の身体を通し、べったりとした油のような何かが、直接自分の心の中に流れ込んでくる。

「あ……あぁ……」

何とか振り払おうとしたが、掠れた声が喉の奥から漏れるだけだった。気がつけば、腕も足も力が入らない。まるで、粘性の高い液体に絡め取られたように、指の先までしっかりと抑え込まれている。

身体が痺れ、息をすることさえも辛くなってきた。だんだんと、目の前の視界がぼやけてくる。後ろで朱音が何やら言い続けているが、それさえも上手く聞き取れない。

「好きだよ、紅君……。小さい頃から、ずっと……ずっと好きだったよ……」

そう、朱音が言った時、紅の足が完全に力を失った。拘束を解かれると同時に、その身体は糸の切れた人形のように大地へ倒れ込む。

朱音の身体から送り込まれた闇は、既に紅の身体と心を完全に侵食していた。もはや、自分の意思で身体を動かすことはできず、何をされているのかも分からない。

「私には、紅君しかいないの……。昔から……ずっと、ずっと昔から、紅君しかいなかったの……」

既に紅は返事をすることさえできなかったが、それでも朱音は倒れた紅に語り続ける。そのまま腰を落とし、倒れたままの紅の身体を仰向けにした。瞳孔が開かれた紅の顔を、そっと慈しむように指で撫でる。

「だから……紅君は、誰にも渡さないよ。この世界でたった一人の……私だけの紅君でいて……」

薄れゆく意識の中、紅の耳に朱音の囁くような声が響く。甘い、誘うような声に包まれながら、紅の意識は深い闇の中へと堕ちて行った。

※　※　※　※　※　※　※

祭りというのは、その最中だけを楽しむものではない。いつ、誰が言っていた言葉かは忘れたが、それは決して間違いではないと思う。

神社からの帰り道、野々村萌葱は祭りの余韻に浸りつつも、今日の紅との会話を思い出していた。

自分が考えていることは、果たして紅に伝わっただろうか。あの、鈍感で朴念仁の紅のことだ。きっと、こちらの真意など気づいていないに違いない。

高校になったら村を出るか否か。そんなことは、はっきり言って二の次だった。紅が自分の話に乗って来ないのであれば、今度は自分が譲歩すればよいだけのことだ。村から麓の町の高校に通うのは本意ではないが、紅と一緒にいられるのであれば、それで良い。

この村に越して、中学に入ってから、萌葱が初めて惹かれたのが紅だった。その幻想的な容姿に加え、他の人間とは明らかに異なる強い意志のようなものを秘めた空気。同じ、田舎の村に暮らしている人間でありながら、どこか異質で、それでいてこちらを魅了する何かを持っていた。

二年に上がり、同じクラスになったことで、自分は紅と近づく機会を得た。学級委員という立場も生かし、クラスの中で浮いている紅のフォローに回ることも多かった。もっとも、紅自身は、そんな萌葱のことを口煩いだけの存在だと思っていたのかもしれないが。

「あいつ……こっちが決心して話をしたってのに、動揺の一つもしないんだから……。やっぱり、直接気持ちを伝えないと駄目なのかしら？」

つい、そんな愚痴が零れてしまう。好きだからこそ、直接言わずともこちらの意図に気づいて欲しい。そんなことを考えてしまうのは、果たして我侭なのだろうか。そう、萌葱が思った時だった。

――――ヒタ……。

自分の物とは違う、明らかに別の足音が聞こえた。後ろを振り向いて見るものの、音の主と思しき者の姿はない。

――――ヒタ……。

また、音が聞こえた。今度はさっきよりも近い。間違いなく、自分との距離を詰めてきている。

生温かい風が吹き、萌葱の髪を舐め回すようにして揺らした。今まで顔を見せていた月が、一瞬にして雲の中に隠れる。側に立って

いる街灯の薄明かりだけが、足元を静かに照らしている。

――――ヒタ……。

今度は自分のすぐ後ろで足音が聞こえた。相変わらず、何の姿も見えないが、距離だけは確実に縮められている。

たまらず、音のした方へと顔を向ける萌葱。そこにあったのは、何の変哲もない自分の影。街灯に照らされたことによって大地に伸びた、いつも見慣れている自分自身の分身だ。ある、一点の部分を除いては。

「ひっ……」

自分の足元にいる者の姿を見て、萌葱は短い悲鳴を上げた。

つま先から伸びている黒い物は、間違いなく自分の影だ。それは、決して疑いようのない事実。では、その影についている赤銅色の瞳はなんだろうか。調度、自分の瞳がある位置に、くすんだ金属のような色の目が、しっかりとついている。

笑うこともせず、怒ることもせず、その瞳はただ萌葱を見つめていた。まさに、凝視という表現が相応しいほどに、こちらの心の奥底まで見透かすような視線を送ってくる。

（な、なに……これ……）

今、自分の目の前で何が起きているのか。それを判断するだけの

余裕は、今の萌葱にはなかった。それどころか、身体全体が金縛りにあったように、まったく動かない。蛇に睨まれた蛙のように、影の瞳から目を離すことができなくなっている。

次の瞬間、後頭部に鈍い衝撃を受け、萌葱はその場に倒れ込んだ。頭の奥が熱く、身体が言うことを聞いてくれない。

「あなたは、今すぐには殺さないよ……。もう、絶対に紅君に近づいたりできないように、しっかりと打ちつけておかなくちゃ……。心も……身体もね……」

自分の後ろで、誰かが何かを言っている。聞き覚えのあるこの声は、いったい誰のものだっただろうか。

そう考えた矢先、再び衝撃が頭を襲った。さすがに、二発目は耐えられない。目の前の景色が一瞬にして暗くなり、萌葱の意識もそこで途切れた。

※　※　※　※　※　※　※　※

犬崎邸。

天井から無数の鈴が吊るされた部屋で、臙良は瞑想を続けていた。元村が教えてくれた中学生の変死事件から、既に一週間と少しが経過している。その間に、事故死とされたものも含めて新たに三人の中学生が亡くなったが、依然として相手は尻尾をつかませないままだった。

変死が向こう側の世界の住人の仕業だとして、これは本当にはぐれ神が引き起こしている事件なのだろうか。

相手が血に飢えた祟り神だとすれば、もっと多くの犠牲者が出ているはずだ。しかし、実際に犠牲になったのは中学生が四人だけ。それも、どの生徒も校内では悪い噂の絶えない札つきの不良だったと聞く。

やはり、相手は何者かの身体にとり憑いていると考えた方が正しいだろう。そうでなければ、こちらの包囲網をかいくぐり、ここまで見つからずに潜伏できている理由が説明できない。

この村の中の誰かが、はぐれ神と化した犬神にとり憑かれている。惨劇はまだ終わったわけではない。相手が何を企んでいるかは分からないが、とにかく今は、向こうの出方を待つ他にない。

――――チリン……。

部屋の鈴が、微かな音を立てて揺れた。聞き間違いなどではない。ましてや、風で揺れたわけでもない。明らかに、鈴が向こう側の世界の者を捉えた瞬間だった。

「いよいよ、尻尾を出しおったか。今宵こそは、逃すわけにはいかん……」

両目が大きく見開かれ、赤い瞳が露になる。側に置いてある、梵字の書かれた布を鞘と柄に巻き付けた刀を握り、臙良は音も立てずに立ち上がった。

皐月はまだ、家には戻って来ていない。恐らく入れ違いになってしまうだろうが、彼女を待っている余裕などない。うかうかしていれば、数日ぶりに現われたはぐれ神を見逃すことになってしまう。

草履を履き、傘を頭にかぶり、臙良は屋敷を飛び出した。鈴が示していた場所は、ここから決して遠くはない。今から行けば、惨劇がなされる前に間に合うかもしれない。

棚田の横道を下り、臙良は鈴が反応していた場所へと足を急がせた。齢六十を越えた老人とは、とても思えない走りようだ。これも、若い頃から退魔師として鍛え続けてきた成果である。

「ここか……」

現場は、人気のない村道の一角だった。街灯の下、微かに血のようなものが飛び散っているのが見て取れる。恐らくは、ここではぐれ神に憑かれた何者かが、新たなる犠牲者に襲いかかったのだろう。

このまま眺めているわけにはいかない。臙良は胸の前で印を組むと、自分の影に精神を集中した。

街灯と月の明かりに照らされてできた、臙良の足元から伸びる細長い影。それは、徐々に臙良の身体を離れ、やがて黒い流動的な塊となって起き上がる。

両手、両脚、そして首が生え、塊は犬のような姿を形作った。宵の闇より暗い漆黒の身体に反し、その瞳は眩いまでの金色に輝いている。

「黒影よ。この血の主の匂いを……気を追うのじゃ」

臙良に命じられ、黒影と呼ばれた巨大な犬は、地面に付着した血の匂いを嗅いだ。とはいえ、霊的な存在であるが故に、鼻をひくひくと動かすような真似はしない。ただ、鼻面を地面に近づけて、その場に制止しているだけだ。

黒影の身体を形作る物体が、頭から尾の先に抜けるようにして流れた。すると、黒影は頭を上げ、再び地面に溶けるようにして影となる。

臙良の身体を離れたまま、黒影は地面を這うようにして移動し始めた。その後を、刀を手にした臙良も追う。行く先は、この血の持ち主が連れ去られた場所だ。

現場に遺体がなかった以上、身体ごとどこかに持ち去られた可能性が高い。そして、その場所ことが、はぐれ神に憑かれた人間のいる場所であるとも言えるはずだ。

黒影に導かれるようにして、臙良は夜の土師見村を走った。気のせいか、やけに見覚えのある道を走っているような気がしてならない。村のことは知りつくしていたが、この道はとくに、ごく最近になって通ったような気がする。

疑問は、すぐに解消された。

黒影が臙良を連れて来た場所。それは、あろうことか狗蓼朱音の家だった。先週、彼女の母親の葬儀があったばかりなことを考えると、ここまでの道を通った気がするのも頷ける。もっとも、母親である朱鷺子が亡くなってからは、無人のまま放置されていたはずで

あったが。

油断することなく、家の門をくぐり中へと入る臙良。幸いにも、家の鍵は開け放たれているようだった。

刀の柄に手を添えて、草履のまま家の中へと上がる。相手は悪鬼と化したはぐれ神か、それとも憑依された人間か。どちらにせよ、手強い相手であることに違いはない。

一通り一階を見て回ったが、とくに何かが潜んでいる気配はなかった。ならば、本命は二階か。木製の階段に足をかけ、一歩一歩、踏みしめるようにして昇って行く。

ぎし、ぎし、という木の軋む音がして、臙良の顔にも緊張の色が走った。人の手を離れてから一週間ほどしか経っていないにも関わらず、まるで長年に渡り放置されてきたかのような錯覚を覚える。

一階に比べると、二階の間取りは至極単純だった。あるのは朱鷺子の寝室と、朱音の使っている私室のみ。そっと襖を開けて見ると、見覚えのある少女が倒れているのが目に入った。

「あ、朱音……」

倒れていたのは朱音だった。その額には赤い血がべったりとこびりつき、服のあちこちにも赤い飛沫が散っているのが分かった。

あの血液は、朱音のものだったというのだろうか。だとすれば、やはりはぐれ神は、朱音を狙っていたということか。

判断するには時期尚早であったものの、臙良は躊躇うことなく朱

音を抱き起こした。まずは、朱音の身柄を安全な場所に移さねばならない。はぐれ神の追撃も気になるが、今はそんなことは二の次だ。

「お、おじい……ちゃん……」

臙良の腕の中で、朱音がゆっくりと目を開いた。掠れるような声で呟きながらも、こちらに縋るような視線を送ってくる。

一見すれば、はぐれ神に襲われた少女が助けを求めているように見えなくもない。だが、それにしては、何かがおかしい。まるで、こちらが助け起こすことを予測していたかのように、抱き上げた瞬間、朱音は目を覚ましたのだから。

そう、臙良が気づいた時には遅かった。

朱音の右手が、突如として臙良の首につかみかかって来た。指先が肉に食い込み、容赦なく頸動脈を締めつける。その華奢な身体からは想像もできないほどに強い力だ。

「死んで……」

朱音の顔が、冷たい笑みの形に歪む。次の瞬間、腹部に激しい痛みを覚え、臙良は思わず朱音の身体を畳みの上に落としてしまった。

「ぬ……うぅ……」

右のわき腹に手をやると、ぬるっとした感触と共に、生温かい物が両手を伝わった。見ると、目の前に立つ朱音の手には、血の付いた果物ナイフが握られている。

なんということだ。はぐれ神は、最初から朱音の中にいたのだ。それを知らず、思い込みから迂闊な行動に出て、敵の術中にはまることとなってしまった。我ながら、自分の軽率な行動が悔やまれて仕方がない。

だが、だとすれば、なぜ今まで自分は気づかなかったのだろうか。朱鷺子の葬儀の後も、朱音は自分や紅と共に一緒の家で暮らしていた。その時は、何かに憑かれていた様子など、まったくなかったというのに。

「ごめんなさい、おじいちゃん……。でも、私は渡したくないの……。私の中の犬神様も……紅君も……。だから、私の邪魔をしないでくれるかな……」

膝を突き、痛みに耐える臙良を見下ろすようにして、朱音が感情のこもらない口調で言った。その言葉を聞き、臙良は改めて自分の考えが誤っていたということを思い知らされる。

額の血を腕で拭くと、そこには傷一つ見当たらない。部屋の中で倒れていたのは、全て朱音の仕組んだ罠だった。

朱音は、はぐれ神に憑かれていたのではなかった。最初から、彼女の魂は犬神と共にあったのだ。例え犬神を使役する法がなくとも、魂を一つにしてしまえばその力を行使できる。犬神を己の中に取り込むことにより、一見しただけでは気づかれないまま、圧倒的な力を得ることができるのだ。

だが、そんなことをすれば、彼女の魂とて無事では済まない。主導は朱音の魂であったとしても、それは多かれ少なかれ、融合した犬神の影響を受ける。

己の感情のままに、人を殺すことも厭わない。自分の望みを叶えるためであれば、手段を選ぶこともない。善悪の判断基準が崩壊している今の朱音は、間違いなく犬神の影響を受けている。それも、既に取り返しのつかないくらい、深い部分まで繋がって。

今、目の前にいるのは、朱音であって朱音ではない。存在の根本的な部分は朱音のままなのだろうが、犬神の力に毒され、完全に自分を見失ってしまっている

果物ナイフを手にした朱音が、徐々に臙良との距離を詰めてきた。血の付いたナイフを握った手が、高々と掲げられて首筋を狙う。

「さよなら、おじいちゃん……」

もう、臙良には抵抗する力さえ残っていない。そう判断したのか、朱音は躊躇うことなく手にしたナイフを振り下ろした。血濡れた切っ先が、寸分の狂いもなく臙良の急所に迫る。

もはや、逃れる術はない。邪魔者は片付き、自分を止める者は誰もいなくなる。そう朱音は確信していたが、臙良の目は未だ死んではいなかった。

「喝っ！！」

瞬間、臙良の声が部屋の空気を震わせた。わき腹の痛みを堪え、折れた膝をゆっくりと元に戻す。既に満足に戦うことさえできない身体ではあったが、その心は未だに折れてはいない。

臙良の後ろで、影がずるりと伸びた。そのまま盛り上がるように

して黒い塊が飛び出すと、それは瞬く間に黄金の目を持った犬神の姿となる。

身体が完全に犬の姿になるのを待つような暇などない。不定形な塊から首だけを実体化させた黒影は、手足が生えるのも待たずに青白い炎を吐いた。これには、さすがに朱音も驚いたらしい。ナイフを持った手で額を覆うようにすると、空いていた窓から夜の闇の中へと身を躍らせて消えて行った。

「ふぅ……。とりあえずは、なんとか凌いだか……」

腹の傷を押さえ、臙良はその場に蹲るようにして腰を落とした。思ったより、傷が深い。そのまま這うようにして壁際まで行くと、壁を背につけてその場に座り込んだ。

このまま、あの朱音を野放しにしておくわけにはいかない。赫の一族の一人として、一族の不始末は自分でつけねばならない。

そう思ってはみたが、やはり身体が言うことをききそうになかった。仕方なく、臙良は自分の下に黒影を呼ぶ。そして、何やら黒影に支持を出すと、その姿が窓の外に向かって消えて行くのを見つめていた。

※　※　※　※　※　※　※　※

そこは、暗く冷たい場所だった。

自分の頬を撫でる風の冷たさに、犬崎紅は静かに目を覚ました。

ここは、いったいどこなのか。それ以前、自分はなぜこんな場所にいるのだろうか。

暗闇に目が慣れてくる内に、だんだんと意識が戻って来た。同時に、この場所がどこなのかもはっきりと分かった。

ここは、自分が秘密基地として使っていた防空壕の跡だ。柱の傷も、家から苦労して運んだ古いちゃぶ台も、全て見覚えがある。

いったい、自分はどうなってしまったのか。あの時、朱音に抱きつかれてから、まるで魂を吸い取られてしまったかのように気を失ってしまった。恐らくは、朱音がここへ運んだのだろうが、非力な彼女に果たしてそんな芸当ができるものだろうか。

ふと、そんなことを考えた時、紅は自分の方へ誰かが近づいて来るのに気がついた。顔を上げて見ると、そこにいたのは朱音だった。

「起きたんだね、紅君。本当だったら二、三日は気絶したままかと思ったけど……やっぱり紅君はすごいな」

いつもの朱音とは、どこか様子が違っていた。声に抑揚がなく、その瞳は薄暗く淀んでいる。

「ねえ、紅君。これからは、ここが私と紅君のお家だよ。私達二人だけで……これから、ずっと一緒に暮らそうね……」

「な、何を言っているんだ、朱音……。家って……それに、一緒に暮らすって……」

朱音の言っている意味が分からない。そう思って身体を起こそう

とした時、紅は初めて自分の両手が後ろ手に縛られていることに気がついた。それだけでなく、両脚の自由も奪われている。改めて自分の姿を見ると、どうやら椅子に両手と両足を縛りつけられているようだった。

「お、おい、朱音……。これは、いったいどういうつもりだ！？」

「どういうつもりって……紅君が、私の側からいなくならないようにするためだよ。こうしておけば、誰か他の人が紅君を連れて行こうとしても、紅君は絶対に私の側から離れられないもんね」

朱音の口元がにやりと歪む。これが冗談などではなく本気であることを、紅も薄々ながら理解した。

「それにしても……紅君、本当に鈍いよね。私が紅君のために一生懸命復讐してあげたのに、全然気がつかないし……」

「復讐、だと？」

「そうだよ。紅君に乱暴した、あの不良共がいたでしょ。あれ、全部殺したの私だから。あんなやつら、死んでも誰も何とも思わないって、犬神様も言ってたしね」

口にするのも恐ろしいような事実を、朱音はさらりと言ってのけた。それを聞いた紅の目が、思わず大きく見開かれる。

あの朱音が、人を殺した。それも、田所とその仲間を合わせ、四人もの人間を。にわかには信じられないことだったが、朱音の顔は、決して嘘をついているようには見えなかった。

「それと、紅君につきまとってた、野々村先輩いたでしょ。あの人も、もう二度と紅君に近寄れないようにしておいたから。これで、紅君を迷わして村から連れ出そうとする人も、もういないよ。だから……これからは、ずっと、ずっと一緒にいられるよね、紅君！！」

朱音が紅の頭を抱えるようにして抱きついてくる。こんな状況でなければ、素直にそれも受け入れられただろう。だが、あまりに常軌を逸した朱音の言葉が、紅にそれを許さなかった。

「お、おい……。朱音……お前、いったいどうしたんだ……」

目の前に起きていることが現実なのだと、未だ受け入れられない自分がいた。朱音はいったいどうしてしまったのか。こうまでして壊れてしまったのは、紅自身にも責任があるのか。そして、朱音の言っていた犬神様とはいったいなにか。

分からない。日常が一度に破壊され、まともに考えを整理することさえもできなかった。今、目の前にいるのは、本当に自分の知っている朱音なのだろうか。

「ねえ、紅君……」

頭を抱きかかえていた腕を離し、朱音が紅に尋ねた。相変わらず、その口調からは生気のようなものが感じられない。

「そう言えば、お祭りの屋台で、あんまり食べ物を買って無かったよね。もしかして、お腹すいてない？」

「腹って……。こんな状況で、飯のことなんて考えられるか！！」

「大丈夫だよ、心配しなくても。紅君には、私がちゃんと食べさせてあげるから」

そう言いながら、朱音は何やら足元に転がっている塊を拾い上げた。羽毛に包まれ、首を失った一羽の鳥。どうやら、村で飼われている鶏のようだった。

「これ、近所の農家さんから失敬してきたんだ。お肉は苦手だったけど……犬神様が一緒にいる今だったら、私も食べられるようになったんだよ」

首の落とされた鶏をつかみ、朱音が大きく口を開く。羽毛さえも取らず、そのまま胸にかじりついた。

肉が千切れ、引き剥がされる音がした。鮮血が飛び散り、紅の顔にも赤い飛沫が付着する。口元を赤い血で染めながら、朱音は美味そうに口の中にある肉を飲み込んだ。

「うふふ……おいしいな。今、紅君にも食べさせてあげるから……ちょっとだけ待っててね」

朱音の口が、再び鶏の肉を貪った。しかし、今度は口に入れた肉を飲み込むようなことはせず、ゆっくりと、筋のなくなるまで咀嚼してゆく。そして、口の中にあるものが十分に柔らかくなったところで、朱音は自分の唇を紅の唇に押し付けた。

次の瞬間、朱音の舌が紅の口をこじ開けると共に、生臭く粘性の高い液体が流れ込んできた。それが、咀嚼された生肉であると分かり、紅は思わず胃の中身を吐き戻しそうになる。

生温かく、それでいて鉄のような味を含んだ液体が、紅の口の中を犯してゆく。吐き出そうにも、口で口を塞がれているために、それすら敵わなかった。

自分の意思とは反対に、咀嚼された生肉は紅の喉を通り、胃の中へと入っていった。全てを飲み込んだ後でも、口の中には未だ生臭い匂いが充満している。

はっきり言って、もう終わりにして欲しかった。しかし、紅が全ての肉を飲み込んでもなお、朱音は彼と口をつけることを止めようとしない。今度は口内に自分の舌を滑り込ませ、未だ口の中に残る肉片を舐め取るようにして、激しく紅の口を蹂躙した。

「んっ……ふぅ……」

やがて、十分に満足したのか、朱音は紅の口からようやく自分の舌を離した。血の混ざった唾液が赤い糸を引いて、紅と朱音の口を繋いでいる。

あまりに現実離れした出来事に、さすがの紅も心が折れそうだった。否、それ以前に、先ほど飲み込んだものの味を思い出しただけで、胃の中の物が全て逆流してきそうになる。

いったい、自分はどうなってしまうのか。このまま成す術もなく、狂った朱音に犯され続けるしかないのか。そんな絶望が紅の頭をよぎった時、今まで変化のなかった朱音の顔が急に険しくなった。

「これは……。また、邪魔者が来たわね……」

普段の朱音からは、想像もできない程に冷たい口調。冷徹に、邪

魔者を排除することしか考えていない、およそ人の物とは思えない目つき。

「ちょっと、ここで待っててね、紅君。すぐに、邪魔者を片付けて戻るから……」

「邪魔者だと！？　それは、どういう意味だ……」

「心配しなくても大丈夫だよ、紅君。これからは、私が犬神様の力を使って、紅君を守るから。紅君が私にしてくれたみたいに、紅君と私の仲を邪魔する者を、全部始末してあげるからね」

朱音の顔に、再び先ほどの淀んだ笑みが浮かんだ。だが、紅はそこに、優しさなどという感情は感じられなかった。

あるのは、ただ恐怖のみ。狂気に彩られた朱音の視線に見つめられ、紅はただ、何もできない自分の無力さを悔やむ他になかった。

※　※　※　※　※　※　※

祭りの終わった夜の土師見村を、鳴澤皐月は犬崎多恵と共に駆けていた。彼女達を先導するのは、道を這うようにして動く一体の影。犬のような姿をしたそれは、一目見て臙良の使役する犬神、黒影であると分かる。

皐月が家に戻った際、臙良は既に屋敷を出た後だった。多恵の話によれば、皐月が留守の間に臙良がはぐれ神を見つけたとのことらしい。

やはり、自分も臙良の言葉に甘えず、家に残っていればよかったか。そう思ったところで、時間は元には戻せない。今は一刻も早く、臙良の後を追って現場に向かう方が先だろう。

そう思った矢先、皐月と多恵の目の前に現われたのが黒影だった。

通常、犬神は使役する者の影に潜んでいる。他人の影に潜ることも可能だが、犬神そのものが単独で、影にも潜らず行動することは珍しい。そして、それは臙良の身に、何かよくないことがあったという印にも等しいのだ。

考えている暇などなかった。

皐月と多恵は黒影の導くままに、犬崎の屋敷を飛び出した。道を這うようにして動く影を追い、こうして今に至るというわけである。

黒影が案内した場所は、村の中でもごく普通に見られる住宅街の一角だった。しかし、黒影の入って行った家の前に立った瞬間、皐月と多恵の足がそこで止まる。

「こ、これ……」

「うむ。朱鷺子の家じゃ」

そこは、今は亡き朱音の母、狗蓼朱鷺子の家だった。

今回のはぐれ神騒動は、元はと言えば、朱鷺子の死から始まっている。それを知る二人が黒影の案内した場所を見て、驚かないのも無理はなかった

「行くわよ、多恵さん……」

「うむ。そちらも気を抜くでないぞ……」

共に拳を握りしめ、皐月と多恵が狗蓼家の門をくぐる。次に何が飛び出してくるか分からないだけに、緊張の色を隠しきることはできない。

扉を開け、玄関に入ったところで、再び黒影が二人を導いた。滑るようにして階段を昇る黒影を追うと、およそ民家の中には場違いな異臭が鼻をついた。

「これは……血の匂いじゃな……」

油断なく、黒影の導く場所へと足を踏み入れる皐月と多恵。そして、二人が朱音の部屋に入った時、その目には信じられないものが飛び込んできた。

「え、臙良さん！！」

そこにいたのは、他でもない臙良だった。側には血の付いた果物ナイフが転がり、腹には服を破いて作ったと思しき止血帯で、間に合わせの応急処置が施してある。

「おお、皐月……。それに、多恵も来てくれたか……」

「これは、いったいどういうことじゃ、臙良。お主程の者が、こうも簡単にやられるとは……」

「なに、少々油断をしただけのことよ。もっとも、授業料は決して安い物ではなかったがな……」

口では強がっていたが、臙良の傷が深いことは、皐月と多恵から見てもはっきりと分かった。このまま放置しておけば、それこそ取り返しのつかないことになりかねない。状況を知りたい気持ちはあったが、今は一刻も早く救急車を呼ぶ方が先だ。

「多恵さん。悪いけど、救急車を呼んでくれるかしら。その間、臙良さんは私が……」

「うむ。すまぬが、頼む」

多恵が小走りに階段をかけてゆく音が聞こえてくる。皐月は自分の鞄から使えそうな布を取り出すと、それを臙良のわき腹に宛がった。本来であれば商売道具を作るための材料だが、この際、細かいことは言っていられない。

「のう、皐月よ……」

傷の手当てをされているのも構わずに、臙良が皐月に向かって口を開く。正直なところ、今は安静にしていて欲しかったが、それでも臙良は痛みをこらえながら話を続けた。

「今回の件……どうやらわしは、とんでもない思い違いをしていたらしい。はぐれ神など、最初からこの村におらんかったのじゃよ……」

「いなかった!?　でも、紅ちゃんの学校の不良達を殺したのは……」

「それは朱音じゃよ……。いや、正しくは、朱音と犬神の混ざったものじゃ……」

「犬神と朱音ちゃんが……混ざる？」

臙良の口から出た、思いもよらぬ衝撃的な台詞。その言葉を耳にして、応急処置をする皐月の手が一瞬だけ止まった。

「わしら、赫の一族には、代々伝わる犬神がおるのは知っておろう……。それは犬崎の家だけでなく、狗蓼の家も同じことじゃ……」

「それは知っているわ。でも、朱鷺子さんが亡くなった時、その身体に犬神はいなかったんでしょ？」

「その通りじゃ。だからこそ、わしらは朱鷺子の犬神……絶影が、はぐれ神になったと思ったんじゃがな……」

赫の一族に伝わる犬神は、一子相伝のものである。その話は、以前に皐月も臙良の口から聞いたことがあった。

犬神は、犬神筋の家に憑く。本来であれば、その家の当主に使役されるのが普通だが、契約の儀を交わせば当主でなくとも使役できる。また、当主が何らかの事情で亡くなった場合は、その家の次の当主に自然と受け継がれるのである。

しかし、仮に次の継承者が何の修業も受けていなかった場合、その者が犬神を使役することは不可能に近い。犬神の強大な力に翻弄され、最後は狐憑きのようになり発狂してしまう。

だからこそ、生前に朱音の母親である朱鷺子は、朱音のことを臙良と多恵に頼んでいた。もし、自分が亡くなって朱音に絶影が憑くようなことがあれば、それを臙良の方で祓って欲しいと依頼していたのだ。

果たして、朱鷺子が危惧した通り、彼女は娘よりも先に亡くなった。朱鷺子の身体から解き放たれた犬神は、普通であれば朱音の身体に憑いたはずである。しかし、臙良が霊視をした結果、朱音が絶影に憑かれていた様子はまったくなかったのだ。

「あの子は……朱音は、恐ろしい子じゃ……。並み居る赫の一族の中でも、あの子の潜在能力は最高級じゃよ……。それこそ、わしや紅など足元に及ばんくらいにな……」

「そんな……。それじゃあ、朱音ちゃんは……」

「あの子は犬神に憑かれるよりも前に、その力を自分の中に取り込んだのじゃ。己の御霊と犬神を融合させることで……その魂の中に、絶影を隠したんじゃよ……」

自分の魂に他者の魂を融合させる。荒唐無稽な話ではあったが、皐月にも心当たりがないわけではない。

通常、霊魂が肉体に憑依する際の方法は、乗っ取り型と同化型に分けられる。乗っ取り型の場合は死者の魂が生者の肉体を強引に乗っ取るだけのため、相手を祓うことは難しくない。しかし、同化型の場合は、魂のレベルで完全に一つに融合する。

こうなると、もうそこにいるのは生者と死者の境界を乗り越えた存在でしかない。それこそ、人間でも幽霊なく、妖怪と呼んだ方が

正しい存在である。

朱音が行ったのは、この同化型憑依の逆だろう。つまり、自分の魂の方を主体とし、相手の魂を己の中に飲み込んだのだ。そして、自らの魂に犬神の力を付与し、生霊となって殺戮を繰り返していたのだろう。

あの朱音が自らを妖怪と化し、四人もの人間を殺して回った。未だ信じられないことだが、そう考えると全ての辻褄が合う。臙良の霊視に引っかからなかったのも、犬神の存在を魂の奥深くに仕舞いこんでいたのであれば、説明はつく。

「とにかく……今は、朱音ちゃんを探しだすことが先決ね。それで、本人はどこへ行ったの？」

「分からぬ。不意をつかれて不覚をとった故、黒影を使って身を守るのが精一杯じゃった」

「だったら、私の方で見つけるわ」

臙良の傷の処置を終えて、皐月は自分の鞄から一つの振り子を取り出した。銀色の鎖の先端に、円錐の形をした錘がついたものだ。

ここは、朱音の部屋である。朱音の持ち物であれば、手に入れるのには苦労しない。当然、それを使って朱音の気を追うことも簡単だ。

ところが、そう思って皐月が振り子を手にした矢先、彼女の手の中で振り子が揺れた。まだ、朱音の気に意識を同調させたわけではない。振り子は、この部屋の中にある何かに反応して回っている。

（これは……死の匂い……？）

直感的に、皐月はそう判断した。この部屋にある死者の無念の思いが、皐月の振り子に過敏に反応している。では、いったいそれは、どこにあるのか。

一通り部屋を見回してみたが、当然のことながら死体など見当たらない。押入れも開けてみたが、中には布団が一式といくつかの衣装ケースがあっただけだ。

ふと、上を見上げると、押入れの戸袋が少しだけ開いているのを見つけた。まさかとは思うが、一応は念のためである。皐月は戸袋を開け、その中に頭を入れてみた。

カビと埃の匂いが鼻をつく以外、戸袋の中にこれといったものはない。しかし、その更に上に目をやった時、皐月は天井板の一部が外れているのに気がついた。

躊躇うことなく、皐月はその穴の中へと身を滑り込ませる。振り子の反応した死の匂いは、間違いなくこの天井裏から発せられていたものだ。

狭く、薄暗い空間を、皐月は這うようにして進んで行った。少し進むと、何やら手に固い物が当たる。拾い上げて見ると、それは使いこまれた懐中電灯だった。

やはり、朱音はここで何かをしていたのだ。拾った懐中電灯をつけてみると、オレンジ色の光が天井裏全体を明るく照らした。

「ちょっと……。なによ、これ……」

そこにあったのは、写真だった。天井裏の一角は、一面がびっしりと写真で覆われている。その写真に写っている者の姿を見て、皐月は再び絶句することになる。

「これ、全部、紅ちゃんじゃない！！」

そこに写っていたのは、全て犬崎紅だった。ほとんどが隠し撮りしたような写真ばかりであり、紅自身は撮られたことにさえ気づいていないはずだろう。その上、写真に他の人間が写っている場合、その顔は無残にもマジックで塗りつぶされていた。相手が女の場合は、顔をライターで焼かれたと思しきものもある。

朱音は紅に好意を抱いていた。傍から見ている皐月にも、そのくらいは分かっていた。が、まさかここまで異常な執着を抱いていたとは、さすがに気づくはずもない。

写真に覆われた一角から、皐月はさらに横へと目を移す。そこには、先の写真の山など問題でないくらいに、目を覆いたくなるようなものがあった。

両手と両足、そして両目と胸にまで五寸釘を打ち込まれた無残な死体。殺されてから時間は経っていないようで、まだ血の色が綺麗だった。手足に打ち込まれた釘により、その身体は天井裏の梁にしっかりと固定されている。

その死体は、野々村萌葱のものだった。両目を潰され、苦痛に歪んだ表情が、その最後が決して楽なものではなかったことを容易に想像させる。

あまりに無残な少女の姿に、皐月は思わず視線を下に落とした。すると、今度はそこに転がっていた、一冊のノートが目に飛び込んで来る。すかさず手を伸ばして中を開くと、それは朱音の日記帳だった。

暗闇の中、懐中電灯の光だけを頼りに、皐月は日記帳のページをめくっていった。日記そのものは随分と前から書かれていたらしく、一番古い日付は今年の四月になっていた。

【四月七日（木）】

今日から私も中学生。

小学校の卒業式で離れ離れになった時は寂しかったけど、これでまた、紅君と一緒の学校に通えるんだ。

今日は、嬉しくてよく眠れないかも。明日から授業も始まるのに、遅刻しちゃったらどうしよう……。

【五月十日（火）】

今日も、こっそり紅君の写真を撮っちゃった。

紅君にもらったカメラ、今は紅君の写真を撮るのに使わせてもらっている。家にいる時は一緒にいられないけど、紅君の写真を眺め

て我慢しよう。

【五月二十日（金）】

最近、紅君の周りにつきまとっている人がいる。学級委員の野々村先輩だ。

紅君は何とも思っていないみたいだけど、私は少し不安。紅君が、私から離れていったらどうしよう……。

【八月十五日（月）】

今日は、久しぶりにお母さんと喧嘩をした。私も紅君みたいな力が欲しいって言ったら、物凄く怒られた。

お母さんも紅君のことは嫌いじゃないみたいだけど、お化けとか幽霊の話は苦手みたい。でも、私はもっと紅君の役に立ちたい。私に力があれば、大きくなったら紅君と一緒にお仕事することもできるのに……。

【九月四日（土）】

今日、私にも初めて女の子の日が来た。防空壕で紅君にそれを言ったら、物凄く照れていた。

一緒に写真を撮るときも、紅君、少し固まっていた。でも、私だって、こんなことを言うのは恥ずかしかったんだよ。紅君だから言えたのに……あまり気づいてくれなかったみたい。

【九月六日（月）】

学校の不良が、紅君を呼び出して痛めつけた。紅君は何もしていないのに、本当に酷い。肝試しであいつらを助けたのは紅君なのに、どうしてこんなことができるの！？

私にも、紅君のおじいちゃんみたいな力が欲しい。犬神様がいれば、あいつらに復讐してやることもできるのに……。

【九月七日（火）】

私にも、紅君を助ける力が欲しい。お母さんにそのことを言ったら、やっぱり怒られた。

でも、私は知っているんだ。お母さんが、自分の影に犬神様を隠していることを。だから、階段の踊り場で喧嘩になった時、お母さんを突き飛ばした。

階段から落ちたお母さんは動かなくなっちゃったけど、これも仕方がないよね。だって、いつまでも私に犬神様の力をくれない、お母さんが悪いんだよ。私は紅君を助ける力が欲しい。それだけだっ

たのに……。

お母さんが死んだあと、犬神様が私のところにやってきた。私は犬神様にお願いした。私と一つになって、一緒に悪いやつらをやっつけて下さいって。犬神様は、私のお願いを聞き入れてくれた……。

【九月八日（水）】

今日は、お母さんのお葬式。紅君のおじいちゃんは、私の中に犬神様がいることに気づいていないみたい。たぶん、私と一つになっちゃったから、おじいちゃんにも分からないんだろう。

昨日の夜、紅君の部屋で紅君と一緒に寝た。折角同じ部屋で寝られるのに、別々の布団で寝るなんてつまらない。そう思って紅君の布団にもぐりこんだのに、何もしてくれなかった。ちょっと寂しかったな……。

【九月九日（木）】

昨日の夜、犬神様と一緒に初めて狩りをした。紅君に暴力をふるった不良の一人を、徹底的に脅かして殺してやった。あんなやつ、生きている価値もないって犬神様も言っていた。だから、これは天罰だ。

そして今日、残る不良の内の二人を始末した。屋上のフェンスのネジを外して、そのまま校庭に落としてやった。ざまあみろだ。

残る不良は後一人。今晩、そいつを殺しに行く。紅君に火傷をさせたみたいに、あいつのことも焼いてやる。それこそ、魂の欠片も残さないくらいに……。

【九月十三日（月）】

久しぶりに学校に行ったら、なんだか変な噂が流れていた。どうも、私が殺した不良達を、紅君が呪い殺したってことになっているらしい。

紅君には辛いことだと思うけど、私にとっては都合がいい。これで、紅君に近づく人間は誰もいなくなる。そうすれば、紅君は私だけのものになる……。

【九月十五日（金）】

犬神様が、私の中でどんどん大きくなってゆく。犬神様と一つになって、私が私じゃなくなってゆく。でも、不思議と怖くない。このまま紅君の力になれるなら、それでもいいと思う。

そういえば、あの噂があるにも関わらず、野々村先輩は紅君にべったりだ。紅君を不良から助けるのに力を貸してくれたことには感謝するけど……紅君をあげるなんてことは、誰も言ってないよ。

【九月十六日（土）】

紅君が、遠くに行ってしまう。野々村先輩が、紅君を連れて行ってしまう。

許せない、許せない、許せない、許せない、許せない……。

紅君を迷わせるやつは、みんな殺してやる。私の中の犬神様も、それでいいって言っている。自分の欲しい物は、自分の力で手に入れなくちゃ……。

だから私は、紅君とずっと一緒に暮らすことに決めた。二人だけで、二人の思い出の場所で暮らすんだ。

ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、二人だけで……。

日記はそこで終わっていた。最後の日付は今日のこの日である。かなり慌てて、そして昂奮して書いたらしく、終わりの方の字は判読するのも難しいくらい雑に書き殴られていた。おまけにいくつかの血痕も見られ、どうやら目の前の少女を梁に打ちつけながら書いたものだと思われた。

「朱音ちゃん……」

日記帳を握りしめる皐月の手が震えていた。

臙良の言った通り、朱音は犬神と融合していた。特別な修業など

せずとも、魂を融合させてしまえば力を行使することも可能だ。

だが、それはあまりに危険な行為。本当の自分を見失い、自分が自分で無くなってしまうことに他ならない。

同化した二つの魂は、相互に影響を与え合う。例え主体が朱音であったとしても、同化が進行するにつれ、その魂は犬神の影響も色濃く受けることになる。

犬神は、元々は呪詛に使われることもある下級の神である。つまりは、悪霊と紙一重の様な存在だ。そんなものと同化すれば、最終的にどうなるか。それは、言うまでもないだろう。

己の欲望を満たすため、手段を選ばぬ行動に出る。朱音の日記を見る限り、それは顕著に現れていた。紅に対する過剰な執着と依存心は最初からあったのだろうが、それがここにきて、犬神の力により加速度的に肥大化したのだ。

「こうしちゃいられないわ……。このままじゃ、紅ちゃんが……」

日記帳を放り捨て、皐月は天井裏を後にする。梁に打ちつけられた少女には申し訳なかったが、今は供養をしている暇はない。

果たして、朱音はどこに消えたのか。その心当たりに関しては、皐月も全くないわけではなかった。

日記帳にあった、二人の思い出の場所。幼き日に、紅と朱音がよく出かけていた場所が一つだけある。

「臙良さん。闇薙を……お借りしますね」

朱音の部屋に戻り、皐月は臙良の側に転がっていた刀を拾い上げた。そして、後のことを多恵に任せると、風のように狗蓼の家を飛び出した。

〜 終ノ刻　結末 〜

気がつくと、雨の降る音が聞こえていた。

薄暗い防空壕の中で、犬崎紅は自分の置かれた状況を少しずつ整理していた。壕の中に光はなかったが、赫の一族の特性として、光のない闇のなかでも紅の目はよく見えた。

今、自分は壕の中に置かれた椅子に四肢を拘束されている。縄目はきつく、寸分の遊びも許さないほどに、手首と足首に食い込んでいる。

いったい、朱音の身に何が起きたのだろう。あれは、本当に自分の知る朱音だったのか。疑問は次から次へと浮かんできたが、明確な答えを出せそうにはなかった。

外の雨音に混じり、何かが草をかきわけて、こちらに近づいて来る音が聞こえた。邪魔者を排除しに行くと言って朱音が出かけてから、かれこれ一時間程は経過している。ならば、あれは朱音が戻って来た音なのだろうか。

足音が徐々に大きくなり、壕の中へと入って来た。朱音かと思い首を上げた紅だったが、そこに立っていたのは思いもよらぬ人物だった。

「皐月さん……」

目の前に現れたのは皐月だった。髪も服も雨に濡れ、身体のあちこちから雫が垂れている。よほど急いでかけつけたらしく、息が上

がっているのが紅にも分かった。

「よかったわ……。どうやら、読みが当たったみたいね」

「読みって……皐月さんこそ、どうしてここへ！？」

「説明は後。それよりも、今はここから逃げ出すのが先よ」

そう言うと、皐月は一本のナイフを取り出して、紅の四肢を縛っている縄を器用に切った。

「大丈夫、紅ちゃん。ちゃんと、自分の足で立てるかしら？」

「少し、頭がふらふらするが、問題はないな。それよりも……これは、いったいどういうことだ」

「そうね……。とりあえず、ここから離れましょう。説明は、歩きながら話すわ」

本当は、今すぐにでも皐月の口から真実を知りたかった。しかし、朱音が戻って来ることを考えると、そうのんびりもしていられない。今の朱音が自分の知る朱音でないことだけは、紅も理解しているつもりだった。

壕の外に出ると、霧のような雨がべったりと張り付くように降って来た。山道に入ると、雨だけでなく濡れた草木までもが身体に張り付いて来る。額から流れ落ちる雫が視界を妨げ、不愉快なことこの上ない。

熊笹に覆われた山道を、皐月と紅は早足で下った。途中、何度か

木の根に躓きそうになるものの、なんとか転ばないようにしながら先を急ぐ。

「なあ、皐月さん。朱音は……あいつは、いったいどうなっちまったんだ！？」

歩く速度はそのままに、紅はたまらず皐月に尋ねた。皐月は後ろを振り向くことなく、背中を向けたまま紅に答える。

「朱音ちゃんはね、絶影と……狗蓼家の犬神と一つになったのよ」

「それは、憑かれたってことなのか」

「いいえ、少し違うわ。朱音ちゃんは、犬神を自らの魂の中に取り込んだの。退魔師としての訓練なんて受けていなかったけど、あの子にはそれだけのことができる程の潜在能力があったのよ」

「それじゃあ、朱音は……」

「ええ。最初から、あの子は自分の意思で行動していたわ。自分の意思で母親を殺し……その犬神を奪って、今度は紅ちゃんに手を出した不良を殺していったの……」

「そんな！！　朱音が自分から人殺しなんて……そんな馬鹿なこと、するはずがない！！」

認めたくはない。信じたくはない。だが、現実は残酷だ。この場において、皐月が自分に嘘をつく理由は何もない。

「あの子はね、紅ちゃん。あなたのことが好きだったのよ。その気

持ちが大きくなり過ぎて……それが犬神と融合したことで、もっと歪んだ形になって……目的のためならば、手段を選ばない行動に出るようになったのよ……」

そう、皐月が言ったとき、草に覆われた山道を抜けて県道に出た。だが、先を急ごうとする皐月に対し、紅はその場に茫然と立ち尽くしているだけだった。

「お、俺のせいだ……。俺が……あいつの気持ちに気づかなかったから……。あいつがおかしくなっていることにも気づかなかったから……」

雨の中、紅の声は震えていた。いつもの彼らしくない、小さく弱々しい声。

最近、朱音は確かにこちらを意識させるような素振りを見せることが多かった。その時点で、気がついているべきだったのだ。いや、本当は気がついていたはずだ。

朱音が自分のことをどう思っているのか。紅とて、まったく意識しなかったわけではない。幼い頃からの知り合いであったからこそ、朱音のことを愛おしく思う瞬間があった。最初は兄として、こと最近では男として、朱音に好意を持っていなかったと言えば嘘になる。

自分の気持ちに正直になり、相手を受け入れること。そんな簡単なことさえできなかった自分が、今になって悔やまれる。自分が朱音の気持ちを素直に受け入れてさえいれば、このような結末にはならなかったはずだ。

「皐月さん……。俺は……」

それ以上は、何も言葉が出てこなかった。ただ、この受け入れ難い現実に耐えるので精一杯だ。

足が止まり、これ以上は歩けそうにない。いや、歩きたくない。朱音を狂わせた原因が自分にあるならば、朱音と一緒に死んでしまいたい。それができれば、どれほどに楽なことだろう。

だが、紅がそう考えた瞬間、空気を叩くような音が辺りに響き渡った。頬に痛みが走り、紅は思わず叩かれた場所を手で押さえた。

「しっかりしなさいよ、紅ちゃん！　あなた、ここまで来て立ち止まるつもり！？」

気がつくと、皐月がこちらを睨みつけていた。紅を叩いた手はそのままに、未だ茫然としている紅にゆっくりと詰め寄る。

「確かに、朱音ちゃんのことは私も可哀想だと思うわ。でも、ここまで来たら、もう取り返しがつかないのよ。現実を受け入れて戦うか、それとも全てを放り出して、怪物になったあの子に食べられるか……どっちがいいか、ここではっきり決めなさい！！」

「それは……」

「紅ちゃんが、ここで逃げ出すっていうんなら、私も止めないわ。その代わり、私は一生紅ちゃんを恨むわよ。あなたはまだ生きているのに……それなのに、全てに背を向けて逃げ出すなんて……私は絶対に許さないからね！！」

いつもの人を食ったような目は、そこにはなかった。普段は悪女

を気取っているが、それが皐月の本性でないことは紅も知っている。

男を誘うような際どい冗談を連発することもあるが、あれはあくまで仮の姿。本当の皐月は、決して自堕落でいいかげんな生き方をするような女性ではない。こと生き様に関しては、誰よりも優柔不断という言葉を嫌っている。

頬の痛みがひいてゆくにつれ、紅の瞳にも再び光が戻って来た。

先ほどは、全てを放り出して逃げ出したいと思っていた。怪物と化した朱音に食われるならば、それも本望だと考えていた。

しかし、それは現実を受け入れず、己の命さえ投げ捨てて逃げることに他ならない。赫の一族の末裔として、そして何よりも一人の人間として、そんなことは許されない行為だ。

自分は生きなければならない。生きて、全てを見届けて、その上で現実を受け入れねばならない。それこそが、朱音に対して自分が果たすべき責任だ。朱音と共に闇に飲まれて死ぬことは、決して彼女に対する責任を果たすことにはならない。

「俺は生きるぞ、皐月さん。このまま生きて……全てを知る責任がある。そういうことだろう？」

「どうやら、分かってくれたみたいね。だったら、先を急ぎましょう」

時間は無尽蔵にあるわけではない。この山は、皐月ではなく朱音の領域だ。あまり同じ場所に留まっていれば、それだけ危険も増すことになる。

再び山を降りようと、県道を走り出す皐月と紅。が、次の瞬間、目の前に立ち塞がる者の姿を見て、二人の足は完全に止まった。

「あ、朱音……」

そこにいたのは朱音だった。祭りの時に着ていた浴衣はそのままに、霧雨の中、こちらをじっと見つめている。口元についた赤い血は、紅に生肉を給仕した時のものだろうか。一部は雨に流されていたが、それでもなお、朱音の唇の周りを褐色に染めていた。

「どこへ行くの、紅君……」

じりじりと、朱音がこちらに近づいて来る。皐月が紅を庇うようにして目の前に立つと、朱音の視線もそちらに移った。

「へえ……今度は皐月さんか……。まあ、誰でもいいけど……紅君を連れて行くんだったら、容赦しないよ」

「お生憎さまね。今のあなたは、もう紅ちゃんの知る朱音ちゃんじゃないわ。あなたは既に、こちら側の世界の住人じゃない。向こう側の世界の住人なのよ！！」

「それがどうしたの？　言っておくけど……皐月さんの力じゃ、私には敵わないよ……」

朱音が懐から、何やら白い紙きれを取り出す。道に撒かれたそれを見ると、どうやら真っ二つに引きちぎられた紙人形のようだった。

「こんな人形で、私を騙せると思ったのかな？　その辺のお化けだ

ったら通用したかもしれないけど……犬神様の鼻を持っている私は、いつまでも騙せないからね……」

朱音の口元が、にやりと笑みの形に歪んだ。皐月も身構えるが、それでも力の差は明白だ。なにしろ相手は、黒影に匹敵する犬神を取り込んだ存在なのだから。

人型。人の形を模して作った人形に、人間の爪や髪などを入れて名前を書く。呪いの藁人形の代わりにも使える物だが、上手く用いれば霊的な存在を欺くための身代わりとなる。

正面から戦っても敵わない。そう分かっていたからこそ、皐月は人型を山のあちこちに置き、朱音が迷っている間に紅を助け出した。しかし、朱音の力は皐月の予想を更に上回り、人型を用いても大した時間稼ぎにさえならなかったようだ。

朱音の瞳が、徐々に光を失ってゆく。血のように赤かった瞳が濁った赤銅色に染まり、全身から禍々しいまでの黒い気が発せられる。

（来る……！！）

退魔具を取り出している暇などなかった。

朱音の身体がその場に崩れ落ちると同時に、皐月に向かってどす黒い気の塊が襲いかかって来た。済んでのところでかわしたものの、もう少し反応が遅れていたら危なかった。

朱音の身体から離れた気が、徐々に人の形を成して行く。それこそが、朱音と犬神の融合した者の姿。妖魔と化した朱音の本体とも言える存在だった。

≪コウクンハ……ワタサナイ……≫

黒い影がこちらを向いた瞬間、頭の中に直接声が響いてきた。低く、地の底から響くような、重い声。その中に、かつての朱音であった時の面影は欠片もない。

影が、大きく太く伸び上がった。獣が唸るような声と共に、巨大化した影から四肢が伸びる。赤銅色の目が輝いて、銀色の刃をむき出しにした頭部が顔を出した。

「あれは……犬神！？」

そこにいたのは、紛れもない犬だった。いや、正しくは、犬の姿をした影だ。その大きさは、頭だけでも皐月の身の丈に匹敵する程のものがある。臙良の使役する黒影よりも、さらに一回り巨大だった。

今や、朱音は完全に犬神と一つになっていた。改めて、皐月はその力の強大さを知り震え上がる。とてもではないが、こんな相手とまともに戦うだけの力など持ち合わせていない。

皐月の手が、臙良から借り受けた刀へと伸びた。犬崎家に代々伝わる退魔の刀、闇薙の太刀。生者も死者も問わず、貪欲なまでに魂を欲して全てを食らわんとする諸刃の剣。

自分の力では、闇薙の太刀を振るえるのはせいぜい一度が限界だろう。それ以上は、こちらの魂が先に太刀に食われてしまう。危険なかけではあるが、相手の隙を見て必殺の一撃を叩きこむ他にない。

皐月が動かないのを見て、朱音の変化した犬神が地を蹴った。

速い。こちらの思っていた以上のスピードで、相手はこちらとの距離を詰めて来た。これでは一撃を食らわせるどころか、太刀を抜くことさえままならない。

「なるほど……。さすがは犬神の力を取り込んでいるだけあるわね」

口ではそう言いながらも、皐月の中に余裕はなかった。このまま戦っていては確実に負ける。ならば、出し惜しみをしている余裕などない。

再び、敵が大地を蹴った。今度も真っ直ぐに皐月を捉え、銀色の牙をむき出しにして襲いかかる。

だが、皐月とて黙ってやられるつもりは毛頭なかった。向かって来る相手に対し、懐に隠した護符を取り出して投げつける。皐月の用いる護符の中でも、特に強い力を持つものだ。その辺にいる不浄霊であれば、一枚使うだけでも十分に封じられるほどの物である。

護符が宙を舞い、敵の身体に吸いつくようにして貼りついた。が、瞬間、その護符から緑色の炎が上がると、一瞬にして消し炭と化す。

「そんな……！？　あれだけの護符を受けて、足止めにもならないなんて！！」

攻撃がまったく通用しなかったことを悟り、皐月の顔に驚愕の表情が浮かんだ。その間にも敵は更に皐月との距離を詰め、咆哮と共に襲いかかる。

このままではやられる。覚悟を決め、再び闇薙の太刀に手をかける皐月。こうなれば、刺し違える覚悟で敵の懐に飛び込み、太刀による一撃を食らわせるしかない。

ところが、皐月が踏み出そうとしたその時、今度は敵が動きを止めた。ふと、足元を見ると、なんと皐月の影が細長く伸びている。その影は地面から盛り上がるようにして起き上がり、瞬く間に獣の姿を形作って行く。

「黒影……！？」

それは、臙良の使役する犬神、黒影だった。恐らくは臙良が皐月を助けるために使わせたのだろうが、それにしても、いつの間に自分の影に入り込んでいたのだろう。

戦うための姿となった黒影が、唸り声を上げて敵を威嚇した。その身体は相手よりも一回り小さいが、気迫では決して負けていない。

黒影と、朱音の変化した犬神が同時に飛んだ。二体の影は空中で交錯し、その身体を互いにぶつけ合う。が、やはり体格差は隠しきれないのか、黒影の方が押し負けて弾き飛ばされた。

バランスを崩した黒影に、敵の更なる追撃が迫る。しかし、黒影もただやられているわけではない。なんとか頭だけを相手の方に向けると、その口から青白い炎を吐き出した。

破魔の炎。あらゆるものを焼き尽くし、魂さえも灰にする、犬神が放つ最後の武器。宵闇の世界を切りさくようにして、黒影の吐いた炎は容赦なく敵を包みこんだ。

「や、やった！？」

炎が消え、その中から朱音の変化した犬神が現れる。さすがに今度は効いたのか、全身から白い煙を上げていた。

相手は間違いなく弱っている。そう確信した皐月は、黒影と共に攻めに出た。黒影が再び炎を吐き、それに合わせて皐月も闇薙の太刀を引き抜く。瞬間、引き抜かれた太刀の刃から黒い気が溢れ出し、銀色に輝く刀身を包みこんだ。

この一撃で終わりにする。魔物と化した朱音を元に戻す術はない。ならば、せめて人の手で、あるべき世界へと帰してやることが救いになる。

黒影の炎が、皐月の太刀が、共に朱音の姿を変えた犬神に迫った。これで惨劇は終わりを告げる。破壊された日常は、元の平穏を取り戻す。そう、確信した時だった。

敵の目が、再び妖しく輝いた。咆哮と共に口を開き、その奥から緑色の炎が吐き出される。敵の炎は黒影の吐いた青白い炎とぶつかり合い、それを飲み込む様にして押し戻した。

「黒影！！」

皐月の目の前で、黒影が敵の吐いた炎に包まれる。が、それに気を取られている暇などない。ここで敵を仕留めねば、次にやられるのは自分自身だ。

「このっ……よくも！！」

黒影を攻撃した一瞬の隙を狙い、皐月は相手の真横に回り込んだ。そのまま闇薙の太刀を握りしめ、その切っ先を相手に突き立てる。

間合い、スピード、そのどれもが完璧な攻撃だった。相手の死角から、まったく無駄のない動きで急所を狙う。少なくとも、皐月はそう思っていた。

だが、そんな皐月の希望も虚しく、彼女の一撃が敵を仕留めることはなかった。

「くっ……」

刀の先が、相手の口によって受け止められていた。太刀から湧き出る黒い気が相手の鼻先を蹂躙していたが、それさえも意に介していない。

獣が、刀身を咥えたまま大きく頭を動かした。皐月の身体は一瞬にして宙を舞い、激しく大地に叩きつけられる。刀が手から離れ、地面を転がった。

（これが……犬神と融合したあの子の力……。勝てない……私には、とても……）

見ると、自分の横では黒影が、その身体から煙を上げて横たわっていた。未だ消滅はしていないようだが、とても戦える状態ではない。

持てる全てを出しつくしても、相手にはまともな傷一つ負わすこともできない。目の前で見せつけられた、圧倒的な力の差。恐怖に身体が硬直し、立ち上がることさえも敵わない。

絶望。その二文字が皐月の脳裏をよぎった。まともに戦っても勝てる相手ではない。奇策を用い、犬神の力を借りてもなお、その力の差を埋めることはできなかった。

このまま自分は、ここで朱音に食われるのか。他の犠牲者と同じように、その魂まで無残に蹂躙されて。そう、皐月が覚悟を決めた時だった。

「止めろ、朱音！！」

雨音をかき消すようにして響いた声に、獣の動きがピタリと止まった。

「もう……止めるんだ……。それ以上、人を殺すんじゃない……」

声の主は、紅だった。その場にいる者の視線が彼に集まり、獣は徐々に人の形へと姿を変えて行く。赤銅色の瞳はそのままに、朱音の肉体から離れた時の姿へと戻っていた。

≪コ……ウ……ク……ン……≫

人の姿に戻った影が、ゆっくりと紅の方を振り向いた。瞳と牙は獣のままだが、その影は、やはりどこか朱音の姿にも似ているように思われた。

「朱音……もう、止めてくれ……。俺のために……そんな姿になってまで、人を殺すなんて……。そんなこと、俺はこれっぽっちも望んじゃいない！！」

紅の声が、再び辺りの空気を震わせた。しかし、その声が聞こえているのかいないのか、朱音の影は、ずるずると流れるようにして、徐々に紅の方に近づいてゆく。

≪ヒト……ツニ……ナ……ロ……。ワタ……シト……ヒト……ツニ……≫

また、朱音の声が紅の頭に響いた。雨の中、ねちゃねちゃという不快な音がして、朱音の影に亀裂が入る。

「あ、朱音……」

影が、裂けるようにして真っ二つに割れた。頭部から腹部にかけて、まるで食虫植物のようにして、朱音の影はその身を裂きながら紅に迫る。裂けた中身からは触手のような物が迫り出して、紅をその中に飲み込まんと蠢いていた。

もう、あれは朱音ではない。自分の知る朱音は、もうこの世にはいない。今、目の前にいるのは、情念の塊となった一つの怪物だ。

これ以上、見ていたくはなかった。変わり果てた朱音の姿も、その力を行使して人を殺す様も。

「許せ……朱音……。今、俺がお前の呪縛を解き放ってやる……」

足元に転がる闇薙の太刀を拾い上げ、紅はそれを構えて足を踏み出した。一歩、また一歩と足を出す度に、刀を握る手に刺すような痛みが走る。

闇薙の太刀は、敵味方問わずに貪欲に命を食らう武器だ。当然、

使用する者の力が弱ければ、その魂も削られてしまう。先ほどの皐月もそうだったが、修業中の紅にとっても、長時間の使用は命にかかわる。

両手に伝わる痛みに耐えながら、紅もまたゆっくりと朱音の影との距離を詰めた。互いに手を伸ばせば触れられるまでの距離に近づいたところで、紅は手にした刀を逆手に持ち替える。

影の中から伸びた触手が紅の腕や首に巻き付いた。不思議と、痛みや苦しみはない。が、命を吸われていることだけは確かなようで、触手の触れている部分の感覚が、徐々に麻痺してなくなってきた。

朱音はこのまま、自分の魂を食らうつもりなのだろう。そうやって、魂を己の中に取り込むことで、永遠に一つになろうとしている。犬神を自分の中に取り込んで、その力を我が物とした時のように。

これ以上、魂を削られることは危険だった。紅は一瞬躊躇うような顔をしつつも、手にした太刀を影の中心に突き立てる。実体のない、霊的な存在が相手であるにも関わらず、刃が肉に食い込む時と同じ感触がした。

≪ア……アァァァッ！！≫

触手が暴れ、絶叫が紅の頭の中に響いた。闇薙の太刀に食われる痛みに、朱音の影が悶絶する。

気がつくと、紅の瞳から涙が溢れていた。それは、魂を削られた痛みから来るものではない。朱音を救うことのできなかった、自分自身に向けられたものだ。

「……滅」

嗚咽を飲み込み、紅は刀から手を離して印を結んだ。その動きに呼応して、刀身から黒い気が一度に溢れ出す。

それは、浄化と言うにはあまりにも禍々しい光景だった。ミミズとも蛇ともとれる黒い気が、無数に刀身から溢れ出して朱音の影を食らう。影も抵抗を試みるが、刀から溢れた気はあざ笑うようにして、次々と影の本体を貪っていった。

逃げ出すことも、獣に姿を変えることもできず、影は刀に食われていった。べりべりと、皮を剥ぎとられるようにして、その身体は徐々に黒い気の中に飲み込まれてゆく。

≪コ……ウ……ク……ン……≫

影が、最後の足掻きとして紅に触手を伸ばす。しかし、それさえも直ぐに黒い気に絡め取られ、成す術もなく食われてゆく。

≪さ……よ……な……ら……≫

闇に飲み込まれる瞬間、朱音の声が紅の頭に響いた。気がつけば、その声は紅のよく知る朱音のものに戻っていた。

カラン、という音がして、食事を終えた刀が転がった。いつの間にか雨は止み、そこには紅と皐月だけが残されていた。

「朱音……！！」

思いだしたようにして、紅は後ろを振り返る。そこには浴衣姿の

朱音が、うつ伏せになったまま倒れていた。

「朱音……」

濡れた身体を、紅はそっと抱き上げる。名前を呼んでも、返事が返って来ないことは分かっていた。

朱音は消えた。犬神と一つになったまま、闇薙の太刀にその魂を食らい尽くされて。

紅のことを想うからこそ、紅しか頼る者がいなかったからこそ、朱音は紅の力になりたいと強く願った。だが、その純粋すぎる想いは結果として闇を呼び、朱音を怪物へと変えてしまった。

「畜生……畜生……」

朱音の顔が、ぼうっと滲んで見えた。赤い瞳から零れ落ちる涙が、物言わぬ朱音の頬を静かに濡らして行く。

救う方法などなかった。融合した魂は、二度と切り離すことはできない。犬神と溶け合って一つになってしまった朱音は、既に紅の知る朱音ではない。闇薙の力を使って無に帰すことでしか、朱音を闇の呪縛から解き放つ方法など存在しなかった。

だが、しかし、それでも自分が朱音を手にかけたということは変わらない。朱音の影に刃を突き立てた時の感触が、まざまざと両手に蘇ってくる。

「う……うわぁぁぁぁっ！！」

やり場のない怒りと悲しみが叫びとなり、漆黒の闇に包まれた山の中に響き渡った。

※　※　※　※　※　※　※　※

それから冬が来て、春が来て、夏が来た。そして、また秋を迎え、再び冬が訪れた。

四国とはいえ、冬の土師見村は麓に比べれば寒かった。その日は珍しく雪が降り、村と山々を白く染め上げていた。

山中にある滝に打たれながら、犬崎紅は瞑想を続けていた。冬だというのに、身につけているものは下着のみ。が、既に慣れてしまっているのか、不思議と苦痛は感じなかった。

山の霊気を含んだ水を全身に受け、紅はその感覚を極限まで研ぎ澄ます。その日の修業に入る前、禊ぎとして滝の水で身を清める。季節に関係なく、今の紅にとってはこれが日課となっていた。

「やはり、ここにいたか、紅よ」

滝壺に近づく足音を聞き、紅は閉じていた目をゆっくりと開いた。虹彩が血のように赤いのは変わらなかったが、その瞳には、一年前よりもどこか深い影が射しているようだった。

「なんだ、婆さんか。俺を呼びに来たということは……臙良の爺さんの使いか？」

「ああ、そうじゃ。今日は、お主にとっては門出の日じゃからのう。先に、犬首塚で待っておると言っておったよ」

「だったら、急いだ方がよさそうだな。大切な儀式の日に、爺さんをいつまでも待たせるのは無粋だ」

そう言って滝から出ると、紅は岸に畳んでおいた自分の服を身に付けた。もっとも、服とはいえ、質素な黒布で作られた古臭い衣なのだが。

草履を履き、傘を頭に乗せ、紅は多恵に案内されるままに山を降りた。その枝に白い雪を乗せた木々を横目に、ふと今までの修業のことを振り返った。

※　※　※　※　※　※　※

紅が本格的な修業を始めたのは、朱音が亡くなったすぐ後のことだった。

朱音が亡くなってから、紅は改めて臙良に修業を頼み込んだ。もう、あんな思いはしたくないし、誰かにさせたくもない。そのためには、一刻も早く自分が退魔師として独り立ちする必要がある。そう考えてのことだった。

退魔師として一人前になれるなら、どんな修行にも耐える覚悟がある。その時、紅は臙良にそう告げた。だが、そんな紅を待っていたのは、朱音の死に追い打ちをかけるような、更に過酷な現実だった。

修業を頼み込む紅に、臙良が見せた一枚の写真。そこに写っている者を見た途端、紅の顔が険しくなった。

写真の中にいたのは、今は亡き紅の母である美紅だった。その隣にいるのは、恐らくは母の夫だろう。紅にとっては、父親に当たる人物だ。

どこにでもある、仲睦まじい夫婦の写真。しかし、紅にとってこの写真は、そんな単純なものではなかった。

母の隣に写る、優しい笑顔を浮かべた青年。その男の写真を、紅は一度朱音の部屋で見たことがある。

狗蓼宗助（くりょうそうすけ）。朱音の父親であり、彼女が産まれてから間もなくして、交通事故で亡くなったと聞いていた。その宗助が、なぜ自分の母と一緒に写っているのか。そんな紅の疑問に対し、臙良から返って来た答えは残酷な真実だった。

昔、まだ紅が産まれてもいなかった頃の話である。

紅の母となる以前、美紅は臙良の後を継ぎ、優秀な退魔師として活躍していたらしい。若くして臙良から黒影と闇薙の太刀を譲り受け、村の周りで起きる奇怪な事件を解決していた。

そんな折、彼女が出会ったのが宗助だった。彼は赫の一族とは無縁の男だったが、二人が惹かれ合うのに、そう時間はかからなかった。

やがて、美紅は子を身籠り、それに伴って黒影と闇薙の太刀を臙

良に返上した。宗助は犬崎家に婿入りし、二人は幸せの絶頂にあった。こと、紅が産まれた際の喜びようと言えば、筆舌に尽くし難いものがあったという。

だが、幸福な日々は長くは続かなかった。

紅を産んでから半年ほど経ったある日、美紅の下に事件の報が飛び込んできた。それこそが、あの元村巡査の息子が消えた神隠し事件である。

その日、たまたま臙良は、仕事の都合で土師見村を離れていた。頼りになるのは、もはや美紅しかいない。犬神も武器もなかったが、それでも美紅は元村巡査の息子を取り戻すために山へと入った。そして、見事に事件を解決した翌日、戦いの傷から彼女は帰らぬ人となった。

妻の訃報を聞いた際、宗助は三日三晩食事もろくに喉を通らない有様だったという。自分が妻にとって、何の力にもなってやれなかったこと。その結果、妻が二度と自分の下に戻らなくなってしまったこと。

大切な者の死は、宗助の心を確実に蝕んだ。結婚前とはうって変わり、塞ぎ込んだ生活を続けるようになった。そして、そんな時に彼のことを支えたのが、他でもない狗蓼朱鷺子だった。

朱鷺子と美紅は、もともと親戚の関係にあった。故に、宗助とも面識があり、美紅と三人で他愛もない会話に華を咲かせることも多かった。

自分の心の隙間を埋めるようにして、宗助は朱鷺子に癒しを求め

た。朱鷺子もまた、それを受け入れて、やがて二人はより深い関係を持つようになった。

翌年の春、朱鷺子は宗助の子を身籠っていることを臙良に伝えた。話を聞いた臙良は、何も言わずに宗助を朱鷺子のところへ婿に出した。

もともと、宗助は赫の一族とは関係ない。こちら側の世界の住人でしかない宗助に、向こう側の世界と関わる者の宿命を押しつけるのは、臙良としても本意ではなかった。

幸いにして狗蓼家は、既に退魔師としての仕事から足を洗っていた。朱音が産まれた後、朱鷺子は犬崎の家との関わりを必要最低限に絞り、美紅と宗助の関係も紅に秘密にして欲しいと頼んだ。

それは、向こう側の世界に関わることで大切なものを失った、宗助に対する朱鷺子なりの思いやりだったのかもしれない。しかし、その宗助も不慮の事故で亡くなると、朱鷺子も犬崎の家を頼らざるを得なくなった。

朱音と自分が異母兄弟。その事実を知った時は、さすがに紅も臙良を責めた。なぜ、今まで真実を隠していたのかと。なぜ、今になって真実を話す気になったのかと。

そんな紅を、臙良はあくまで厳しい言葉で冷静に諭した。

元村巡査の事件で、紅の母は亡くなった。そして、その後に父である宗助は、母の親戚であり親友でもある女性と関係を持った。その事実を知って、果たして紅が元村や宗助、果ては朱鷺子や朱音のことを、恨まずに生きてゆけるのかと。

――――闇を用いて闇を祓う。それが赫の一族の生業である。

最後に臙良は、紅にその言葉を残して話を終えた。

やるせない想い。歪んだ家系。決して陽の当たる場所に出ることはない、向こう側の世界の住人を相手にする仕事。それらの闇を受け入れ、そして打ち勝つことができなければ、赫の一族としての務めは果たせない。ただ、力を求めるだけであれば、それは朱音と同じ末路をたどることになる。

臙良は紅に問うた。己の中の闇を受け入れ、それに立ち向かう覚悟があるかと。一族に課せられた咎を受け継ぎ、己の業をその身に背負い、闇の者と戦い続ける覚悟があるかと。

紅はそれに、無言のまま静かに頷いた。

※　※　※　※　※　※　※

ざく、ざくという、雪を踏む音が聞こえて来る。臙良の待つ犬首塚は、もう目と鼻の先だった。

山の中に、隠されるようにして作られた小さな祠。古びら木戸を開けると、そこには臙良が座っていた。

「来おったか……。いよいよ、この日がやってきたな、紅」

自分の前に座する紅を見て、臙良が言った。

朱音に刺された時の傷がもとで、臙良は刀を持って戦うことのできない身体になった。その腰は少しだけ曲がり、以前よりも少し老いが進んだように見えた。

「では、始めるぞ。今からお前に、黒影を譲り渡す」

臙良の膝の上には、犬の首のミイラと思しき物が乗っていた。かなり古いものらしく、完全に干からびて元の面影はない。

犬神とは、元は強い恨みを持って死んだ犬の霊である。その作り方は、実に残酷極まりない。

犬を首だけ出して地面に埋め、その舌がぎりぎり届かないくらいの位置に餌を置く。そうして生殺しの苦痛を味わわせ、空腹が絶頂に達したところで首をはねる。そして、その首を人の往来する道の真ん中に埋め、多くの人にその上を踏ませて恨みの念を醸成する。やがて、その恨みや憎しみが頂点に達したところで首を掘り返し、祠に祀って神とするのだ。

犬神だけではない。外法使いの退魔具として、犬崎家に伝わる闇薙の太刀。あれもまた、闇を用いて闇を祓う、諸刃の性質を持った刃である。

その昔、千人もの罪人の首をはね続けたとされる一振りの刀。やがて、その刀に宿った負の力は、自ら貪欲に魂を食らうようになったという。それこそ、生者も死者も問わず、ひたすらに魂を貪る妖刀となった。以来、魔封じの呪縛を施した上で、必要に応じて犬崎

の家の人間に用いられ、今日に至る。

御霊信仰を利用した、怨霊から生み出された下級神。そして、数多の人の血を啜り、果ては魂までも食らい続ける呪われし刀。それらの存在は、赫の一族が代々背負ってゆかねばならない咎そのもの。

その咎を力に変え、使役する者こそが外法使い。彼らに必要とされるのは、己が怨霊の負の力に毒されないだけの強い意志。

赫の一族としての力を身につけるため、紅は臙良の課した厳しい修行に耐え続けた。今までは早朝に剣の稽古をする程度だったのが、朱音の死をきっかけに何かに目覚めた。それこそ、人が変わってしまったかのように、外界との接触を絶って修業に打ち込んだ。

臙良の手が、膝に乗せられた犬の首をゆっくりと撫でる。犬の目と鼻、そして口の部分から、なにやら黒い影が噴き出してくる。

影が紅の身体に重なり、その中に吸い込まれるようにして消えて行く。自分の影が徐々に浸食され、犬神が宿って行くのがはっきりと分かる。

犬神は、使役する者の影に憑く。臙良の教えを思い出しながら、紅は自分が赫の一族として、戻ることのできない場所まで来たことを感じていた。

※　※　※　※　※　※　※　※

薄暗い壕の中で、犬崎紅は茶碗に盛られた赤い実を見つめていた。

幼い頃、朱音がよく赤飯に見立てて遊んでいたものだ。

あれからもう、二年ほどの月日が流れた。今、自分は外法使いの退魔師として、闇に巣食う向こう側の世界の住人たちと戦う日々を送っている。

生まれながらにして強い力を持ったが故に、その力に飲み込まれて闇に堕ちる。そのような者を生み出さないためにも、自分は闇と戦い続けねばならない。火乃澤町に留まり、九条照瑠を守ることを決意したのも、そういった想いがあるからだ。

兄と妹。幼馴染。そして、恋人未満であり友達以上である関係。

色々な意味で、朱音は紅にとって初めての女だった。そして、そんな彼女の命を絶ったのもまた自分。その罪の意識は、決して忘れようにも忘れられない。

贖罪。照瑠の父である九条穂高に、紅が告げた言葉である。常世の者から現世の者を守るのは、自分にとっては正に贖罪なのだ。

こんなことをして、一族の咎が軽くなるとは思わない。照瑠を守ったところで、朱音を殺した自分の罪が許されるはずもない。

そう、頭では分かっていても、今の紅にはそれ以外に罪を償う術が見当たらなかった。つくづく、自分でも不器用な男だと思う。闇を用いて闇を祓い続けることでしか、己の生きる道を見つけられないというのだから。

時刻はもうじき、昼を迎えようとしていた。南の空に昇った夏の太陽が、壕の外を温かく照らしている。

盆の時期は、先祖の霊が帰って来る季節でもある。しかし、朱音の魂は、決して現世に戻ることはない。否、常世にも現世にも、朱音の魂は既に存在しないのだ。

闇を食らいて闇を薙ぐ。それこそが、紅の使う闇薙の太刀の力だ。その刀に食われた魂は、全てを失い刀の闇に同化される。己の意思も、記憶も失い、存在そのものが無に帰する。

壕の入口まで戻り、紅はふと後ろを振り向いた。そこには先ほど自分が置いた茶碗があるだけだったが、紅にはなぜか、幼き日の自分と朱音の姿が見えるような気がしてならなかった。

――――ねえ、紅君。紅君は、大きくなったら何になるの？

――――俺は、普通に爺ちゃんの後を継ぐつもりだよ。そういう朱音こそ、何になりたいんだ？

――――だったら、私はお嫁さんになる。紅君が大きくなったら、私、紅君のお嫁さんになる！！

あとがき

猟闇師シリーズも、早くも四作目を迎えました。根性無しの自分としては、ここまで続いたことだけでも奇跡に値します。本当、この短期間に、よくもまあここまでの話を書けたと思います。

今回は犬崎紅の過去を語る話でしたが、実はそれ以上に、私の趣味が全開に現れた作品でした。

今だからこそ白状しますが、私は真正のヤンデレ好きです。世の中ではツンデレだのクーデレだの、私の理解できない色々なデレが持てはやされているようですが、私は断然ヤンデレ派です。

人前で彼女に罵倒されても、はっきり言ってウザいだけです。

人前でクールに振舞われれば、こちらも意思疎通に困る場面が出て来ます。

その点、心を病む程に相手を愛するという人間は、絶対に裏切る心配がありません。愛する人のために死ねます、と言えるような女の子の愛は、疑う余地などないはずです。そこまで自分を頼り、信頼し、こちらのために尽くしてくれる女性ならば、私は刺されても本望です（オイ

話が少々危険な方向に行ってしまいましたが、私がヤンデレ好きなのは本当です。ヤンデレ主体の話は悲劇で終わることが多く、私の作品も例外ではありませんが、それでも安っぽい恋愛ゲームのヒロインなどよりも、よほど誠実に見えてしまうんですよね。それこ

そ、純愛として成就するか鮮血の結末となるかは、まさに主人公の誠意次第という感じで……。

なお、今回最も苦労したのは、実は登場人物の名前でした。直系の赫の一族である人間には意図して赤や朱色などをイメージする名前をつけたのですが、これが一苦労。

紅や朱音はまだ分かりますが、臙良（＝臙脂）などは、ほぼ強引なこじつけ。二人の母親の名前も、『紅⇒美紅』，『朱音⇒朱鷺子』のように、子どもから逆に一文字を貰う形でつけています。

ちなみに、朱音の名前は名字も含め、今回の登場人物の中で最も色々な意味を込めた名前です。気になった人は、イヌタデとアカネの花言葉を調べてみて下さい。朱音の名前の由来が、その性格に起因しているものだと分かるはずです。

２０１０年　１０月１０日（日）　　雷紋寺　音弥

あとがき（後書き）

花言葉調べるなんて面倒臭い！！
そういう人は、この後書き部分を下にスクロールしてください。
朱音の名前に関するネタばれがあります。

【イヌタデの花言葉】
あなたの役に立ちたいの……。

【アカネ（茜）の花言葉】
私を想って……。

はい、実にヤンデレにぴったりの花ですね。
二つ合わせて、狗蓼朱音（＝イヌタデ茜）というわけです。

ちなみに、朱音が紅のために使っている赤飯代わりの実は、あかまんまと呼ばれるイヌタデの実です。
田舎の子は、本当に飯事でイヌタデの実を赤飯に見立てて使うのだとか……。

今回は、こんなところにも、ヤンデレ的な遊びを入れてみました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1197o/

猟闇師　～ 赫の一族 ～

2011年6月4日21時30分発行